はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順

……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる**　→　**テーマが判明**することが多い。さらには、「〇〇と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テスト現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。**ただし選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　**※句点なし！**（1点減点）

設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則

ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　**※句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語　語句

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒　一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**……本文中では、**「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし**……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランＣをオススメします。

プランＡ……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランＢ……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランＣ……第三講までプランＢで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランＡ
プランＤ……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、ＡとＢを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランＡ、奇数の講義ではプランＢというように

予習の時間＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講はその１が八分、その２が十二分、なお国公立大学など記述問題を含む講では二十五分が基本となります）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンＣがオススメです。

パターンＡ……右の基本時間通り
パターンＢ……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンＣ……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率
（例えば第三講なら全部で十三題）

○私大……………（第一講その１・三講・四講・七講・八講・九講・十三講・十四講・十七講・十八講・十九講・二〇講・二十三講・二十四講）→**六十五％以上**
○国公立大…………（第六講・十一講・十六講・二十一講）→**五十五％以上**
○共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その２・二講・五講・十講・十二講・十五講・二十二講）→**八〇％以上**
○復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Z会）……試行調査2回分＋オリジナル2回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Z会編集部（Z会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『Z会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『入試精選問題集7　現代文』（河合出版）……難関私大および国公立大二次向け

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（KADOKAWA）

教材選定について

- 有名難関大学の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（日本文化論・科学論・歴史論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》……p.10
入試現代文の導入　その２《小説》……p.12
第二講　日本文化論……p.19
第三講　情報化社会論……p.25
第四講　近代化論……p.30
第五講　小説その２　物理と心理……p.35
第六講　学問論……p.43
第七講　歴史論……p.48
第八講　現代社会論……p.53
第九講　民俗学……p.58
第十講　小説その３　日常と非日常……p.64
第十一講　科学技術論……p.71
第十二講　芸術論……p.76

第一講　入試現代文の導入　その1《評論》

ウソが本来どれほど無邪気なものであったかは、子供を実験していると自然にこれを認めることができると思う。ウソをつき得る小児は感受性の比較的鋭い、しかも余裕があって外に働きかけるだけの活力をもった者に限るらしいから、一つの学級でも一人あったりなかったりするほどに稀である。もちろん手ごたえがあるたびにその念慮は強くなり、技術も進んで悪用の端を開くことであろうが、それにしたところで彼等のウソは［Ａ］ものであった。私の試験に供した五歳の女の児などは、笑って聴いていると止めどもなく出鱈目（デタラメ）を重ねて行ったが、あべこべにこちらがそれを信じたような顔をすると、慌てて「今のはウソなのよ」と言って念を押した。これがもう少し大きな児になるとうっかり深入りしてつい「ウソだッ」という機会を失うらしいが、そんな場合には内心大いなる不安を感ずるようである。この［Ｂ］時もしくは加減というようなものは、文字にこそ現わせないが誰にでも測定し得るもので、従って知りつつその限度を踏み越えて行くところに、そこに善悪の岐路は示されているかと思う。我々は必ずしも今後も無差別に、ウソを礼讃しなければならぬ必要はない。ただもう少し多くの同情をもって、ウソつきが泥棒になって行く経路を、考察してやるのがよかったのである。

歴史的にこの沿革を見ると、以前はウソつきは一つの職であった。業とまでは言えない村々のおどけ者でも、常に若干の用意と習熟とがあり、誰にもまねのできない抜きん出た一人はよく知られ、それを特長として人からも承認されるのみか、少しく技能が衰えるとたちまち取って替ろうとする者が現われるなどは、いずれもその地位の偶然でなかったことを思わせる。即ち名声をもって［Ｃ］形の報酬としていた点だけは、学者文人などとも大して異なるところはなかったのである。

（柳田国男『不幸なる芸術』）

問1　空欄Ａに入る最も適当な語を、次から選べ。

イ　深い　　ロ　清い　　ハ　良い　　ニ　ひどい　　ホ　まずい

問２　空欄Ｂ・Ｃに入る最も適当な語（漢字一字）を楷書で書け。

問３　次の文は問題文の論旨の前提となっている同じ論文中の別の箇所からの引用である。空欄Ｘ～Ｚに入る語の組み合わせとして最も適当なものはどれか。あとに掲げるイ～ホから選べ。

たとえば秋田のバク、米沢のテンツ、越後のドスや関東のチク、それからもっと広く行われているジラ・テンポ・テンボウの類も、自然に覚え込んだ土地人でないと、的確にその内容を捉えることは難しいが、それがすこぶる戯言というものと、似通っていたことだけは想像し得られる。現在はもちろん標準語のウソという語の成長と呼応して、これにも若干の複雑性を加えたかも知れぬが、とにかくどこの田舎に行って見ても、今はまだウソと［Ｘ］と、もしくは［Ｙ］と［Ｚ］と、即ち笑うべき虚言（ソラゴト）と憎むべき虚言（キョゴン）との、二つ別々の名詞の併存を必要としているのである。

イ　Ｘ…イツワリ　Ｙ…デタラメ　Ｚ…ゴマカシ
ロ　Ｘ…イツワリ　Ｙ…ゴマカシ　Ｚ…デタラメ
ハ　Ｘ…デタラメ　Ｙ…イツワリ　Ｚ…ゴマカシ
ニ　Ｘ…デタラメ　Ｙ…ゴマカシ　Ｚ…イツワリ
ホ　Ｘ…ゴマカシ　Ｙ…イツワリ　Ｚ…デタラメ

第一講　入試現代文の導入　その２《小説》

次の文章は、井伏鱒二の小説『朽助のいる谷間』の一節で、「私」の祖父がかつて所有していた山の番人である朽助というハワイ帰りの老人と、その孫のタエトという混血の少女が住んでいた谷間の家が、ダム工事のためにいよいよ水没することになった場面である。

まる四日ほど雨が降りつづいた。そして五日目に晴れて、谷間の樹木は最も明快な緑色を示した。

伐採夫達は四日間で彼等の目的を達して、五日目の晴天には斧の音を響かせなかった。全く彼等は短い期間で手際よく彼等の任務をはたしたものである。山腹の樹木は、堤防と同じ高さまで一本も残らず刈りあげられてしまった。そこに池の水をすっかり乾かした時の姿を現して、谷間としては最後の姿であったのだ。私と朽助とは堤防の草の上に立って、すっかり形相を変えた谷間の風景を互いに驚き合った。

「ああはや、なんたる事じゃろ！　さては大きな池ですがな！」

「ここから見ると、五つの谷しか見えない」

山腹の曲線は、樹木の伐採線によって、五つの湾曲を示していたのである。朽助は私の観察を否定して、左側の突き出た峰のかげに更に四つの谷間があることを教えてくれた。

(注)「ではやはり魔物が住むね？」

「A <u>住みますとも！　今にも魔物が住みそうですがな</u>」

樹木を伐り払われた急斜面は灰色の地肌を見せ、池の底となるべきところは赤土のゆるやかな勾配であったのだ。その中心を谷川が流れていた。この過渡期の池は、殆ど池としての魅力を現していなかった。考えようによっては、池が目をむき出して怒っているところではないかと思われた。そういう殺気立った池の水のない水底に、もとの朽助の家は取り払われないで建っていたわけである。私と朽助とは堤防から池の底に走り下りて、池の底の最も深い場所となるべきところを二人で歩きまわった。そし

て朽助は或る一箇所に立ちどまって、地面を見つめながら呟(つぶや)いた。

「魔物というものは、いっそここいらから涌いて出るのかもしれませんでがす」

二人の役人がいた。彼等は共に洋服の上衣を脱いで、人々を指揮した。そして二つの樋(ひ)を閉じさせた。鉄のハンドルを回すと大小三つの歯車が急転して、芝居の緞帳(どんちょう)ほどもある幅広な板が降りて来て、樋の口を閉鎖する仕掛けであった。谷川の水は水量を失っていなかったので、五分間もたたないうちに、谷川は自らの姿を氾濫する水のなかに没してしまった。私と朽助とはタエトと一しょに、一本の木立の下へ行って見物していたのである。朽助は、しきりに同じことをくり返して言った。世間というものがあさましいことになったなぞと言ったのである。

池の底には赤土の斜面に濁り水の池の姿ができはじめた。水面は極度に凪いで、それは水が急速度に増えて行っていることに対して冷淡な様子を見せたが、水岸では寄せ波ばかりの満潮の光景であった。

朽助達の住んでいた家は、段々畑の下で次第に孤独の度を深めて行った。すでに牛小屋も周囲の樹木も取り払われていたのであるが、何故か人々は朽助の住居にだけは破壊の手を遠慮していた。けれど朽助にとっては、人々の遠慮が却って悪かった。おし寄せて来る水は、空家の土間に侵入しはじめた。

そこで朽助は自分がその土間に立っているかのように周章(あわ)てはじめたのである。

「これはしたたり、津波が来たるぞ！　ああはや駄目なようでがす」

私は彼の絶望的にふりまわす腕を捕えて、彼に言った。そんなに大声で狼狽したりしては人々が嘲(わら)うであろうことを注意したのである。彼の手は私から腕をふりほどいて、人々の行為を大声で罵倒した。人々が朽助に反感をもって、彼の住居を水の底に沈めるつもりであろうというのであった。

「それはいっそ咎(とが)でがす！　ああ私らはつらいでがす！」

彼があまり大声を出したので、タエトは朽助の肩に親しみ深く手をかけて、片方の手で朽助の目を覆った。彼女の沈着なふるまいは、朽助を平静な人間に蘇らせ、同時に彼を快活な老人にさせた。そして彼はタエトに目を覆われたまま言った。

「これこそ、ご着眼だります。したれど、もう手を引っこめてもよろしいがな。私らは独りで目を閉じますでがす」

　タエトが手を引っこめてみると、朽助は約束通り目を閉じていた。
　池の水は朽助の住居にも容赦なく襲いかかって、戸を蹴やぶって侵入した。そして壁をひき剥いで、軒をひたした。やがて家全体が水の渦に囲まれながら、水中に姿をかくしてしまったのである。
「沈みましたわ」
　タエトはそう言って、興奮の吐息をもらした。朽助が目を開いた時には、屋根の沈んだあたりの水面から、数本の柱が連続的に勢いよく突き出て来た。柱はそれ自体が一本の棒となって、全体の長さの三分の二ほども水面に姿を見せて屹立(きつりつ)したのである。そうして再び水のなかに潜る様子を見せながら水面に横たわり、流木となって慌ただしく水岸に沿うて走り去った。
　水は、段々畑を襲いはじめた。段々畑にはまだ収穫期に至らない黍(きび)と棉(わた)とがあったが、黍は寄せ波の一撃によって、ひとたまりもなく抜きとられ、一束の苗となって押し流された。棉は真黄色の花や純白の綿毛の実をつけたまま、段々畑と一しょに水のなかに沈んだ。すでに池は二つの湾を持ちはじめていたのである。そして朽助の言うところによれば九つの湾を――九つの湾を持った池となるには数日を費やさなければならない筈であった。けれど谷間に見出すことのできる一つの湖水であったのだ。赤土色に濁った水は周囲の山と青空とを水面に映して、谷間の形相を和らげようとこころみた。
　川しもの谷川で水の音がすっかり絶えると、朽助は耳鳴りがすると言いだして、しきりに彼自身の耳を引っぱった。二人の役人は、人夫達を連れて帰って行った。私や朽助は木立の下から現れて、堤防の上に出た。小さな立札があって、立札にはこの池の竣工祭は来月一日に挙行することが記してあった。
　私達は立札の傍に腰を下ろして、互いに黙って池を眺めた。一羽の小鳥が池の水面をかすめて、おぼつかなげに飛びまわっていた。池はこの小鳥の住居を犯した化物なのであろう。小鳥は水面にうつる自分の姿に向かって細く鋭い悲鳴をあげたり、幾度となくはげしい羽ばたきをしたりした。そして再び水面から遠く離れたり、羽根をおさめて水面近くをかすめたりした。タエトは熱心に水面を眺めていたが、この小鳥はいまに飛び疲れてしまうであろうけれど、何鳥という鳥かわからないと呟いた。私は、この小鳥は多分うぐいすであろうと答えた。
　夕方が近づいた。しかし小鳥は飛びまわることを止さなかった。池の水面は錆びた銀色にかげりはじめて、小鳥は細い黒色の一線を水面に描いた。彼は自分の羽音のきこえるかぎり、その羽音に興奮して彼自身を冷静にすることができなかったのであろ

う。

朽助は言った。

「なんたるむごたらしいことをする池じゃろか！」

タエトは石ころを拾い集めていたが、彼女は可憐な声をはりあげて、

「ほうい、ほうい！」

と叫びながら、小鳥をねらって石ころを投げた。五つ目の石が小鳥の頭上をかすめた。小鳥は驚いて絶望的な羽ばたきをしてみせたが、急速な放物線を描いて山腹の茂みのなかに消えてしまった。

B私はタエトの石投げをする姿体を好ましく眺めた。

朽助は足を半ば投げ出して、その脛の上に額をのせたが、彼は思いついたように嘆息をもらしはじめた。深く息を吸い込んで、一気に肩で押し出すというやりかたであった。どうやらその度ごとに彼は咽喉からひと思いにくったくした思想を棄てようとしているらしかった。そして吐き出した息と吸い込んだ息との語尾は、彼の五体の感傷にくすぐられて小刻みにふるえた。ところがそれは次第に老人のすすり泣きに変わって行ったのである。

私は少なからず疲労を覚えていたので、いつまでも立ち上がりたくないと思った。

タエトは私達の立ち上がるのを忍耐強く待ちつづけて、そして滅多なことには朽助を堤防の上に置き去りにしないという意気込みを鳶色の瞳に多分に現していたのである。

（注）「ではやはり魔物が住むね？」朽助は、「総じて一つの池に八つ以上の谷をふくんでいたるならば、その池には魔物が生まれるものでがす」と言っていた。

問１　傍線部Ａ「住みますとも！　今にも魔物が住みそうですがな」ということばには、朽助のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

①　自分の家を奪い、魔物が住みつきそうなまでに谷間の形相を変えてしまったダム工事を恨み憤る気持ち。
②　住み家を追われようとしている者の気持ちが理解できずに、気楽に話しかけてくる「私」をさげすむ気持ち。
③　ダム工事をしている人や「私」が魔物の存在についてはまったく無知なので、それを教えてやろうとする気持ち。
④　この谷間に魔物が住むようになることを恐れるとともに、そのようなことになるのを避けたいと思う気持ち。
⑤　ダム工事によって形相を変えられた谷間を見て殺気立ち、自分も魔物となって大暴れしたいという気持ち。

問２　傍線部Ｂ「私はタエトの石投げをする姿体を好ましく眺めた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

①　タエトが朽助の気持ちを代弁するかのように、腹立ちまぎれに小鳥に向かって石を投げているのを見て共感し、心から応援したいと思っているからである。
②　タエトがおもしろ半分に小鳥をねらって石を投げているのはいけないことだと思ったが、彼女の姿体が美しいので思わず見とれてしまったからである。
③　小鳥が痛ましく哀れに飛んでいるのをあきらめさせようとしているタエトにやさしさを感じ、石を投げている姿体が美しく思われたからである。
④　タエトが小鳥を捕らえようとして石を投げているのには反感を抱いたが、危ういところで小鳥が逃げて行ったのでうれしくなって見ているからである。
⑤　小鳥が自分の住居を犯した池に向かってはげしく抗議しているのを見て、それを応援するように石を投げているタエトをほほえましく思っているからである。

第一講　知識モノ解説

文学史

●柳田国（國）男（一八七五～一九六二）
民俗学者　民俗学＝フォークロア→一般民衆の文化・風俗・習慣を研究対象にする学問
代表作品『遠野物語』『海上の道』

●井伏鱒二（一八九八～一九九三）
小説家　太宰治と親交の深かった作家
代表作品『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』『黒い雨』

語句

沿革＝えんかく→歴史・歴史的推移・移り変わり
周章＝あわてる・しゅうしょう→取り乱す
狼狽＝ろうばい→あわてる・取り乱す　cf「周章狼狽」

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）ライサンする　①参　②惨　③讃　④酸　⑤産

（イ）善悪のキロ　①期　②岐　③機　④帰　⑤軌

（ウ）力のカゲンをする　①化　②科　③加　④可　⑤架

（エ）ジャッカンの用意　①若　②弱　③惹　④寂　⑤尺

（オ）無形のホウシュウ　①醜　②秀　③宗　④収　⑤酬

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）狼狽
①怒りをあらわにすること　②嘆き悲しむこと　③うろたえ騒ぐこと
④泣き声をあげること　⑤ほえたてること

（キ）着眼
①心がけのよさ　②視力のよさ　③見ものとしてのよさ
④目隠しとしてのよさ　⑤思いつきのよさ

（ク）おぼつかない
①頼りなさそうな様子　②つらそうな様子　③ぼんやりした様子
④悲しそうな様子　⑤恐ろしそうな様子

第二講　日本文化論

同時にいくつもの像を重ねて見ること、事象の境界を不確定にすること、こうした見方ないしは操作は、空間に関連している。

＜境界がさだかでない＞という現象は、日本の空間、より範囲を狭くすれば日本の建築空間の特性である。言葉をかえれば、境界があると同時に境界がないような空間の連続性、あるいは領域の仕切り方があらゆるところに見うけられる。つまり、日本の建築には強い壁が少ない。ふすまや障子がその好例であり、部屋の境界は可変的である。都市に城壁はなく、家の敷地にも一般的にいえば強い境界はない。「借景」(注)が、ひとつの美学的な手法になっているほどである。部屋の外に縁があり、その外に軒下のあいまいな領域がある。まったく日本の住居ほど領域分析がやっかいな住居はない。世界の伝統的な住居について領域分析をするのは、もちろん例外はいくらでもあるが、日本の住居ほどやっかいでない。壁によってかこまれた部屋があるからである。アフリカの複合住居（コンパウンド）のように、極めて複雑な構成をもっていても、領域分析は容易である。日本の住居は、障子をはずす、ふすまをはずすといった想定を入れれば、壁とは異なったあいまいな領域規定の要素を導入しないかぎり、通常の分析はまず不可能である。そうした仕切り方からくる分析は、日本の伝統的な住居には適していない。こうした確かな境界としての壁をたよりにした空間把握、＜容器としての性格＞に拠った空間把握が主調となっていないからである。

日本の伝統的住居の領域分析は、たとえば、はれとけ、表と裏、上手と下手、縁と奥といったような傾向分析(A)によってとらえられてきた。これをより一般化すると、「しつらえ」であり「座」である。これらは、領域を漠然と指定する手段であり、見えない領域に秩序をあたえる方法である。このような概念は、物理的な壁（エンクロージャー）がなくとも、空間を＜場としての性格＞でとらえるところから生まれている。

こうした日本の空間にみられる特性は、従来、気候条件や生産方式によって説明されてきたが、それももちろん妥当な説明である。しかし、日本の空間には、身体的な快適さや技術にあわせて、境界を明確にしない方がよいとする価値観があり、そうした美学が日本の空間の諸形式を決定してきたと思われる。

B閑(しづか)さや岩にしみ入(い)る蝉の声　芭蕉

芭蕉によって一挙にその意味の重みが明らかにされた「しみる」という動詞は、日本の文化の性格を説明する術語のひとつである。日本人なら、まず知らない者はいないと思われるこの句は、説明の要もなく、境界についてのメタファ(注)である。実際のところ、事象が融合する様相は、美しい風景のひとつの条件として、今日なお日本人の価値観のなかに生きつづけているように思われる。たとえば、融合は、霞(かすみ)と花（桜）にみられる。霞や花は、もともと境界が定かでなく、不定形である。不定形なものの相互の融合、判然としない色彩相互の浸透、不安定な音相互の重ね合わせ、これらは、日本中世の絵画や書や音楽の手法というより基本的な特性にみられるばかりでなく、日常の情景あるいは風景にあって価値づけられていたのではないだろうか。

（原　広司『空間〈機能から様相へ〉』による）

（注）○借景——庭園外の遠山や樹木などを、庭園の景観にとり入れること。
○メタファ——metaphor　隠喩(いんゆ)(暗喩)・間接的にものがたる。

問１　傍線部Ａ「傾向分析」とは、どのような分析のことか。最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　確かな境界としての壁をたよりにした物理的な分析
②　社会的な上位・下位の関係を絶対的な基準とした分析
③　境界がきわめて不明確で、形が定まらない抽象的な分析
④　特定の主義に基づく、一つの方向にかたよった主観的な分析
⑤　見えない領域に、ある価値観から相対的な秩序をあたえる分析

問２　傍線部Ｂ「閑さや岩にしみ入蝉の声」という句の、筆者の論旨に即した鑑賞として、最も適当なものはどれか。次のうちから一つ選べ。

①　「しみ入」という表現は、蝉の声が強い境界を持つ岩の深部に浸透していく感じをあたえる。その声がひたむきであればあるほど、蝉の生の切なさを感じさせ、それがまた一生を旅に送った芭蕉の「漂泊の思い」の強さをも象徴している。

②　「岩にしみ入」と感じられる声の性質からすると、一匹の蝉の声が青空に鋭く響いているのであろう。とかく騒がしいものとされる蝉の声を、「閑さ」を深めるものとしてとらえたところに、芭蕉の美学の独自性がうかがわれる。

③　蝉の声は岩という強い境界をもつ物体にしみ入り、山寺の大いなる「閑さ」の中に吸いとられていく。このような事象の相互浸透性や融合性を一句の中にみごとに定着させた芭蕉の言葉づかいと高い境地を味わうべきである。

④　「しみ入」という表現は、芭蕉の理想とした「さび」の境地を示すものである。また、山寺の「閑さ」にひたり自然と一体化している芭蕉の姿には、事象を融合し、境界を不明確にすることをよしとする日本人の美学が示されている。

⑤　静中の動をとらえて、同時に動中の静を感じさせる句である。この静と動の相互浸透をよしとするのが日本文化の伝統であり、その伝統に根ざしつつ、さらに高次の「閑さ」の境地をとらえたところに蕉風俳諧（しょうふうはいかい）の質の高さが認められる。

問３　日本人の空間把握の特性について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　いくつもの像を重ね合わせたり、事象の境界を不確定にしたりすることによって、仮想の空間に美を構築する方法は、芸術ばかりでなく、日本文化全般に及んでいる。

②　日本の気候条件や生産方式などによって培われた美意識が、身体的な快適さや合理的な技術以上のものを求め、不定形なものの相互の融合を進めてきたのである。

③　境界をあいまいにして、空間の連続性を認めようとする考え方は、「借景」に見られるような、自然を畏敬（いけい）するという中世以来の伝統的自然観によるものである。

④　日本の伝統的な住宅や敷地に明確な境界がないのは、日本人があいまいさを好む美意識をもっているからであり、それは空間意識の欠如を示すものである。

⑤　日本人は、意識の根底に境界を明確にしない方がよいとする価値観を有し、不定形なものの重なり合いや事象の融合する様相に美を認めようとしてきたのである。

第二講　知識モノ解説

語句

はれ↓非日常・特別

け↓日常

アニミズム↓自然界のあらゆるものの中に魂を見出す考え方・日本文化の特徴といわれる

語源……ラテン語の「アニマ」↓魂・こころ

派生語……英語の「アニマル」「アニメーション」

関連語……英語の「ゴースト」↓こころ・精神・幽霊　ドイツ語「ガイスト」↓こころ・精神・幽霊

妥当＝だとう↓受け入れ可能・ＯＫ

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）部屋の境界はカヘン的である　①家　②可　③化　④下　⑤荷

（イ）日本建築の特徴を示すコウレイ　①好　②公　③効　④巧　⑤功

（ウ）障子をはずすというソウテイで考える　①体　②態　③呈　④定　⑤底

（エ）ダトウといえる説明である　①堕　②打　③妥　④惰　⑤陀

（オ）ハンゼンとしない色の混じり合い　①範　②判　③汎　④反　⑤伴

（カ）しっかりとハアクする　①覇　②破　③派　④羽　⑤把

（キ）色彩が相互にシントウする　①進　②侵　③浸　④深　⑤心

（ク）事象がユウゴウする様子　①融　②誘　③遊　④友　⑤宥

（ケ）ものごとを対立的にとらえるシュウセイ　①衆　②執　③習　④週　⑤集

（コ）キュウキョクの目標　①糾　②朽　③求　④究　⑤仇

第三講　情報化社会論

「世界の最新ニュースがリアルタイムであなたのパソコンのデスクトップに」という広告を見た。もう時代はそんなところまできたのか、と感心すると同時に、世界中の情報がリアルタイムで流れこんできたら、私の神経は、あっという間に限界を超えて発狂状態に入るのでは、と考えてしまった。

現代のデジタルネットワーク社会は、光速の伝達速度をめざして、同時性を世界全体に押し広げようとしている。情報が、[ア]的に遅延なく伝達されることこそ、電脳社会の見えざる目標なのかもしれない。私たちの心性も知らず知らずのうちに、速度礼賛者に変容していく。

時間のかかる手紙に代わって、瞬時に反応する電子メールを使うこと。書店に足を運ぶ代わりに、インターネット上の電子書店で、検索と注文を瞬時に完了させてしまうこと。分厚い研究書や古典をじっくり読む代わりに、電子テキストでキーワード検索しながら、必要な個所を瞬時に表示させること。思いついたとたんに、相手の携帯電話に気軽に接続して話してしまうこと……。つまり総じて、私たちは、欲した時に瞬時に世界とコンタクトをとり、行動していることになる。

ところで、情報といっても、そのA速度が情報の価値に大きくかかわるものと、そうではないものの二種類があることを忘れてはならない。

例えば、台風やそれに伴う交通の混乱の情報は、タイムラグがなければないほど価値が高く、速度はこの種の情報にとっては[イ]的である。そして、昨日出された台風情報は、今日の我々には何の価値もない。

これに対して、文学や思想の[ウ]的資料などは、伝達速度や時間的経過で価値が大きく変化することはない。

この両者はもちろん、従来は情報と知識という形で明確に区別されてきたものである。しかし、あらゆるものが情報化され、ネットワーク上に蓄積・開示されてしまう今日にあっては、すべて情報として処理され、この区別は忘却のかなたに追いやられてしまったようだ。

私の[エ]的な体験にすぎないかもしれないが、自分との対話をじっくりと重ねながら学び味わったものは、いわば体得され

たものとして、私に染み着いているが、早わかり方式で仕入れた情報は、私になんの痕跡も残さず、あっという間に消え去ってしまう。三日で覚えた情報は、三日で消え去ってしまうのである。

情報の速度こそが絶対の価値となっている現代においては、私たちは成熟していく存在であるよりは、瞬間的な反応マシン、つまり、情報が入りこんでは流れ出ていく一結節点にすぎない存在になっていくように感じられる。

ハイデガー（ドイツの哲学者）は、時間の本質を「時熟」、つまり、「今」の連続としてではなく、時間性の成熟としてとらえた（『存在と時間』）。逡巡（しゅんじゅん）すること、反省すること、あるいは、熟考、熟練などは、情報のインプットに対して、きわめて膨大で無駄に思われるタイムラグののちに、はじめてアウトプットが生じるたぐいの営みである。これらは瞬間的でB切れ切れの今の積み重ねではなく、むしろ時間の成熟によるものだ。

時間がかかる、時間の遅延があることを、すべてタイムラグとして否定的にとらえたり、スピーディーであることが、私たちの豊かさを保証すると考えるならば、それは根本的な錯誤であるように思われる。無駄な時間を省いて、残った時間で豊かな生活を、と喧伝（けんでん）とされながら、その残った時間もすべて無駄な時間を省くという心性に汚染され、「時熟」を味わえないからだ。結局、私たちの生活は、テンポ全体があわただしく加速しているだけなのである。

私たちが、便利さや速度の幻惑には徹底的に弱い存在であること、しかし、それにもかかわらず、それに身をゆだねることは、私たちを徹底的にやせ細った刹那（せつな）的存在にしてしまうこと。このことへの自覚は、今日においては決定的に重要であろう。

現代の情報・消費・社会システム全体が、便利さと速さを「豊かさ」と称し、それに向けて邁進（まいしん）せざるをえない以上、私たちは、常に情報反応マシン、消費マシンに変形されつつある存在である。だとすれば、「時熟」や成熟の契機は、外から与えられることを求めるのではなく、私たち自身の内側に［オ］的に求めていくほかはないのかもしれない。

（黒崎政男「電脳社会で自己を保つ」による）

問１　空欄ア〜オに入るもっとも適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選びなさい。ただし、一つの語句は一箇所しか入りません。

１　古典　２　個人　３　退廃　４　即時
５　拡散　６　自覚　７　友好　８　本質

問２　傍線部Ａでいう「そうではないもの」に当たる、漢字二字の語を文中から抜き出しなさい。

問３　傍線部Ｂでいう「切れ切れの今の積み重ね」が、私たちにもたらす事態として、筆者は、どのようなものを考えているか。それに当たる十字からなる一続きの語句を、文中から抜き出しなさい。（句読点は文字数に含めます）。

問４　次の１〜６について、本文の内容に合致するものには○を、合致しないものには×をつけなさい。

１　われわれは、便利さや速度にまどわされやすいことを自覚して、電脳社会に対処することが重要である。
２　情報反応マシンとならずに、自分との対話を重ねて熟考することが情報を生かす道である。
３　光速をめざす伝達速度は、われわれに、より一層しあわせな生活をもたらす。
４　情報の伝達は、タイムラグがなければないほど価値が高いので、われわれも、それに反応しうる存在となる必要がある。
５　文学や思想が、情報化されてたくわえられると、瞬時に検索できるので、簡単に体得できる。
６　早わかり方式のみで情報を仕入れていると、われわれは一結節点にすぎない存在となる。

第三講　知識モノ解説

語句

心性→個人ではなく集団的な心理傾向・メンタリティ

タイムラグ→遅れ・ズレ

逡巡＝しゅんじゅん→あれこれ思いをめぐらせ迷うこと。四字熟語「狐疑逡巡」＝こぎしゅんじゅん

利那＝せつな→ごくわずかな時間・瞬間

契機＝けいき→きっかけ・起点

消費社会→現代社会・成熟した資本主義・後期資本主義・モノが機能ではなくイメージで消費される社会

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）チエンなく高速伝達する　①地　②遅　③治　④知　⑤弛

（イ）次第に心がヘンヨウする　①用　②要　③揺　④容　⑤様

（ウ）しっかりとタイトクする　①対　②耐　③隊　④体　⑤帯

（エ）時間がケイカする　①径　②契　③携　④景　⑤経

（オ）情報がチクセキされる　①畜　②蓄　③築　④筑　⑤逐

（カ）ボウキャクのかなたへ　①脚　②客　③却　④卸　⑤喀

（キ）コンセキも残さない　①跡　②籍　③席　④蹟　⑤績

（ク）根本的なサクゴである　①策　②削　③錯　④作　⑤窄

（ケ）テッテイ的に弱い存在　①轍　②撤　③鉄　④哲　⑤徹

（コ）速度にゲンワクされる　①幻　②現　③厳　④弦　⑤玄

第四講　近代化論

開国以降に日本が西洋文化を受容していった過程も、実際は単なる西洋化ではなかったし、模倣という概念でとらえることのできるような一面的なものでもない。いわば免疫システムが異物を中和・解毒させるように、日本人は西洋要素に対して抵抗しつつ取り込んでいったのである。

かといって、和魂洋才という言葉が与えるような意味で、伝統的精神は守りつつも小手先の技術だけうまく輸入するという、二段構えの形態で日本の近代化が推進されたわけでもない。福沢諭吉の「脱亜論」で使命とされた入欧は、西洋人の模倣をするというような浅薄なことでは決してなかった。『文明論之概略』において福沢は、「譬(たと)へば近来我が国に行はるる西洋流の衣食住を以て文明の兆候と(A)なすべきや。断髪の男子に逢(あ)ひて、これを文明の人と云ふべきや。肉を食ふ者を見て、これを開化の人と称すべきや」と述べて、西洋の風俗習慣の模倣に汲々(きゅうきゅう)としている開国当時の知識人を痛烈に皮肉っている。

丸山真男が解説しているように、福沢の考えている「文明」とはこのような表面的なものではなく、文明化していく過程のことである。英語の表現を例にとるとわかりやすいが、civilization という名詞は civilize という動詞から派生しており、したがって、「文明」とは、(一)文明化した結果としてすでにできあがってしまった状態と、(二)文明化という動的な過程、との両方を含意しているが、より重要なのは後者なのである。あるいは次のようにいうこともできるであろう。具体的な形をとって現れる個別の文明を真似るのではなく、その背後に隠れている文明化の普遍的な法則性・原理を学べ、と福沢は説いているのである、と。和魂洋才などという単純な発想とは訣別(けつべつ)し、文明の外形を取り入れるのではなくその精神の受容に努めよ、と主張しているのである。

福沢自身の言葉によると次のようになる。

外国の文明を取りて半開の国に施すには、固(もと)より取捨のよろしきなかるべからず。然(しか)りと雖(いえ)ども、文明には外に見(あら)はるる事物と内に存する精神と二様の区別あり。(B)外の文明はこれを取るに易く、内の文明はこれを求むるに難し。国の文明を謀るには、(C)その難を先にして易を後にし、難きものを得るの度に従ひてよくその深浅を測り、すなはちこれに易きものを施

して、正しくその深浅の度に適せしめざるべからず。

これは今日の表現に翻訳するならば、西洋化ではなく近代化をめざせということである。

明治以降の日本の歴史は、ある意味で、西洋に追いつき、追い越そう、と努力してきた歴史であるということができようが、もし日本がめざす目標が単に西洋文明を模倣することであったならば、どのようにして西洋を越えることができるというのだろう。西洋化の度合いを基準とするならば、どこまでいっても西洋以上に西洋的であることは原理的に不可能である。西洋を追い越した（？）瞬間から今度は必然的に西洋から離れてしまい、「非西洋化」が開始する道理ではないか。論理的に考えて、他の個人あるいは社会を超えるというからには、二人の人間あるいは二つの社会を比較する外的基準がなければならないが、この基準が日本人が感じとった「近代性」とでも呼ぶものであったのである。

西洋文明はその「近代」の一地方形態に過ぎない。無意識的にではあっても、このような[D]「近代性」と「西洋性」の乖離（かいり）がなされてはじめて、近代性という価値基準にしたがって日本が西洋を超えることが、理屈のうえでも可能になるのである。

（小坂井敏晶の文による）

問１　傍線部Ａ「なすべきや」の「や」の説明として、適当なものを次から一つ選べ。

ア　命令　　イ　疑問　　ウ　反語　　エ　詠嘆　　オ　禁止

問２　傍線部Ｂの具体的な例示となっている五文字の語句を、これ以前の文章から二つ抜き出せ。

問３　傍線部Ｃの内容として、適当なものを次から一つ選べ。

ア　外国の文明を学ぶのは実はやさしいことであり、自国の文化の深さをよく見極めることこそ、難しいけれども大切なことである。

イ　まず外国文明の根本的な精神を学んでから、その理解の程度に従って、具体的な事物を適度に移入するのがよい。

ウ　根本的な精神の問題が重要だが、最初から内面的な難しい文化を学ぶのではなく、わかりやすい事物から始めるべき

である。

エ　外国の難しい文明を学ぼうという硬直した姿勢ではなく、内外の調和がとれるように難易を工夫する、柔軟な態度が必要である。

オ　内面的で難しいことが深いものであり、外面的でやさしいことが浅いものであるという理解は、不適当である。

問４　傍線部Ｄの内容として、適当なものを次から一つ選べ。

ア　近代性という価値とは異なる、日本人自身の感じる基準によって、西洋と日本を比較すること。

イ　近代化と西洋化は、関連性の薄い別々の現象なので、それぞれについて分けて考えてみること。

ウ　西洋は近代化を達成したが、他の地方も各々なりの近代化を達成したはずだという前提に立つこと。

エ　西洋化も近代化の一つの姿だが、それとは別の形の近代化というものもあると考えること。

オ　近代化や西洋化が何よりも大切だという発想を捨て、独自の道を探ること。

第四講　知識モノ解説

文学史

●福沢（澤）諭吉＝ふくざわ　ゆきち（一八三五〜一九〇一）
　↓慶應義塾の創始者・主著『文明論之概略』『学問ノススメ』
　……平等主義を説いたものと誤解されている

●丸山真男＝まるやま　まさお（一九一四〜一九九六）
　↓政治学・日本政治思想史　元東大法学部教授・著書『日本の思想』

語句

和魂洋才＝わこんようさい↓精神は日本のまま、技術は西洋に倣う／和魂漢才　和洋折衷
汲々＝きゅうきゅう↓そればっかり・一つのことにとらわれる
訣別＝けつべつ↓きっぱりはっきり分かれる・区別すること
近代↓前近代↓伝統的な封建社会・中世・因習的な社会に対するもので、理性的、合理的、科学的、
　個人主義的なものをよしとする時代（「現代」から検証、批判されることもある）
反語＝はんご↓形式的表面的には疑問形だが、その真意は強い否定・皮肉・アイロニー・イロニー

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）メンエキ力の向上　①逸　②免　③綿　④面　⑤棉

（イ）シュシャ選択する　①捨　②舎　③赦　④謝　⑤遮

（ウ）センパクな知識　①拍　②白　③博　④薄　⑤迫

（エ）嵐のチョウコウ　①高　②校　③効　④功　⑤候

（オ）手本をモホウする　①放　②倣　③法　④報　⑤奉

（カ）ハセイ語を調べる　①生　②正　③成　④性　⑤製

（キ）フヘン的な法則性　①編　②偏　③遍　④辺　⑤篇

（ク）外国語をホンヤク　①本　②翻　③奔　④汎　⑤叛

（ケ）理想と現実のカイリ　①離　②理　③里　④裡　⑤吏

（コ）リクツをこねる　①堀　②掘　③靴　④屈　⑤窟

第五講　小説その２　物理と心理

吝嗇家(りんしょくか)の心理と生活に共鳴したりするのは、私に加わった知恵ではなく、齢(よわい)四十にして、私もようやく物欲と常識の世界に落ちつつあるのではないかと思ってみる。実際、私などは現在、理想を追いつづけるか、物欲の世界に落ちるかの、重大な、危険な岐路に立つ年齢にあるのだから、私が吝嗇家に共鳴するのも、一種の危険を伴わないことはない。けれども、一方私はこのごろになって、(注)謡曲「鉢の木」の精神など、ぴしぴしと身をもって感ずることができ、寒夜に鉢の梅の木を切って、客を饗応(きょうおう)した佐野源左衛門の心がよく判(わか)るようになったりしたので、私が吝嗇家に共鳴したりするのも、知恵の歯が一本生えたのではないかと、自惚(うぬぼ)れるのである。

数年前、故郷にあったころ、私は鶴(つる)おじという人と仲好(なかよ)しになった。鶴おじは、私の父より年上だから、その時六十二三であったろう。村でも一二を争う吝嗇家で通っていた。メリヤスのシャツなど着たことがなく、今でも電灯をつけず、(注)洋灯とカンテラをつかっているということだ。鶴おじの家は、村はずれの谷合いにある一軒家で、電柱を一本だけ自弁すれば、電灯をつけてくれるのだけれど、その一本の電柱さえ自弁しないのだ。一軒家だから、隣近所のつき合いもなく、酒もよそではよく飲むのだけれど、うちで仏事や祝い事をしたことは一度もないらしい。朝飯前に馬草一荷刈ってこない時には、かならず草履か草鞋(わらじ)を二三足造った。夫婦と娘の三人暮らしで、嫁さんが下駄(げた)をはいてるところを誰(だれ)も見たことがないと言われ、娘は白粉(おしろい)もつけなかった。

A<u>その鶴おじと私とが仲好しになったのだった。</u>

隣村の秋祭りに行って、親戚(しんせき)で御馳走(ごちそう)になってのかえり途(みち)だった。夜になって隣村の在所外れまでかえってくると、別の途から(注)蹌踉(そうろう)とかえってくる人がある。私の足音を聞きつけて、

「誰ぜえ?」と叫んだ。それが鶴おじだった。

「儂(わし)ぜえ、勇ぜえ」と私は大きな声で答えた。

「ああ、勇さんか、えらい遠々(とおど)しかったのう」

近づいてくると、鶴おじはそう久闊を叙した。二人とも酔っ払っていたので、肩を組み、月夜の中を、村まで帰ってきた。親

しく口を利いたのは、その時が初めてであった。それ以来、私と鶴おじとは意気投じて、仲のよい飲み友だちになった。祝言や棟上げなどの酒事に招かれて落ち合うたびに、私と鶴おじとはいつも席を並べ、宴が果てた後まで居残って、盃（さかずき）を差しつ差されつ、（注）箸拳（はしけん）を打ったり、草津節や小原節を歌ったりするのだった。鶴おじは青鬚（あおひげ）が濃く、眉（まゆ）が太く、子供の時からの印象では、おっかない人に思われていたのに、いっしょに酒を飲んでみると、大口開けてよく笑い、女子衆（おなごし）をからかったり、無邪気な老人であった。酒場の長いのでは定評があり、その鶴おじとつき合うので、私もまた長っ尻（ながっちり）の定評を取ったものである。

「勇さん、もう東京へ行かんで、田舎へいたや」と、何度も鶴おじは繰りかえした。

「そうじゃのう。田舎でのんきに暮らしてもええが……」と私は煮えきらない笑いを浮かべながら、話を受けるのであった。

「儂（わし）ゃ、ほかに何（な）んにも楽しみはない、仕事するばアの楽しみよえ」とも鶴おじは言った。

「そう、仕事に越した楽しみがあるかえ」

「儂ァ、人から悪口言われることもあるけんど、どう言われても、仕事が儂の病じゃけん、やめれないわえ」

　私は、酒脂でテラテラ光る鶴おじの額を眺めながら、相槌（あいづち）を打った。

「財産というものは、仕事をして、金を使いさやせにゃできるもんよえ」と鶴おじは鼻先で答えた。自信のほどもうかがえる。

「えらいもんじゃ、遣（や）り上げたのう」と私が感心すると、

鶴おじは、（注）五段（ごたん）百姓から、村でも指折りの百姓になったのである。

　鶴おじは谷に住んでいるので、谷鶴という通り名で呼ばれている。B私は酔いが廻（まわ）ってくると、青二才のくせに、父よりも年上の老人をつかまえて、「谷鶴！」と呼び捨てにしながら、盃を差したものであった。

　ある日、私は裏山を散歩していて、いつか鶴おじの家の上に出ていた。で、私は古い楊梅（ようばい）の木につかまって、谷を覗（のぞ）いた。鶴おじの家は木の間を透かして真下に見えた。私はその時、魔法の国か妖精（ようせい）の国でも覗くような気持ちがしたものである。私たちが子供の時分、鶴おじの家に、熊蜂（くまばち）が籾俵（もみだわら）ほどの大きな巣をかけ、それが白い（注）漆喰壁（しっくいかべ）に懸かっているのが、青田の向こうに見え、一軒家の鶴おじの家が、不思議の国のように思われたものだが、その気持ちは二十数年を隔ててなお生きているのであった。そして、その一軒家に出入りする鶴おじ夫婦が、不思議の国の住人のような気がしたものだが、その気持ちもまだつづいているのであった。

私の眼下に映った鶴おじの屋敷は、西陽(にしび)をいっぱいに受けていた。人里離れた一軒家に漆喰ずくめの塀をめぐらし、母屋、養蚕(ようさん)室、馬小屋、納屋(なや)、便所などが屋敷内に整然として、それぞれ瓦屋根(かわらやね)に漆喰が施され、赤土を固めた庭の上に、濃いカッキリとした影を落としていた。庭には筵(むしろ)いっぱいに籾が乾かされ、白い手拭冠(てぬぐいかぶ)りをした娘が、余念なく籾をまぜ返していた。塀の根には、紅白の鳳仙花(ほうせんか)が咲きこぼれていた。静かな秋の真昼であった。

依然として、不思議の国を覗いているような気持ちは、私の頭から抜けなかった。[C]正しく不思議の国であった。こんなに整然として、こんなにカッキリとした影をもった農家は、村でも類(たぐ)い稀(まれ)であった。しかも人里離れた谷合いの一軒家である。私は、自分の村に、こんな屋敷があるのが信ぜられぬ気持ちだった。楊梅の木からからだを起こしたとたん、私は夢から醒(さ)めたように、現実にかえったものであった。

鶴おじは、不思議の国を築き上げるために、一生の間、骨身を削る吝嗇(けち)をしたとしか思えない。私が、物惜しみをしながら、文学に憂き身を窶(やつ)すのも、帰するところ、どうにかして不思議の国を作り上げたい一心なのだが、私は一生かかって、はたして不思議の国を作り上げることができるかどうか。[D]私はまだまだ吝嗇にならねばならない。

（上林　暁「不思議の国」による）

（注）○謡曲「鉢の木」――貧しい佐野源左衛門が、大切にしていた盆栽の枝を切って薪代わりにし、北条時頼をもてなした話がふくまれている。
○洋灯とカンテラ――洋灯はランプ、カンテラは携帯用の石油灯のこと。
○鎗踉と――足もとのさだかでない様子で。ふらふらと。
○箸拳――相互に箸を出し、その数をあてることで勝負を決める遊び。
○五段百姓――一段（反）は約九九一、七平方メートル。五段程度の田をもつ小規模な農家。
○漆喰壁――塗壁材料である漆喰（消石灰に、ふのり、粘土などをまぜたもの）でできた壁。

問１　傍線部Ａ「その鶴おじと私とが仲好しになったのだった。」とあるが、この一文の表現を説明したものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 「その鶴おじ」と指示語を使って、鶴おじの吝嗇ぶりに改めて注意を向けさせ、そんな人のいやがる吝嗇家と自分はつきあいをもてたのだという自慢の気持ちを、「のだった」という含みのある文末表現で言外にほのめかしている。
② 「その鶴おじ」という指示表現と、「のだった」と説明する言い方で、鶴おじという吝嗇家と「私」が友達となったという事実を動かしようのない事柄として、あきらめの気持ちを込めて、とりあげている。
③ 「その鶴おじ」という指示の言い方で、極端な吝嗇家である鶴おじの人物像を強く印象づけ、そんな人と友達になったということを、「のだった」という説明の言い方で述べて、意外だとの気持ちを示している。
④ 「その鶴おじ」という指示の言い方で、吝嗇家であるということに注意を向けさせるとともに、事柄の結末を危ぶむ気持ちを込めて、「のだった」という主観的で不確定な事柄を表す文末表現を取っている。
⑤ 「その鶴おじ」と、物を取り扱うように指示語を付け、また「仲好しになったのだった」とよそごとのように客観化して言う表現をとることにより、一貫して鶴おじという妙な人物への敬遠の気持ちを表している。

問２　傍線部Ｂ「私は酔いが廻ってくると……盃を差したものであった。」で、作者はどのような様子を表現しようとしたと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 鶴おじの、若い者に対して優しく、寛容である様子。
② 「私」の、非常識なふるまいしかできない、屈折した様子。
③ 「私」の、吝嗇に徹する鶴おじを軽蔑（けいべつ）する様子。
④ 「私」と鶴おじの、他の人に受け入れられない、すさんだ様子。
⑤ 「私」と鶴おじの、気のおけない、うちとけた様子。

問３　傍線部Ｃ「正しく不思議の国であった。」には、「私」のどのような思いが表されているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　カッキリとした濃い影をもった鶴おじの家屋敷を今のあたりにしてみると、それが二十数年も前に見たのと少しも変わらない様子であることに、改めて驚嘆の念と不思議な思いを禁じえないでいる。

②　日ごろから吝嗇で通していた鶴おじが、村から離れた谷合いに、白い漆喰壁に囲まれたのどかな別世界をこっそりと作っていたことに感動はおぼえるものの、人間の生き方としては納得しにくい一面を感じている。

③　白い漆喰壁に囲まれた鶴おじの家屋敷ののどかな、整然とした風景をまのあたりにしていると、ここだけがまるで魔法の国のようにも思え、改めてこれをなしとげた鶴おじの生き方に感嘆している。

④　酒を飲むと大口開けてよく笑い、長っ尻の定評をとっていた老人の鶴おじが、実は自分の家屋敷を魔法の国のような世界に仕立てあげた、子どものような心の持ち主であることに感嘆している。

⑤　村のためにはほとんど協力もせず、家族からも孤立した自分勝手な生き方をしながら、理想としての立派な家屋敷を作り上げることに成功した鶴おじに、人間の不可解な一面を感じている。

問４　傍線部Ｄ「私はまだまだ吝嗇にならねばならない。」とは、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　一生の間、骨身を削るような物惜しみをした鶴おじが、村でも指折りの農家となった事実を見るにつけても、文学で身を立てていこうとするためには、家族を犠牲にしてでも、今以上の貧乏に甘んじなければならないということ。

②　鶴おじとの交友を通して、彼の吝嗇家という表の顔の裏に、不思議の国の住人とでも言うべき篤実な農家の主人の顔のあることを知り、表面的な物惜しみにとどまらない物惜しみの本当の意味をよく考える必要を感じるということ。

③　一生の間、徹底して物惜しみをして財をなした鶴おじに比べれば、自分自身はまだまだ物惜しみも足らず、夢・理想といえるような家屋敷をもつためには、文学にかかわる金銭の浪費をもっと慎むべきだということ。

④　徹底した吝嗇家であった鶴おじが、整然とした一つの理想的な小世界を作り上げていたことを思えば、自分はまだまだ不徹底で、自分の文学を作り上げるために無駄をさらに切り捨てていっそう精進していく必要があるということ。

⑤　鶴おじの徹底した物惜しみの生き方が彼の理想の実現につながったという事実を教訓として、自分も理想の文学を実現するために、無駄な表現を切り捨て、一語一語を今以上に大切に使うよう心掛ける必要があるということ。

第五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●『ふしぎの国のアリス』『鏡の国のアリス』……ルイス＝キャロル（一八三二〜一八九八）
↓英国の小説家、オックスフォード大で教鞭をとる数学者　本名チャールズ＝ドジソン

語句

吝嗇＝りんしょく↓ケチ・物惜しみ・守銭奴
メリヤス↓ポルトガル語　伸び縮みする生地、ニットとほぼ同義
久闊＝きゅうかつ
　↓長い間会ったり手紙をやり取りしていないこと
意気投じる＝いきとうじる↓考え方や意見が一致すること
祝言＝しゅうげん↓結婚式・結婚の祝いの席
棟上げ＝むねあげ↓家を建てるときの儀式・上棟式
長尻＝ながじり・ながっちり
　↓人の家を訪問してなかなか帰らないこと
にえきらない↓はっきりしない
相槌を打つ＝あいづちをうつ↓相手に調子を合わせる・同意する
余念なく＝よねんなく↓脇目もふらず集中すること
憂き身を窶す＝うきみをやつす↓やせるほど熱中／
　憂き身↓苦労の多い身／憂き世↓浮世↓この世
篤実＝とくじつ↓人情にあつく、誠実であること
気のおけない↓気遣いのいらない・気取らなくていい
精進＝しょうじん↓努力すること
饗応＝きょうおう↓酒や食事でおもてなしする
仏事＝ぶつじ↓法事・法要・葬式や一周忌、三回忌
　など
在所＝ざいしょ↓家のあるところ・集落

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）彼の話にキョウメイする　①明　②名　③銘　④鳴　⑤命

（イ）ザイショ外れまで来る　①剤　②在　③材　④西　⑤財

（ウ）「やりあげたのう」とカンシンする　①関　②歓　③感　④寒　⑤甘

（エ）イゼンとして変わらない　①以　②依　③已　④居　⑤意

（オ）ヨウサン室を見に行く　①産　②参　③山　④蚕　⑤算

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）自弁する
①自分で費用を負担する　②自分の責任で弁償する　③自分で交渉する
④自分の労力を提供する　⑤自分の資金で製作する

（キ）久闊（きゅうかつ）を叙（じょ）す
①久しく会わなかったことを怒る　②久しぶりの挨拶を交わす
③遠くから来たことを感謝する　④長く疎遠であることを咎める
⑤昔からの友人であることを懐かしむ

（ク）余念がない
①のんびりと　②ぼんやりと　③無造作に　④熱心に　⑤慎重に

第六講　学問論

旅では——未知と偶然の要素を多く含んだ旅では——日々は私たちにとって新ならざるをえない。そして日々新であるなかで、よりつよく私たちの好奇心は突き動かされ、働くようになる。ふつう〈好奇心〉などというと、あまりいい意味にとられない場合が多い。なにか面白いことはないかと知らなくてもいいことまでむやみに穿鑿（せんさく）する心、あるいはもの好きといったような意味に解されている。けれども好奇心とは、私たち人間の知的活動の根源をなす情熱、つまり知的情熱にほかならない。

好奇心というとあまりいい意味にとられない、といった。しかし実はそれ以前の、情熱（情念、パトス）そのものが、これまで一般に永い間、はしたないものとされてきたという事情がある。情熱は人間の心の平静を乱し、人間を真理から遠ざけるものだとされてきた。しかしそのような見方はきわめて一面的なものでしかない。『百科全書』の編者として知られるディドロ（『哲学的思索』）が、その点でたいへん適切なことを言っていたのを思い出す。

すなわち、ひとは情念（情熱）の悪い面ばかりを見て、むやみに情念を排斥する。しかし情念は、一方であらゆる苦悩の源であるだけでなく、同時に他方では、あらゆるよろこびの源泉でもある。偉大な情念によってはじめて、人間の魂は偉大なものごとに到達しうるのだ。これに反して控え目な感情は凡庸な人間をつくり、弱々しい感情はもっともすぐれた人間をも台なしにしてしまう。「控え目にばかりしていると、自然の偉大さとエネルギーが失われる。樹木を見るがいい。A豊かに葉を繁らせているそのおかげで、諸君たちは爽やかに拡がった木陰をうることができ、冬がやってきてその繁った葉がなくなるまで木陰を愉しむことができる。およそ誰でも、小心翼々として生き、気持が老いこんでしまうと、もはや詩作にも絵画にも音楽にも、すぐれた仕事ができなくなるのだ。」もっともディドロは、このような主張の前提として、「感情のうちに正しい調和が確立されている限りのことだが」と述べることを忘れていない。

控え目な感情は凡庸な人間をつくり、ひとは小心翼々としていると創造的でありえなくなる。これは行きすぎた抑制や禁欲的態度がおちいりやすい陥穽を示している重要な指摘である。いうまでもなくそれは、詩・絵画・音楽といった狭い意味での芸術にかかわるだけではなく、もっと広い人間の知的活動や精神的活動にもかかわっている。だから、たとえどんな小さなことにせ

よ、日に日に発見や創造のよろこびをもって生きていくためには、通常考えられているより以上に、知的情熱としての好奇心をいきいきと保っておかなければならないのである。

ところで、知的情熱としての好奇心とは、とくに、私たちが世界や自然やものごとに向けるつよい関心のことである。そして、知識よりもなによりも関心（インタレスト）こそがあらゆる文化や学問の原動力である、と言えそうだ。関心こそが知を拓くのである。たとえば、次のような事実がある。すなわち、私たち人間の文化の根幹を形づくっているのは言語や概念の体系であろうが、それらの体系の精密度は文化によってちがう。といってもそのちがいは、その文化や社会に属する人々の知的能力の差によるのではなくて、細部のものごとにまでどれだけ関心を示すかという、関心のつよさの差によるのである。この重要な事実を説得的なかたちで示してくれたのは、レヴィ＝ストロース（『野生の思考』）であった。

すなわち、それは女性の人類学者スミス・バウエンの体験談として示されている。彼女はアフリカの或る部族の調査に行ったとき、まず最初に彼らのことばを覚えようとした。その際、インフォーマント（現地人の情報提供者）たちは、初歩の段階で植物の見本をたくさん集めてきて、それらを示しながら一々の名前を言うというかたちで、彼女にことばを教えてくれた。それは彼らにとっては、ごくあたりまえのやり方だった。ところが彼女には、それらの植物が識別できなかった。なぜか。それらの植物が見慣れないものだったからではなくて、彼女がそれまで、植物界の豊かさや多様性そのものにほとんど関心がなかったからである。それに反して現地人たちの方は、そのような興味は誰でも当然もっているものだと信じていたのである。

スミス・バウエン自身のことばでいえば――「彼らにとって植物は、人間と同じように重要で、また同じように親しいものでした。ところが私の方は、農家の生活をした経験がなく、ベゴニアとダリアとペチュニアとを見分けることにも自信がなかったのです」「私が入りこんだ社会は、野生植物であろうと栽培植物であろうと、植物にはすべてはっきりきまった名前と用途があって、男も女も子供も、誰でも何百種という植物を知っているような世界でした。彼らほどに植物を知ろうとしたところで到底私には不可能でしょう。その上、たとえ私がそれを言っても彼らは[B]それが本当だとは誰一人信じてはくれないでしょう」。

（中村雄二郎「知の旅への誘い」より）

問１　傍線部Ａで、樹木が「豊かに葉を繁らせている」状態は、何をたとえたものか。あてはまる語句を本文中から五字以内で抜き出せ。

問２　傍線部Ｂの「それ」について、何をさしているか。四十字以内で答えよ。

問３　この文章全体の主題を示すものとして最も重要な語句を本文中から選び、漢字二字で記せ。

問４　スミス・バウエンの体験談から、どのようなことがわかるか。六十字以内で説明せよ。

第六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●ディドロ（一七一三～一七八四）
↓ダランベールとともに『百科全書』を編纂（へんさん）し、知の民主化に貢献
●クロード＝レヴィ＝ストロース（一九〇八～二〇〇九）
↓フランスの文化人類学者。文化人類学（未開地域・非欧米文化研究）を世界的にメジャーにした二〇世紀最高の知性の一人。元コレージュ＝ド＝フランス教授。ブラジルのジャングル奥地のマトグロッソインディオの研究で知られる。著書『悲しき熱帯』
↓「鏡」としての文化人類学／カルチャーショックとは、異国文化の特異性に驚くのみならず、ひるがえって自国文化の特異性に気づかされ驚くこと

語句

穿鑿＝せんさく↓細部までさぐり知ろうとすること
パトス↓ギリシャ語で情熱・情念　英語のパッション
陥穽＝かんせい↓落とし穴
小心翼々＝しょうしんよくよく↓小さなことにびくびくする

復習問題　第六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）哲学的なシサクにふける　①作　②索　③策　④柵　⑤錯

（イ）あらゆる喜びのゲンセンとなる　①現　②元　③原　④源　⑤厳

（ウ）目標にトウタツしうる　①到　②頭　③答　④踏　⑤倒

（エ）言語と概念のタイケイ　①型　②形　③系　④計　⑤傾

（オ）重要なシテキである　①的　②適　③滴　④笛　⑤摘

（カ）文化のコンカンを形づくる　①観　②幹　③間　④官　⑤館

（キ）言葉のセイミツ度を上げる　①精　②正　③聖　④清　⑤製

（ク）情報のテイキョウ者に会う　①協　②共　③京　④供　⑤教

（ケ）植物をサイバイする　①倍　②陪　③賠　④媒　⑤培

（コ）私にはトウテイ不可能だ　①低　②体　③呈　④底　⑤抵

第七講　歴史論

　さて十九世紀の進行のうちに、自然科学がものすごい勢いで発達し、社会のあらゆるものをこれが動かすこととなるにつれて、科学精神は歴史をもとらえずにはおかなかったのであります。そして歴史は歴史科学と呼ばれることになります。近代科学の開祖であるデカルトは、歴史をあまり重視しなかった。それは近代科学を歴史的制約の外に純粋に発展させるために必要な態度であったのですが、ここでは人間の知識ないし思想は二つにはっきり分かたれ、一方に厳密な自然科学があり、他方に文学があって歴史は後者の中に入れられていたのであります。［Ａ］、その後歴史は歴史科学の名の下に文学の世界から科学の世界に移るのであります。そこでは歴史はもはや過去の再現ではなく、一定の法則による過去の理論的構成であろうとし、また、自然科学がだんだん細かい分野に分かれると同じように、歴史も何々史、さらに何々における何々の研究というふうに細分化される。その各々（おのおの）は全体をとらええぬかもしれぬが、それぞれの研究の成果は客観的な真理であるから、あたかも自然科学における一々の発見のように、後から来るものはそれを踏み台として先に進むことができる。［Ｂ］蓄積された厳密な史料によって全歴史がいつか構成されて成立するというふうに楽観的に考えられたのだと思います。そしてそうした科学的歴史は個人というものの価値を社会の中に埋没させる傾向を生じました。自然科学では蟻（あり）とか狼（おおかみ）とかの発生・進化を環境に即して研究するが、蟻や狼の心理や個性（もしそういうものがあるとしたらの話ですが）を黙殺する。そうした科学をモデルとする以上、歴史における個人の軽視ということは当然であったといえます。

　ところで歴史家が自然科学者のように自我を殺して、自分が歴史的世界に生きる人間であることを忘れ去って、歴史を研究し記述することが果してできるか、どうか。細部については、それは可能でありましょう。例えば、関ヶ原の戦いに家康がどこから引き返して、どこで何日滞在し、何日かかって戦場に着いたか、というようなことは古文書その他によって、厳密に決定することができ、また万一不正確な点があれば訂正もできます。しかし、実はそういう仕事は考証家の仕事で、歴史ではない。そういうデータが無限に集まれば自（おの）ずと歴史が出来上るのではないのです。歴史家はそれらを集めて歴史を書くのですが、関ヶ原の役の意義を考えるにはその種の世界観がなくてはできず、つまり史料の統一には史観というのがなければ成立しません。そうす

れば必ずそこに歴史家の主観が出てくるので、［C］まったく純粋な精神というようなものの持主があったとしたら、歴史など書かない、また書けもしないだろうと思われます。［D］歴史事実の選択ないしとらえ方にも、その歴史家の史観は働くのであります。［E］愛国心に作用されたり、伝統文化を偏愛したりして、その史観が何ほどか曇るといったことも起こりえましょう。しかし、こういうことは避けがたいことで、もしこれを恐れていたならばデータの採集ないし小さな特殊研究以外に出られないことになります。（中略）学問とは冷静な、計量された冒険なのであります。

　こうした素朴な客観主義の歴史観を、根底から揺り動かしたのは、最近の物理学、歴史がモデルとした自然科学そのものの基本をなす物理学の進歩であって、その物理学が素朴な客観主義ないし決定論を棄（す）てねばならなくなったことであります。対象は研究者がたんに自我を殺して無私的に見れば見えるようなものではなくて、研究者がそこに操作を加えることによってはじめてとらえられるものである、とされるのであって、「研究者は彼が研究するところのプロセスの中に押し入る（イントルード）」、そしてこのことは自然科学研究についても歴史研究についても共に正しい、とエドガー・ヴィントはいっています。だからディルタイのいうように、歴史家は自己を脱却し、あらゆる時代に合一するようなことは不可能で、もしそんなふうに現在から脱却しうる純粋な精神というようなものがあったら、その精神は歴史をとらえようとはしないでありましょう。この点、ヴァレリーの言葉は意味深く読まれます。「歴史の真の性格は歴史自体に参与するということである。過去の観念が一つの意味を持ち、また一つの価値を形成するのは、自分のうちにF<u>未来への情熱</u>を見出（い）だす人間にとってのみである。」

（桑原武夫「歴史と文学」による）

問１　空欄Ａ～Ｅに入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

①　もしも　②　かくして　③　そもそも　④　ところが　⑤　もちろん

問２　次の文を本文中の第一段落に入れるとすれば、どこが適当か。もっとも適当と思う箇所を、その前の文の終りの八字で示しなさい。（句読点は一字に数えない）

すなわち歴史は芸術ないし文学を排除して、自然科学をモデルとして一個の科学たらんとする。

問３　傍線Ｆは本文の趣旨からして何を意味しているか。もっとも適当と思うものを左の中から選びなさい。

①　歴史が自然科学と癒着して個人を軽視したことを反省し、未来にあっては個人の情熱を物事の基本に据えること。
②　客観主義にこだわった歴史に規制されず、歴史を自己の主体性をもって未来に結びつける自由を持つこと。
③　歴史の細部をあまねく蒐集（しゅうしゅう）し、それらの蓄積こそが未来の地平をひらくものだと考えること。
④　歴史の流れの中で個人は一アトムに過ぎぬという考え方を排し、未来のために潔く過去のすべてを廃棄すること。

問４　本文中の次の語句の中、本文の趣旨からして歴史叙述上望ましいと考えられているものが一つだけある。符号で答えなさい。

①　純粋な精神　②　素朴な客観主義　③　データの採集　④　歴史科学　⑤　歴史家の主観

第七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●桑原武夫＝くわばら　たけお（一九〇四～一九八八）→フランス文学者
●エドガー・ヴィント（一九〇〇～一九七一）→ドイツの美学美術史の研究者
●ヴィルヘルム＝ディルタイ（一八三三～一九一一）→ドイツの哲学者
●ポール＝ヴァレリー（一八七一～一九四五）→フランスの詩人、小説家

語句

素朴客観主義・素朴実証主義・決定論→人間から隔絶したところから得られる「データ、証拠、事実」で科学ができあがる、との立場
癒着＝ゆちゃく→本来、離れているべきものが利害のために結びつくこと
世界観・史観→世界や歴史を見るときの見方、考え方、観点のこと。　cf倫理観　価値観　人生観
※個人の思いや感じなどを表す場合は「感」。　cf劣等感　危機感　疎外感
偏愛＝へんあい→かたよってある対象だけ特別に愛すること
cfフェティシズム→物心崇拝・呪物崇拝・異性の装身具や身体的な部分に執着的愛をそそぐこと
アトム→ギリシャ語で「それ以上分割できないもの」・孤立した存在・原子

復習問題　第七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）歴史的セイヤクの下にある　①性　②世　③制　④征　⑤政

（イ）ゲンミツな自然科学の展開　①原　②現　③元　④厳　⑤眩

（ウ）理論のコウセイを練る　①硬　②構　③公　④功　⑤講

（エ）証拠をチクセキしていく　①逐　②築　③畜　④蓄　⑤筑

（オ）社会の中にマイボツする　①舞　②毎　③枚　④味　⑤埋

（カ）世界カンを語り合う　①感　②観　③間　④巻　⑤館

（キ）伝統文化をヘンアイする　①変　②編　③片　④偏　⑤遍

（ク）学問はケイリョウされた冒険　①料　②量　③両　④了　⑤糧

（ケ）自我を殺しムシ的に見る　①志　②私　③史　④視　⑤試

（コ）未来へサンヨする　①世　②余　③代　④与　⑤予

第八講　現代社会論

「さまよえる」日本人という場合の「さまよえる」は「目標を失っても静止し得ない状態」を意味する言葉であろう。確かにいまの日本には全国民的目標らしきスローガンはないし、同時にそういうスローガンがないのを当然として、その状態で自若としているわけでもない。では、各人の実生活に大きな革命的変化が生じ、それによって国民的な不安が生じたのかと言うと、そういうわけでもない。否、むしろ逆であって、急に目標が失われ変化がとまり、この「現実」の急停車のため、今までの惰性で精神だけが在来の方向へよろめき出ていると言った状態がこの「さまよえる」なのであろう。とすると、無目的な放浪を当然の状態とするという意味での「さまよえる」でもないわけである。この状態は簡単に要約すれば、何やら目標と変化が欲しいのだが、だれもそれを与えてくれず、といって、到達した安定を失うという犠牲を払ってまで自己の意志で何かをしてこの状態を変えたいとも思っていないが、しかし現状にも不安と不満があるといった状態である。

だが考えてみれば、人類の長い歴史においては、いわば各民族がそれぞれ独自の文化（ウェイ・オブ・ライフ）をもち、その基準で生きるのを当然としていた時代には、この状態がむしろ当然の状態であり、その状態を生きるという実績の積み重ねだけで、それぞれの文化を形成して来たはずである。だが明治以来の日本、特に戦後の日本はこのごく当然のことを忘れてしまった。そしてそこに必ず全国民的な目標を示すスローガンがあり、同時に到達すべき目標が国外を基準に設定され、全員をそれに指向さすべくマスコミが動員された――そして全国民が常に何らかの形でそれへの参加を、少なくとも心理的な参加を強要されると言った状態であった。その状態はセールスマンのミーティングに似た精神状態であったとも言える。

そしてこの長いスローガン時代、揚げられた目標はさまざまであったとはいえ、その共通の主題は、前にも記したが「負の充足」であったことは否定できない。いわば戦後の一時期――というよりむしろ全期を通じて――その主題は「まだ民主化が足りない」であり、ついで経済成長時代に入ると「所得倍増論」という形で「まだ収入が足りない」がそれに付加された。そして社会のあらゆる問題は「足りない」という現象から起こるのだから、この「負」を充足すれば問題は解決するとされ、それが国民的目標にされた。従ってこれへの心理的参加が可能の間は「さまよえる」といった心理状態を生み出す余地はなく、逆に全員

がある方向に一斉に心理的に動き出すか、動き出しているものに参加していると錯覚することによって、ある種の安心感を保持しつづけていたわけである。

もちろんこの経済成長に実質的にも心理的にも参加し得なかったか、参加し得なかったと感ずる人びとをも生じ、この人びとは逆に一種の挫折感を味わった。しかしこの問題に対してもなお、その部分を「負」と見なし、この「負」を充足するという形で、この考え方の延長線上で福祉を充実すればよいと考えられ、一時はそれがスローガンとされた。だがこのスローガンは、当然ながら、大部分の人が成長に参加していると感じ、一部にそれに参加できない人がいると感じている間しか力をもち得なかった。

またこれとは違った形の、経済成長によって生じたさまざまな格差を「負」と見てこれを充足するというスローガンも、同じように成立し、同じように消えて当然であった。そして最終的に従来の「負の充足」のスローガンが成り立ち得ない状態が現出したとき「さまよえる」といった状態を現出したと見るべきであろう。

（山本七平「日本人の人生観」）

問１　傍線部Ａの「さまよえる」の定義として、正しいものを○、ただしくないものを×、とせよ。

①　スローガンが成り立ちにくい事態を、当然のものとして受け入れている状態。

②　現実が止まってしまったにもかかわらず、精神はもとのままに働いている状態。

③　目標や変化を欲するものの、今の安定を失ってまで変革したいとも思わない状態。

④　「足りない」事態に対し、心理的に参加することによって安心感を得ようとする状態。

問２　傍線部Ｂの「ごく当然のこと」とは、どういうことか。次の中から、最も適当なものを一つ選べ。

①　スローガンのないことを当然として、自若としていること。

②　国民的スローガンが設定されていても、安易に参加しないこと。

③　各民族は、独自の文化をもっているのであるから、それを失わないようにすること。
④　不安と不満がある状態を当然のこととして、積み重ねていくこと。

問３　傍線部Ｃの「負の充足」とは、具体的にどういうことか。次の中から、最も適当なものを一つ選べ。
①　国民の「足りない」という心理状態を利用して、社会問題における欠落部分を埋めていく営為。
②　社会問題の発生を「足りない」という現象に見、国民を強要することなく欠落を埋めていく営為。
③　問題を、「足りない」という観点から取り上げてスローガンにし、その欠落を埋めていく営為。
④　多様な現象から共通の「足りない」部分を発見し、国民の心理的参加を期待してその欠落を埋めていく営為。

問４　次にあげる①〜⑤のうち、本文の論旨に合うものを○、合わないものを×とせよ。
①　今の日本には、全国民的目標らしきスローガンはなく、無目的ゆえの不安と不満が潜在的に存在している。
②　「さまよえる」日本人という現在の日本人のあり方は、明治以来の日本の基本的な姿であった。
③　「負の充足」は、長いスローガン時代における共通の主題であり、スローガンなき現代にも形をかえて残っている。
④　「負の充足」のスローガンの成立している時代には、「さまよえる」状態は出現しない。
⑤　スローガンへの参加には、実質的参加と心理的参加とがあり、心理的参加の方がスローガンが消えた後の挫折感が深い。

第八講　知識モノ解説

語句

スローガン→標語・モットー　もともとはスコットランド高地兵の鬨（とき）の声、雄叫び

自若＝じじゃく→大きな事件に出くわしても落ち着き動じないこと

　四字熟語で「泰然自若」＝たいぜんじじゃく

放浪者＝ほうろう→自由にさすらうひと＝バガボンド

　cf遊牧民→ノマド・定住民に対することば　　エグザイル→流罪、亡命

復習問題　第八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）カクメイ的な変化が到来した　①明　②命　③銘　④迷　⑤冥

（イ）ザイライの方向へ進む　①財　②剤　③斉　④西　⑤在

（ウ）すべての住民をドウインする　①員　②院　③因　④引　⑤姻

（エ）資料を簡単にヨウヤクする　①訳　②役　③躍　④厄　⑤約

（オ）自分の時間をギセイにする　①義　②儀　③議　④犠　⑤蟻

（カ）国民のショトクを上げる　①初　②諸　③所　④署　⑤庶

（キ）農産物のフカ価値を考える　①不　②負　③付　④符　⑤賦

（ク）ホウロウの旅に出発する　①浪　②老　③朗　④廊　⑤狼

（ケ）参加を強くキョウヨウする　①用　②要　③庸　④拗　⑤様

（コ）失敗しザセツ感を味わう　①拙　②節　③切　④刹　⑤折

第九講　民俗学

柳田国男は日本人の泣き方の変遷を見逃さなかった。『不幸なる芸術』に収録された「涕泣（ていきゅう）史談」の中で、次のように述べている。

「自分などの見たところでは、人が手放しでワアワア泣くことを、さも悪徳なるかの如く言ひ出したのは、是（これ）も亦（また）中世以後の変遷であらうと思つて居る。やたらに泣くことは勿論（もちろん）無反省であり、偉人豪傑は喜怒色に表はれずなどと、この自己検束の普通に超えて居る点を尊敬せられて居たが、しかし彼等とても大きな衝動があれば泣いて居た。まして常人は尚更（なおさら）の事で、現に武家生活を中心とした義太夫の浄瑠璃などを聴いて居ても、たびたび慟哭（どうこく）の声が物語の中にまじつて居て、感動の極まる所はいつも是に帰着することになつて居る。」

このように柳田は、日本人は昔はよく泣いたという。しかし声を出して泣くことが社会生活上に濫用（らんよう）されるようになったので、それを抑圧する風が起ったのだが、むやみに抑圧せず、濫用だけを防ぐように教育すればよかったと柳田は言っている。ということは現代人が［　X　］という弊害があらわれているからにほかならぬ。そして「その理由又は事情を分析して見ようともせずに、ただ単に慟哭といふ一種の交通方法を遮断したとても、それで世の中が楽しくなつた証拠にはならない」と警告している。

「涕泣史談」では、現代は人間の泣くことが少なくなった時代である。しかし以前はそうではなかった。しかも泣くことはけっして悪徳であるときめつけられなかった、と柳田は言う。「今日の有識人に省みられて居らぬ事実は色々有る中に、特に大切だと思はれる一つは、泣くといふことが一種の表現手段であつたのを、忘れかかつて居るといふことである。」

柳田は声を出して泣くのと、［　Y　］。そして「生きた人ばかりか、死んだ眼に見えぬ人の霊にまで、やはり心のかなしみの声を、聴かせる必要を昔の人は認めて居たのである」と言い、日本海側の田舎では奥羽から山陰地方まで、盆や彼岸の後先には火を焚（た）いて、

ぢい様ばあ様、このあかりでおでやれおでやれ

と高くかなしい声で叫ぶ習慣のあったことを伝えている。ここにおいて、泣くことが相手に呼びかけるもっとも直接的な表現方法であったことを人々は理解するのである。柳田はここで生者と死者との交流について語っている。死者に呼びかけるにもすすり泣くということではなく、かなしみの声を出さねばならぬことを告げている。私が宮古群島の来間島で見たのは、死者のまわりに家族や親戚の女性たちがあつまって、泣きながら死者へ訴えている光景であった。このように泣き声を問題にとりあげ、それを文明史に解いたものが柳田のほかに誰があっただろうか。

　柳田の手にかかると、ありふれた日常生活の事柄がたちまち深遠な問題を孕みはじめる。『食物と心臓』から一つの例をあげてみると、瞼に生じる腫物をどうしてモノモライと呼ぶか。柳田はあれこれと各地の方言を穿鑿して、モノモライという名前の起りは、この疾病を治す手段として、人の家の物を貰って食べる習慣があったためである、と推断している。つまり、平生食を共にしない人々と、一緒に何かを食うという行為には、それを通して大きな力を借りるという意味がこめられてあった、と考えるのである。「即ち多くの人の身のうちに、食物によつて不可分の連鎖を作るといふことが、人間の社交の最も原始的な方法であつたと共に、甲人は是によりて互ひに心丈夫になり、孤立の生活に於ては免れ難い不安を、容易に除き得るといふ自信を得たのである。瞼のできものの治療は甚だ微々たる現象であるが、是に残つて居る思想は重要であつた。ちやうど我々日本人が失ひ又は忘れて、今や何ともいへない寂寥を感じて居るものが、まだ此部面だけには幽かに伝はつて居たのである。それを発見する手段が他にも有ると思ふ者だけが、ただこのフォクロアの学問を侮蔑することが出来る。其他の人々が笑ふのは心得ちがひであろう」と柳田は結んでいる。

　声を出して泣くことも、また他人から食物を貰うことも、すべて［　Z　］であって、そうした共同生活を前提として成り立っている社会が昔は存在していた、という事実は、現代の孤立した個人の集合にすぎぬ社会の袋小路を脱出するのに、なにがしかの手がかりを与えるのではなかろうか。

（注）自己検束――自己を抑制すること。
　　　フォクロア――民間伝承。民俗学。

問１　空欄 X に入る最も適当なものを次の中から選びなさい。

①　自己表現をあまりにも言葉に頼り過ぎている
②　自分の感情を表現するのが苦手になっている
③　人前では泣く行為を隠そうとする傾向にある
④　他人が泣くことに対し関心が薄くなっている

問２　空欄 Y に入る最も適当なものを次の中から選びなさい。

①　忍び泣きの歴史とを考察している　　②　忍び泣きとの違いを否定している
③　忍び泣きとをはっきり区別している　　④　忍び泣きの事例と混同している

問３　傍線部甲の「人は是によりて互ひに心丈夫になり」とは、どのようなことをいっているのか。その解釈として最も適当なものを次の中から選びなさい。

①　人々が一緒に食事をして絆を強めること。　　②　人々が社交的になって陽気になること。
③　人々が素朴な生活に満足を見出すこと。　　④　人々の疾病が治って元気を取り戻すこと。

問４　空欄 Z に入る最も適当なものを次の中から選びなさい。

①　学問領域の対象外　　②　美徳としての昔話
③　身体的な自己の表現　　④　他人との交流の手段

問５　本文の趣旨として最も適当なものを次の中から選びなさい。

①　柳田国男は今日では珍しくなった行為や慣習のなかにも、日本人の再発見につながるようなヒントはあると考えている。

②　柳田国男は今日では珍しくなった行為や慣習のなかには、日本人が失ってはならない美徳があると考えている。

③　柳田国男は過去の日本人の社会生活のなかで忘れ去られたものは、歴史に記録しておかねばならないと考えている。

④　柳田国男は過去の日本人の社会生活のなかで忘れ去られたものは、現代でもやはり評価する必要はないと考えている。

第九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●柳田国男については第一講を参照のこと

●近松門左衛門＝ちかまつ　もんざえもん（一六五三〜一七二五　※一七二四年という説もあり）→浄瑠璃の劇作家。

代表作に『曽根崎心中（そねざきしんじゅう）』『心中天の網島（しんじゅうてんのあみじま）』『冥途の飛脚（めいどのひきゃく）』『女殺油地獄（おんなごろしあぶらのじごく）』『国性爺合戦（こくせんやかっせん）』などがある。

近松へのインタビューとして穂積以貫（ほづみいかん）『難波土産（なにわみやげ）』があり、このなかで「虚実の皮膜（ひまく）」の話がでてくる。

●竹本義太夫＝たけもと　ぎだゆう（一六五一〜一七一四）→浄瑠璃語り・義太夫節の創始者。

語句

寂寥＝せきりょう→心が満たされずわびしいこと　類義語に「寂寞＝せきばく（じゃくまく）」

浄瑠璃＝じょうるり→日本の伝統的な「語り」の音曲で、江戸時代には三味線を伴奏として人形芝居と結びつき、人形浄瑠璃となって流行した。

義太夫＝ぎだゆう→浄瑠璃の流派の一つ。「義太夫節」ともいう。太棹の三味線を伴奏にした力強い語りを特徴とする。

復習問題　第九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）注意とケイコクを発する　①国　②酷　③告　④鵠　⑤哭

（イ）三途の川の此岸とヒガン　①秘　②彼　③飛　④誹　⑤火

（ウ）結論としてキチャクする　①帰　②機　③貴　④揮　⑤来

（エ）無理をしたヘイガイが出る　①幣　②弊　③丙　④併　⑤塀

（オ）偉大なゴウケツが居並ぶ　①剛　②轟　③業　④傲　⑤豪

（カ）ユウシキ人による提案を聞く　①雄　②有　③裕　④宥　⑤勇

（キ）ヘイゼイの人との親交を語る　①生　②贅　③勢　④性　⑤世

（ク）シッペイ予防に心がける　①弊　②屏　③丙　④病　⑤平

（ケ）学問上のシンエンな問い　①遠　②艶　③園　④縁　⑤宴

（コ）自分を縛るケンソクがある　①側　②即　③塞　④束　⑤則

第十講　小説その３　日常と非日常

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうっと打ちつけては、またごうっと打ちつけて皆痩せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響きを立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつつまたたいた。そうして西風はどうかするとぱったり止んでしまったかと思うほど静かになった。泥をちぎって投げたような雲が不規則に林の上に凝然とひっついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心ぼそくなった。

お品はまた天秤をおろした。お品は丈の短い天秤の先へ木の枝でこしらえた小さな鍵の手をぶらさげて、それで手桶の柄をひっかけていた。お品は百姓の隙間には村から豆腐を仕入れて出ては二、三か村を歩いてくるのが例である。手桶で持ち出すだけのことだから資本も要らない代わりには儲けも薄いのであるが、それでも百姓ばかりしているよりも日毎に目に見えた小遣い銭が取れるのでもうしばらくそうしていた。手桶一提げの豆腐ではいつもの所をぐるりと回ればきっとなくなった。帰りには豆腐の壊れでいくらか白くなった水を捨てて天秤は軽くなるのである。お品はいつでも日のあるうちに夜なべに縄になう藁へ水を掛けておいたり、落ち葉をさらって見たり、そこらここらと手を動かすことを止めなかった。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思ったことはなかった。

A<u>それがこの日は自分でもひどく厭であった</u>が、冬至が来るから蒟蒻の仕入れをしなくちゃならないといって無理に出たのであった。冬至というと俄商人がぞくぞくと出来るので急いで一遍歩かないと、その俄商人に先を越されてしまうのでお品はどうしても凝然としてはいられなかった。蒟蒻は村にはないので、仕入れをするのには田圃を越えたり林を通ったりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品はその途中で商いをしようと思ってこの日も豆腐を担いで出た。あいにく夜から冴えきっていた空には激しく西風が立って、それに逆らって行くお品は自分でひどく足下のふらつくのを感じた。ぞくぞくと身体が冷えた。そうして豆腐を出すたびに水へ手を刺しこむのが、震えるように身にしみた。かさかさに乾燥いた手が水へつけるたびに赤くなった。ひびがぴりぴりと痛んだ。懇意なそこここでお品は落葉を一くべ焚いてもらっては手をかざしてやっと暖まった。蒟蒻を仕入れ

て出た時はそんなこんな暇をとっていつになく遅かった。お品は林をいくつも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれどものういような心持ちがして、いくたびか路傍へ荷をおろしては休みつつ来たのである。

お品は手桶の柄（え）へ横たえた竹の天秤へ身をなげかけてどかりと膝を折った。ぐったりなったお品はそれでなくてもみじめな姿がさらにしどけなく乱れた。西風の余波がお品の後ろから吹いた。そうして西風は後ろで括（くく）った汚い手ぬぐいの端をまくって、油の切れた埃（ほこり）だらけの赤い髪の毛をこきあげるようにしてその垢（あか）だらけの首筋をむき出しにさせている。それと共に林の雑木はまだ持ち前の騒ぎを止めないで、路傍の梢（こずえ）がずっと撓（しな）ってお品の上からそれを覗こうとすると、後からも後からも林の梢が一斉に首を出す。そうしてしばらくしては、また一斉に後ろへぐっと戻って身体を横にゆさぶりながら笑いさざめくようにざわざわと鳴る。

お品は身体に変態を来したことを意識すると共に恐怖心を抱きはじめた。三、四日どうもなかったのだから大丈夫だとは思ってみても、こう凝然としていると遠くの方へ滅入ってしまうような心持ちがして、普段からいくらか逆上性でもあるのだが、そう思うと耳が鳴るようで世間がかえって静かになってしまったように思われた。ふと気が付いた時お品ははきはきとして天秤を担いだ。林がつきて田圃（たんぼ）が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとりつきである。青い煙がすっとのぼっている。お品は二人の子供を思って心が躍った。林の外れから田圃へおりる所はわずかに五、六間であるが、勾配（こうばい）の峻（けわ）しい坂でそれが雨のあるたびにそこらの水を集めて田圃へ落とす口になっているので自然に土がえぐられて深い窪みが形づくられている。お品は天秤を斜めに横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後ろの手桶の柄へ掛けて注意しつつおりた。それでもほとんど手桶一杯になりそうな蒟蒻の重量は少しふらつく足を危うく保たしめた。やっと人の行き違うだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。お品は白茶けたほど古くなった股引（ももひき）へそれでも先の方だけ継ぎ足した足袋（たび）をはいている。大きな藁草履（ぞうり）は固めたように霜解けの泥がくっついて、それがぼたぼたと足の運びをさらに鈍くしている。狭く連なっている田を縦に用水の堀がある。一、三株比較的大きな榛（はん）の木の立っている所にわずか一枚板の橋が斜めに架けてある。お品は橋の袂（たもと）でちょっと立ち止まった。そうして近づいた自分の家を見た。村は台地にあるのでお品の家の後ろはすぐに斜めに田圃へずり落ちそうな林である。楢（なら）や雑木の間に短い竹が交じっている。いい加減大きくなった楢の木は皆葉が落ち尽くしているので、その小枝を透してくぼんだ棟が見える。白い羽の鶏（にわとり）が五、六羽、がりがりと爪で土を掻（か）っ掃（ぱ）いてはくちばしでそこを啄（つつ）いて、またがりがりと土を掻っ掃いては

余念もなく夕方のえさを求めつつ田圃から林へ帰りつつある。お品は非常な注意をもって斜めな橋を渡った。四足目にはもう田圃の上に立った。その時は日はとうに没して見渡す限り、田から林から世間はただ黄褐色に光ってそうしてまだ明るかった。お品は田圃からあがる前に天秤をおろして左へ曲がった。自分の家の林と田との間には人の足跡だけの小径がつけてある。お品はその小径と林との境を仕切っている牛胡頽子の側に立った。鶏の爪の跡がそこの新しい土を掻き散らしてあった。お品は土を手で集めて草履の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたように止んでいて、庭先の栗の木にぶっかけた大根の乾びた葉も動かなかった。白い鶏はお品の足下へちょろちょろと駆けて来て何か欲しそうにけろっと見上げた。[B]お品は平常のように鶏などへ構ってはいられなかった。お品は戸口に天秤をおろしていきなり、

「おつう」と呼んだ。

「おっかあか」とすぐに[C]おつぎの返事が威勢よく聞こえた。それと同時に竈の火がひらひらと赤くお品の目に映った。朝から雨戸は開けないので内はうす暗くなっている。外の光をみていたお品の目にはすぐにはおつぎの姿も見えなかったのである。戸口からではおつぎの身体は竈の火を覆うていた。返事すると共に身体をねじったのでその赤い火が見えたのである。

（長塚　節「土」）

問１　傍線部Ａ「それがこの日は自分でもひどく厭であった」とあるがそれはなぜか。次のうちから、もっとも適当なものを一つ選べ。

① 冬至が近づくと俄商人が現れるので、彼らに先を越されると予想したから。
② 二人の子供だけを残して行商に出るのが、この日に限って不安であったから。
③ はげしい西風が吹き、それに逆らって行くと、足がふらつき、体が冷えきってしまうから。
④ 豆腐の水へ手を入れるたびに、冷たさがふるえるように体にしみて、手のひびも痛くなるから。
⑤ 生まれつき丈夫なので仕事は苦しいと思わなかったのに、この日は体の調子がおかしいと感じたから。

問２　傍線部Ｂ「お品は平常のように鶏などへ構ってはいられなかった」とあるが、お品はふだんどのように鶏に接していたと思うか。次のうちから、もっとも適当なものを一つ選べ。

①　お品はつねに鶏をわが子のようにかわいがっており、その成長を楽しみにしていた。
②　お品は母親として子供のことだけしか念頭になく、鶏にはいつもあまり構っていなかった。
③　行商のため、外出しがちであったお品は、鶏などはいつも子供まかせで構っていられなかった。
④　お品は鶏が寄ってくると、いつもは何か声をかけたり、餌（えさ）をやったりしていた。
⑤　お品はいつも鶏の世話をしており、盗まれたり行方不明になったりするのをたえず恐れていた。

問３　傍線部Ｃ「おつぎの返事が威勢よく聞こえた」以下の場面の説明として、次のうち、どれが最も適当か。一つを選べ。

①　若いおつぎの元気な姿を表現しており、疲れたお品との対照が新鮮な印象を与えている。
②　母親の帰宅を待ちかねていたおつぎのはずんだ返事が、明るい雰囲気をかもし出している。
③　おつぎの元気な返事とともに、暗い情景に明るい火が現れたことで場面の印象が鮮明になっている。
④　お品が無事帰ってきたので、かまどの火を前にして明るく叫んだおつぎの心情がよくでている。
⑤　威勢のいい返事とかまどの赤い火とが対照的に描かれており、暖かい一場面を構成している。

問４　本文全体についての説明として、次のうち、どれが最も適当か。一つを選べ。

①　すぐれた農民文学の冒頭にふさわしく、苛酷（かこく）な自然とたたかいながら生きる農婦のけなげな生活ぶりが、力強く写実的に描かれている。
②　西風の吹きすさぶきびしい自然を背景に、苦しい労働に耐えつつ、身体の変調におびえる農婦の生活を、親子の情愛をおりこみながら巧みに描き出している。
③　きびしい自然と貧しさのなかにあっても、母が子を思い、子が母を気づかう人間的な深い情愛が、平和な農村風景を背景に叙情的に美しく描かれている。

④　とくに技巧を用いることなく、冬の自然と農民生活をそのまま綿密に描写しており、小説の一節というよりも記録文の典型とでもいうべきものになっている。

⑤　冷たい西風が吹きつける冬の日暮れからはじまるところに、春も夜明けもはるかに遠い絶望的な農民の生活と心情が鮮やかに描き出されている。

第十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●長塚節＝ながつか　たかし（一八七九〜一九一五）
↓農民作家・農民歌人として知られる。また正岡子規の正統後継者とも評される。

語句

擬人法＝ぎじんほう↓人間ではないものを人間であるかのように表現する技法
擬態語＝ぎたいご↓事物の様子を感覚的あるいは音に聞こえるように表現したもの・オノマトペ
対照＝たいしょう↓対比・コントラスト　（例）対照的な姉妹だね
対象＝たいしょう↓対象物・オブジェクト
対称＝たいしょう↓図形的につりあう・シンメトリー　（例）左右対称・線対称
俄か＝にわか↓急に・突然
懇意＝こんい↓親しく交流している

復習問題　第十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）ヒツウな叫び声を上げる
①火　②被　③秘　④誹　⑤悲

（イ）体はジョウブな方だ
①婦　②負　③歩　④夫　⑤普

（ウ）彼とはコンイな間柄です
①意　②位　③委　④居　⑤衣

（エ）イセイのいい返事が聞こえる
①意　②威　③射　④畏　⑤猪

（オ）坂のコウバイがきつい
①廃　②這　③背　④配　⑤買

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）俄かに
①いそいで　②変則的に　③突然に
④四方八方に　⑤利己的に

（キ）しどけなく
①しどろもどろに　②髪や服装が乱れて　③わざとらしく
④ごく自然に　⑤取り乱して

（ク）持ち前
①相手と分かち合っているもの　②おとどけ品　③もともと持っている性質
④相手から勝ち取ったもの　⑤変化しないもの

第十一講　科学技術論

合理的な仕方で問題を解決するには、一定の仕方で人工物を用いることを推奨したり、あるいは強制したりする必要性のあることは否定できない。したがってまた、技術のあり方を意図的に制御することが問題になる時には、ほとんどの場合、そこでの議論の焦点は、技術的人工物の使用や制作に備わる非合理的な面を修正し、合理的なものへと改良することに据えられることになるだろう。

しかしながら他方、現実の状況というのは、多くの要因が絡み合った多様性を示すので、人工物が用いられる場合に、必ずしも常に一義的な仕方で使用の仕方が実現するとは限らない。しばしば、道具を設計したデザイナーの意図と反するような仕方で道具が使用されたり、あるいは、ある状況での道具の使用を介して道具に全く新たな目的が付加されるということも起きる。やや極端な例ではあるが、金槌（かなづち）は状況に応じて、本来の目的のほかに、人に危害を加えるためにも、ものを押さえるためにも、あるいは、芸術作品として用いられることもある。どのような人工物も、程度の違いはあれ、このような多次元性をもっているし、しかも、技術の歴史はこの種の事例で満ちているともいえる。

例えば、一七世紀から一八世紀にかけてヨーロッパから多数の機械時計が中国に輸入された。それらはおもに交易を求めたヨーロッパ人が中国の皇帝に献上品として運んできたものである。当時の中国は古来の不定時法を採用していたので、機械時計は実際の生活に役立つものではなかった。にもかかわらず、多数の時計が持ち込まれたのは、芸術作品、ないし、玩具（がんぐ）として、おもに宮廷に関係する人々にとっての鑑賞の対象になっていたからである。このように技術伝搬の過程で、人工物が本来の仕方とは全く異なる仕方で用いられるようになる可能性は、原理的には避けることができない。さらに、中世における風車の伝搬の歴史をあげることもできる。L・ホワイトによると、「チベットでは風車は祈禱（きとう）のためにのみ用いられている。中国の風車はポンプや、運河の水門で船を引き上げるためにのみ利用され、粉挽（ひ）きには使用されない。アフガニスタンでは風車は主として粉挽き用である」。

これらの例は、技術的人工物が異なった文化的脈絡のなかで用いられる場合には、あらためて「解釈」される必要のあること

を示しており、その意味で、異なった文化のあいだで発揮される人工物に備わる[A]「解釈の柔軟性」を示しているということができる。しかしながらここで反論が提出されるかもしれない。すなわち、こうした事態は、近代以前ないし近代初頭の技術にはみられるかもしれないが、産業革命以降の近代的機械技術の場合には、自動車の例が典型的であるように、それを支える巨大なネットワークを前提にするので、このような「解釈の柔軟性」が成立することはほとんど不可能ではないか、という反論である。たしかに、産業革命以前の技術と以後の技術では、技術を支えるネットワークの大きさという点の違いは際立っており、この点で、[B]すべての技術に関して同じように「解釈の柔軟性」を語ることはできないだろう。にもかかわらず、制作された最初の目的や機能とは異なった仕方で技術が「解釈」されるようになる可能性は、二〇世紀の技術の場合にも決して珍しいわけではない。

　インターネットが典型例の一つである。よく知られているようにインターネット技術のもともとの起源は軍事的領域にあったが、現在では日常生活の新たなコミュニケーションの形態を作り上げることになった。自動車の技術もこの例に含めることができる。ベンツやダイムラーらが自動車を発明する以前に、あるいは、フォードがT型フォードを開発し、自動車が大量生産されるようになる以前に、馬車より速い乗り物がないことは「問題」ではなかったし、馬車より速い乗り物に対する強い社会的な需要があったわけでもない。例えば、アメリカでは、自動車は最初は都市部の富裕階級によっておもに娯楽のために用いられる乗り物として登場した。農村部では、自動車は馬車による交通の邪魔になり、家畜に被害をもたらし、道路を破壊するやっかいものでしかなく、「悪魔の乗り物」（devil wagon）と呼ばれ、嫌われた。自動車が農村部での日常的使用にも耐えるようなデザインに改良され、広く普及されるようになってはじめて、つまり、自動車によって移動することが自明化し、日常的な価値基準の一つとなってはじめて、一般に自動車が存在しないことが「問題」と見なされるようになったのである。

　これらは、既存の目的―手段―連関が、技術の展開のなかで変換され、新たな目的―手段―連関を形成することになったという点で[C]技術の創造性が発揮された例と考えられる。

　こうした事例に加えて、技術の歴史のなかには、意図に反した結果がもっぱら「否定的」に解される事例も豊富に見出される。例えば、Ｅ・テナーは『逆襲するテクノロジー』のなかで、オフィスのネットワーク化は紙でコピーを取ることを不要にするだろうという未来学者の予言に反して、現在のオフィスは紙であふれているという事態、あるいは、ある地域で安価なセキュリティ・システムの導入がなされたが、それによって誤作動や誤報が多くなったために、かえって前よりもセキュリティのレヴェルを下

げることになってしまったといった事例をあげて、「モノが反撃しているように見える」と述べている。
これらの事例は、技術が単なる道具に還元できない「他者性」を持つことを印象深く示している。ただし、ここで示されている他者性は、広い意味で「創造性」ということのできる特徴である。というのも、これらの事例で示されているのは、技術の展開がデザイナーや製作者の意図に反して実現する過程であり、そしてこの過程はポジティヴに評価されるにせよネガティヴに評価されるにせよ、いずれにせよ、人工物が新たな意味を獲得する過程だと考えることができるからである。

（村田純一「技術哲学の展望」）

問１　傍線部Ａの「解釈の柔軟性」とはどういうことか。三〇字以内で説明せよ。

問２　傍線部Ｂに「すべての技術に関して同じように『解釈の柔軟性』を語ることはできないだろう」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を用いて、四〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｃの「技術の創造性」とはどういうことか。全体の論旨を踏まえて、一二〇字以内で説明せよ。

第十一講　知識モノ解説

語句

合理的＝ごうりてき→経済や技術の分野では能率的・効率的の意味。
　会社の「合理化案」というとリストラや不採算部門をカットすること
　心理学での「合理化」は自分に都合の良い言い訳を用意すること

還元＝かんげん→単純化する・元に戻す

他者性→自己ではないもの・思い通りにならないもの・人間が生み出したものが人間の制御に完全には
　従わないという皮肉・疎外＝英語でエイリアンネーション（↔親密）

復習問題　第十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）一定の方法をスイショウする　①省　②章　③招　④奨　⑤償
（イ）機械の動きをセイギョする　①精　②性　③制　④正　⑤政
（ウ）イチギ的な結論にたどりつく　①議　②儀　③義　④偽　⑤技
（エ）工業製品のフカ価値　①加　②化　③過　④箇　⑤荷
（オ）テンケイ例を挙げる　①形　②景　③傾　④型　⑤計
（カ）発想をジュウナンにする　①重　②従　③充　④柔　⑤住
（キ）ゴラク番組を視聴する　①伍　②御　③碁　④醐　⑤娯
（ク）キソンの価値観にとらわれる　①概　②既　③棄　④基　⑤帰
（ケ）携帯端末がフキュウする　①朽　②及　③急　④求　⑤給
（コ）要素にカンゲンする　①元　②現　③源　④原　⑤減

第十二講　芸術論

変形によって芸術のすべてが説明できる、とは言えなくても、芸術的創造が先行するものの変形を重要な要素として含むことは疑いがない。このことから、いくつかのことが帰結する。

芸術の創造が先行するものから出発してそれを変形するのであれば、芸術のスタイルが変化するのは必然的である。この点で芸術は科学と異なっている。

科学の場合でも変化というものはあるし、その変化は、客観的真理への接近といったものではなく、クーン(注1)のいうパラダイム・チェンジといった性格をもつものかもしれない。しかし、科学の場合は変化する必然性はないように思われる。もし科学がその目標に到達して、すべてをきれいに説明できるような日がくれば、そこからさらに変化していかなければならないという理由はない。科学の場合、変化は、まだ目標に達していないことのしるしである。しかし芸術の場合、変化は未完成のしるしではないし、いつの日にか変化しないような状態に到達するわけでもない。

もしバッハが偉大で（たしかに偉大である）、完璧（かんぺき）な曲を作った（実際、完璧と思わずにはいられない。訂正の余地がないように思えるのだから）のだとすれば、人類はそれ以降の作曲家を必要とせず、バッハも完璧な曲を作った後は作曲をやめたとしてもよさそうなものである。しかし実際には、どの芸術家も作品を作れるかぎり作り続けるのであり、芸術家はつぎからつぎに登場するのである。これは芸術全般にみられる基本的事実である。Aどんなに「完璧な作品」を作っても、それで終わりということにはならないのである。

芸術のたどる変化は、服装などの流行の変化に似ているところがある。服装の流行の変遷も、終焉（しゅうえん）をむかえることはないだろう。しかし服装の場合は、同じ個人が年月を経たあげくに以前の好みに帰るということがありうるが、芸術の場合は不可逆的であるように思われる。服装の流行は循環しうるが、芸術の場合は過去とまったく同じスタイルが復活することはないように思われるのである。

伝統や歴史の中で先行のものを基盤としてはじめて芸術が成立するのだとすれば、「すぐれた芸術作品は時代を越えて万人の

胸を打つものだ」という考えは誤解をはらんでいると言えるだろう。

アリストテレスは、詩人の方が歴史家よりもすぐれていると考えた。それは、歴史家が現実的事実にかかわるのに対し、詩人は可能性にかかわるからである。このことでアリストテレスが意味しているのは、歴史家は現実の個別的事物にあてはまることしか語らないが、詩人（叙事詩、悲劇、喜劇などの作者）は人間一般など、普遍的に成り立つことを語る、ということである。これは重要な指摘であるとわたしは思う。しかしそれを拡張して、すぐれた芸術は時代と場所を越えて万人の胸を打つ、とまで言うのは飛躍である。作品に感動するためには、伝統のなかに身をおいて、先行するものを十分理解していなくてはならない。先行のものから離れては制作も鑑賞もできないのである。

B「芸術は人間の純粋な感性に訴える」という考え方も誤解を招くものである。芸術が知性だけで十分だ、と言えないことは明らかであるが、かといって感性さえあればよい、というものでもない。制作にも鑑賞にも、何が先行するもので、どのように変形されているかということに対する理解の果たす役割は大きい。この理解は、感動することとは違うし、制作することとも違うが、感動にも制作にも不可欠のものである。理解ということでわたしが意味しているのは、制作の背景とか動機（芸術家の生い立ちとか社会情勢など）についての知識ではなく、基本的には、変形の理解をはじめ、専門家の条件の多くを含む複合的なもののことである。

たとえばジャズで、決められた和音進行に沿って即興演奏するのを聴いていて、いま曲のどの箇所を演奏しているか、何をどう変形しているか、その時の和音は何か、何拍子で何小節単位の曲かなどを指摘できなければならないだろう（さらに、使われている音の階名が言えれば申し分ない）。さらには、緊張して演奏している箇所とリラックスしている箇所、ソロとリズム・セ(注2)クションの間がうまくいっているときとそうでないときなどを識別したり、演奏のなかにミスがあればそれを指摘できなければならない。さらに、曲のどの部分が決まり文句で、何が奇抜な部分か、どんな効果をねらっているか、などを指摘できることが理解の基準とされることもある。普通、これらの理解に達するには、教育や訓練が必要である。専門家と素人の区別は主として理解力の違いである。あるいは、(注3)ポリフォニーの音楽を聴いていて、何本ものメロディーが独立に聞こえなければ理解しているとは言えない。

これらはもちろん、テストして合否を決めるような問題ではないし、直接、感動に結びつくわけではない。だが、これらの水

準に達していないと、作品を味わいつくすことはできない、と言いたくなるところがある。これで思いだすのは次のような実話である。

アメリカのある一家が子供の教育のためにグランド・キャニオン(注4)に自動車旅行をした。父親は道すがら、グランド・キャニオンができるまでにどれだけ長い年月がかかったか、この自然の驚異を一目見ようと人々がヨーロッパからはるばるやってくることなどを、こんこんと子供に語って聴かせた。ついにグランド・キャニオンに着いた一家は縁に立って、畏敬と驚異の念をもってながめ、写真をとった。その夜、父親は教育の成果を確認するため、子供がつけている日記をこっそり見た。日記には一行書いてあるだけだった。「今日ぼくはつばを一マイル(注5)先まで飛ばした。」

同じものを見て同じように歓声をあげても、十分に味わっていないことがありうる。十分に味わっているかどうかを決める基準は、鑑賞しているときのふるまい（どこでどんな反応を示したかなど）のほかに、どの程度理解しているかということも含まれているのである。もちろん、ここでいう「理解」をもっていなくても芸術を楽しんでいる人が数多くいるという事実を否定するつもりは毛頭ない。ただ、そのような人の楽しみ方は、作者をはじめ専門家の楽しみ方とは異なったものであるとわたしは言いたい。

（土屋賢二『猫とロボットとモーツァルト』）

（注）１　クーンのいうパラダイム・チェンジ――アメリカの科学哲学者トーマス・クーン（一九二二〜一九九六）が提示した概念で、科学者たちが共通して用いている思考パターン自体が転換すること。
２　リズム・セクション――ポピュラー音楽で、リズムの進行を受け持つ楽器の部門。
３　ポリフォニー――複数の独立したメロディーを組み合わせた作曲形式。
４　グランド・キャニオン――アメリカ合衆国西部の大峡谷。
５　一マイル――約一六〇〇メートル。

問１　傍線部Ａ「どんなに『完璧な作品』を作っても、それで終わりということにはならない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　客観的にその発達を測ることができる科学に対して、芸術の分野ではそうした尺度がないため、芸術家は常にその尺度を作ろうとして、絶えず創作を試みるから。

②　いかにすぐれた芸術作品を作り上げようとも、その作品は多くの人々に評価され、流行するため、次第にその芸術作品に慣れてしまい、それとは違う新たな作品が求められるようになるから。

③　科学においては、変化は最終的な目標に達していないことを示すものだが、芸術においては、変化は新たな作品を生み出す絶え間ない運動であり、先行作品の変形が必然的なものだから。

④　科学は、より高度なものへ、優れたものへ、という形で変化していくが、芸術作品の創造は、そうした絶えず上昇していく変化ではなく、循環的な変化だから。

⑤　芸術作品は、先行して作られた作品の影響下にあり、先行する作品を十分理解し、それを模倣、変形して創作しようとするが、芸術においては完全な理解が不可能だから。

問２　傍線部Ｂ「『芸術は人間の純粋な感性に訴える』という考え方も誤解を招くものである」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　芸術を味わうことは、それ以前の作品との違いを味わうことでもあり、その意味で、様々な作品の形についての知識や、その変形を識別する能力が必要とされるため。

②　芸術は、人間の純粋な感性に訴えるというよりも、人間の醜さや弱点をも含めた、純粋とはいえないような暗い感性にも訴えることができるため。

③　芸術は人間にとっての普遍的な真実を追求するが、人間は時代によって変化しており、時代を超越した純粋な感性などは実際にありえないため。

④　芸術はそれまでの芸術作品を十分理解、変形することから生み出されており、先行する芸術作品をだれが、いつ、どの

ように作り上げたかという専門的な知識が必要とされるため。

⑤　芸術に感動するときには、だれしも純粋に芸術作品をとらえているのではなく、そこには鑑賞者の個人的な体験や好みなどが反映しているため。

問３　傍線部Ｃ「専門家の楽しみ方」とあるが、本文で説明されている「専門家の楽しみ方」の例として適当でないものを、次のうちから一つ選べ。

①　菊の花を見る時に、その花びら一枚一枚の色合い、形、向きを見た上で、茎や葉のつきかたとのバランスや、全体と細部との関係まで含めた出来のよさを鑑賞する。

②　絵画を鑑賞するときに、それを描いた画家が影響を受けた画家や、同時代の表現方法の特色、あるいは制作の動機などについて十分な知識を備え、それを頭に思い描きつつ見る。

③　テニスの試合を見るときに、その選手の立場に立って、そこで瞬時に下されている判断や、戦略を考え、同時にその選手がプレーしているコートの状態、天候などの外側の条件をも考慮しつつ見る。

④　料理を味わうときに、その料理がどのような素材を用いており、その素材をどのように変形して加工しているか、を判断すると同時に、素材の風味を十分に生かしているかをも味わう。

⑤　ある作家の書いた小説を読むときに、その作品に描かれた登場人物の生き方に感動し、その生き方と読者自身の生き方とを対比しながら、人生の真実を深く読み味わう。

第十二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●アリストテレス（ＢＣ三八四〜三二二）　古代ギリシャの哲学者・万学の創始者。

物理学→フィジックス

形而上学＝けいじじょうがく→メタフィジックス・目に見える物を超えた本質追究の学問

1ソクラテス―2プラトン（アカデメイア）―3アリストテレス―4アレクサンドロス

語句

普遍＝ふへん→すべてにあてはまる・あまねく広く／不変→変わらない／不偏→かたよらない

偏在＝へんざい→かたよって存在・部分的にしかない／遍在＝へんざい→どこにでもある

科学史科学哲学

美学→エステティックス・芸術哲学

パラダイム→多くの人が共有している約束・前提

復習問題　第十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）この原理からいくつかのことがキケツする　①着　②帰　③来　④基　⑤期

（イ）大気が大きくジュンカンする　①順　②潤　③準　④巡　⑤循

（ウ）歴史的なヘンセンをたどる　①線　②遷　③選　④戦　⑤潜

（エ）ソッキョウ演奏の腕前をみせる　①即　②速　③束　④促　⑤側

（オ）議論がヒヤクしすぎだ　①訳　②役　③厄　④約　⑤躍

（カ）政治的なジョウセイが変わる　①定　②情　③場　④常　⑤剰

（キ）大胆で発想がキバツだ　①貴　②気　③奇　④鬼　⑤紀

（ク）犯行のドウキが明らかになる　①気　②期　③機　④生　⑤揮

（ケ）大自然のキョウイを堪能する　①畏　②威　③緯　④易　⑤異

（コ）研究のセイカを発表する　①花　②果　③科　④架　⑤荷

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 対比混乱の誤り ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け**失敗の選択肢といってもいい。

2 同一性分断の誤り ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。

3 正しい対比喪失の誤り ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 不当な全称判断 ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 不当な限定判断 ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 不当な価値判断 （不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「ＡはＢである」としているのに「ＡはＢではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては１～８・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

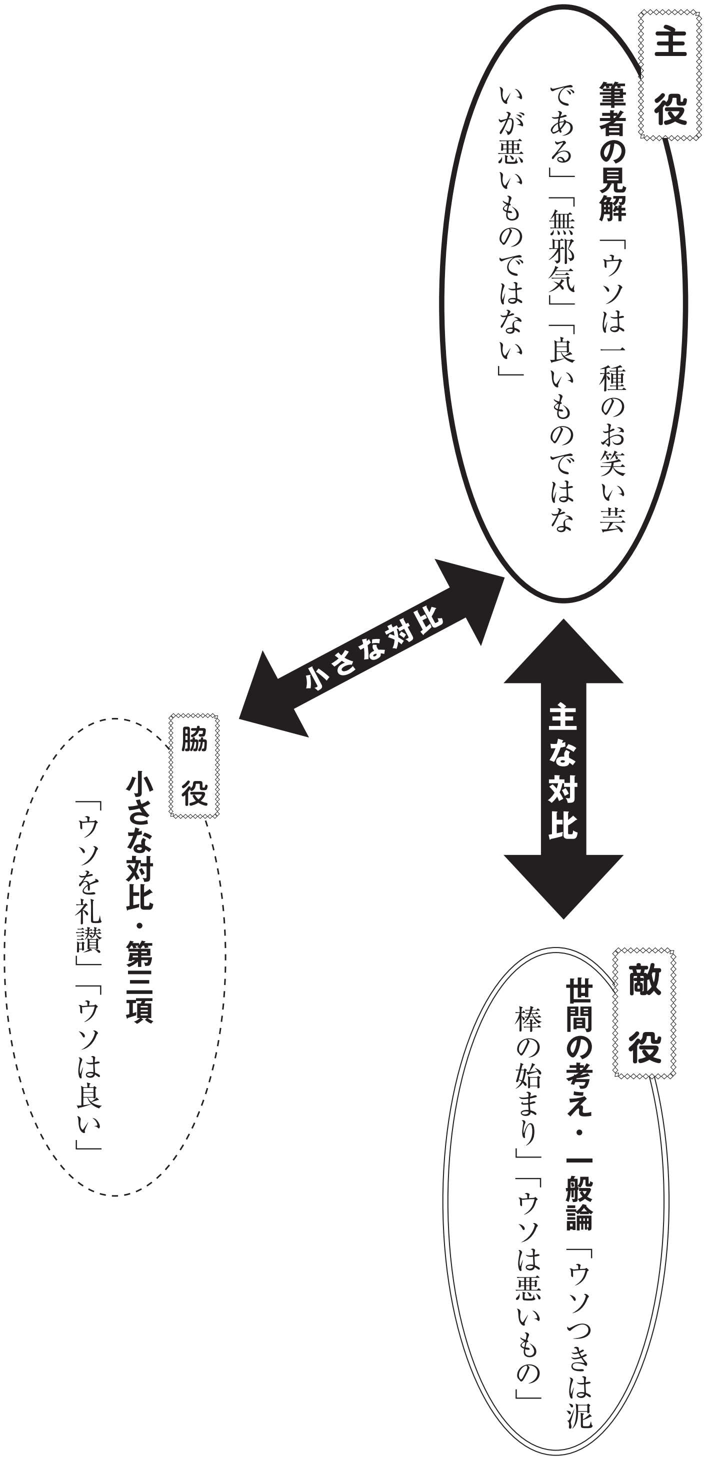
10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝(ひざ)がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

《本文の対比構造》



《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

筆者側のキーワードを答える問題です。したがって「無邪気」＝「悪くない・イノセント・無罪」、「小児」「子供」のウソと同種の言葉が入ります。したがってロの「清い」です。潔白で罪はないということ。刑事ドラマでも聞くように、極悪人に見えても「ヤツは白ですぜ」。ニ「ひどい」、ホ「まずい」など悪く言うのは、世間側の評価、一般論です。つまり対比混乱の誤りです。ハの「良い」は小さな対比ではありますが、やはり筆者の見解ではない対比混乱の誤りです。イの「深い」は、正しい対比喪失の誤りです。すなわち、あたかもこの文章が「深いウソと浅いウソ」を比べていたかのような間違った選択肢です。

問２《語彙知識に関する空欄補充》

Ｂ　空欄前後に類似する語がたくさん出てきます。「機会」「加減」「岐路」「限度」などの表現です。つまり、「そろそろネタばらしするタイミングだな」ということで、「潮時」となります。

Ｃ「名声」がどんな形の報酬、ご褒美なのかという問いです。実は隠れた対比が働いています。すなわち、一般的なご褒美は「お金・品物」など、ありあり物質的な「有形」のもののはず。ところが「ウソつき」芸人は、評判や名誉だけということですから「無形」となります。

問３《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

「ウソ↔X」「Y↔Z」「笑うべきソラゴト↔憎むべきキョゴン」と三回対比的キーワードを繰り返しています。整理すれば、筆者が無邪気で悪くないと言っている側「ウソ・Y・笑うべきソラゴト」vs 世間が悪く言う方「X・Z・憎むべきキョゴン」です。さて、選択肢に出てくる「イツワリ」「ゴマカシ」は本文中にはないことばです。一方「デタラメ」のみ「出鱈目」として本文中に登場します。しかも、悪気のない作り話という意味で。したがって、空欄の内、唯一筆者サイドのYに「デタラメ」と入ります。かくして選択肢としてはイと決まります。

模範解答

問１＝ロ　問２　Ｂ＝潮　Ｃ＝無　問３＝イ

第一講　入試現代文の導入　その2《小説》

《本文の対比構造》

主役

弱者に寄り添うヒロイン
＝孫娘のタエト
＝優しさをもち冷静さをもたらす役

主な対比

敵役

朽助じいさんとタエトの
二人の山での暮らしを奪うもの
＝ダム工事・役人＝魔物＝化物

小さな対比

脇役

家を奪われる者・タエトに救われる
者・怒れる者＝朽助・小鳥および朽
助と行動をともにする語り部の「私」

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「家を奪われた者」朽助と「家を奪った者」ダム工事＝「魔物」との対比関係を問うている設問ですから、答えは①です。②は朽助を「私」と敵対的対比であるかのように扱った誤りです。両者は同一グループなのに。名付けて同一性分断の誤りです。③は「私」を敵役である「ダム工事」と同類に扱ってしまっています。グループが違うものを混ぜてしまっているのです。したがって対比混乱の誤りです。④はあたかも本当に「魔物」が住むかのような表現です。「魔物」は家を奪うものを比喩的に表現したものであって、火を噴くドラゴンかなにかのような実体ではありません。つまり比喩を文字通りに解釈してしまった誤り、比喩の誤解です。⑤は「自分も魔物となって」とあるように、やはり違うグループのものを混ぜてしまいました。対比混乱の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

主役ヒロインであるタエトの行為に関する設問です。また「家を奪われた者」との対比（敵対ではないよ、「役」が違うということ）が重要です。まさにそれぞれの登場人物（小動物も含む）の役割ごとのグループ分けができたのかを受験生に問う設問です。なお、タエトが石を投げているのは、手が届かないからです。前半では朽助の目を手で覆い、「見るから興奮するのですよ、目を閉じて冷静になってね」という行動をとりました。それと同種の行為です。朽助と小鳥が似たものとして描かれているように、タエトの役割も一貫した優しさです。そのため③が正解です。①は「怒れる者」として朽助もタエトも一緒にされています。したがって対比混乱の誤りです。⑤も同様の誤りで、小鳥の「抗議」を「応援」するという形で火に油を注いでいます。タエトの役は寄り添いつつも「冷静さ」です。②はタエトの役設定を無邪気キャラ＝「おもしろ半分」キャラにしています。記述に反する誤りです。また後半の道徳的には「いけない」が、美学的に「美しい」という対比は本文の正しい対比喪失です。「私」の眼がいやらしいですね。④もタエトのキャラ設定を誤解しています。飛んでいる小鳥を石で獲物にできる野生児であるかのようです。「ダム工事＝文明　vs　野生＝タエト」というような展開になってしまいます。勝手にストーリー展開してはダメです。したがって、正しい対比喪失の誤りです。

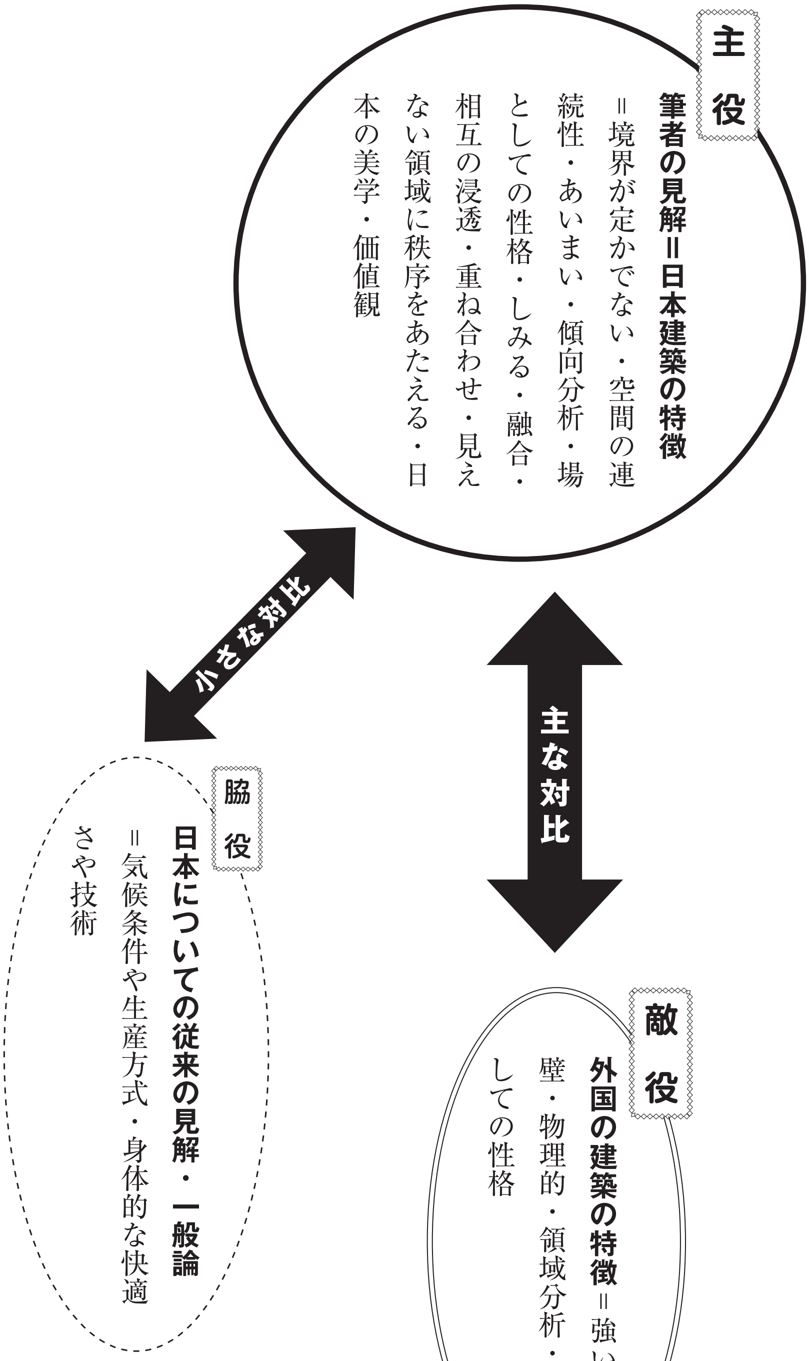
模範解答

問１＝①

問２＝③

第二講　日本文化論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

まず「傾向分析」が、筆者が主張する日本建築の特徴だと理解できることが大事。そうなれば《本文の対比構造》の通り、⑤が正解。①は「壁」「物理的」とあるように外国側の特徴を挙げています。対比混乱の誤りです。②の「絶対的」は、直接本文にはない語ですが、外国側と判断できます。したがって、これも対比混乱の誤りです。③は「抽象的」が×。というのも、日本建築も外国建築も両者とも「ふすまや障子」「壁」など具体的なものを扱っています。つまり「抽象⟷具体」という対比ではありません。正しい対比喪失の誤りです。④は「主観的」はよいのです。ただしそれは文中の「価値観」を言い換えたものとしてならOKということです。ところが、この選択肢は、「かたよった」と表現しており、ダメです。「主観」だから「気分や好き嫌いがでる」かのような決めつけは文脈とは無関係です。こういうのを文脈喪失の誤りといいます。

問２《傍線部説明・選択肢》

この俳句は日本建築、日本文化を語る「しみる」「しみ入」という術語＝キーワードを含んでいるという点が重要です。つまりこれも筆者側の見解を問う設問です。したがって「相互浸透性」「融合性」との説明をしている③が正解。これ以外は、ことごとく本文中にはない変なものを比べている間違いです。すなわち、「日本・浸透⟷外国・強い境界」が正しい対比なのに、①は「ひたむき」一生懸命となまけ・怠惰とを比べているかのようです。②は「騒がしい」と「閑さ」を比べています。④は「さび」つまり枯れた味わいを挙げ、外国はぴかぴかの新品が好きであるかのような対比を想定してしまっています。⑤は「静⟷動」という対比で、もはや「しらじらしー」と叫びそうです。つまりことごとく正しい対比喪失の誤りなのです。

問３《全体の要旨説明・選択肢》

①は「仮想」が誤り。すべて現実です。夢の中の建築の話ではありません。②は「気候条件や生産方式」と「美意識」という筆者が区別している（対比させている）もの同士を「培われた」との表現で同種扱いしています。これも対比混乱の誤りと呼ぶべきです。このように本文中の対比関係を正しく読み取れていることが「文章読解力」なのです。入試もそこを確かめる

ような問と選択肢を繰り出してくるのです。③は「自然を畏敬（おそれうやまう）」が×。まるで外国は自然を軽んじて破壊しているかのような対比を想定しています。正しい対比喪失の誤りです。④は「空間意識の欠如」が×です。日本も外国のそれぞれの空間意識を「有している」のです。「あり・なし」の対比ではない。したがって正しい対比喪失と呼んでもよいですし、そもそも全文で日本人の空間意識のあり方をかたっているわけです。その内容に反します。つまり記述に反する誤りでしょう。⑤がパーフェクトな答えです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝③　問３＝⑤

第三講　情報化社会論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝「電脳社会で自己を保つ」・知識・体得・成熟・「時熟」・人間は時間とともに成熟していく存在

主な対比

敵役

現代社会＝電脳社会・デジタルネットワーク社会＝速度礼賛・便利さと速さ・人間を情報反応マシンに変える

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

アは、前文の「光速の伝達速度」「同時性」と空欄直後の「遅延なく伝達」の言い換えであるから４「即時」と決まります。イは、「台風情報」という具体例については速度が価値を持つ、言い換えれば、最新ニュースであることが死活的に重要という意味になり、８「本質」と決まる。ウは、文学とならぶじっくり読む文書資料を指します。第三段落の「分厚い研究書や古典」という例も根拠になり、１「古典」と判断できます。エは、現代社会という大きな敵役との対比である「私」「体験」の側とセットになる語句です。したがって、２「個人」。オも、現代社会という大きな外部に対抗するもので、「内側」に求めるものです。前段落の「このことへの自覚」という表現も決定的なヒントとなり、６「自覚」と決定できます。

問２《キーワードに関する語句抜き出し》

速度重視ではない、すなわち筆者側のキーワードを漢字二字で文中より抜き出します。注意点は、具体例ではなく、よりまとまった語句を選ぶこと。したがって「古典」「手紙」「書店」などではなく「知識」となります。

問３《キーワードに関する語句抜き出し》

今度は、情報社会側＝敵役側のキーワードをぴったり十字で抜き出します。「瞬間的な反応マシン（九字）」「一結節点にすぎない存在（十一字）」の言い換えでもあります。したがって「やせ細った刹那的存在」と決まります。

問４《全文理解に基づく正誤問題》

１は、最終段落の内容およびタイトル「電脳社会で自己を保つ」に合致する。２は「熟考する」まではよいですが、「情報を生かす」が誤り。筆者はスピード重視の「情報」を批判して「熟考」という表現を使っています。これは筆者側＝主役と敵役キーワードをごちゃまぜにした対比混乱の誤りの典型です。３は、情報速度重視が「しあわせ」をもたらすとの趣旨で筆者の意見とは正反対です。記述に反する誤りです。４は、情報反応マシンのような存在になるべきだとの趣旨で、これまた筆者

の見解とは正反対。５は、「情報化」により文学や思想を「体得できる」としていますが、これぞ対比混乱の誤りですね。６は、「早わかり方式」「情報」「一結節点にすぎない存在」と敵役キーワードとして一貫性があります。正しい説明です。

模範解答

問１　ア＝４　イ＝８　ウ＝１　エ＝２　オ＝６　問２＝知識　問３　やせ細った利那的存在

問４　１＝○　２＝×　３＝×　４＝×　５＝×　６＝○

第四講　近代化論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝日本の開国や文明開化は「西洋化」ではなく「近代化」である＝精神レベルで文明化していく動的プロセス重視・福沢諭吉の文明論・丸山真男の解説

主な対比

敵役

一般論＝西洋の模倣・表面的外形的文明化・文明化の具体的な成果を輸入・和魂洋才

《解説》

問１《知識と文脈理解にもとづく傍線部説明・選択肢》

傍線部と同一内容の表現が直後に繰り返されています。すなわち「文明の人と云ふべきや」「開化の人と称すべきや」という具合に。さらにそれらをまとめて「当時の知識人を痛烈に皮肉っている」とあります。これが決定的根拠。ウ「反語」が正解です。つまり**形式上は疑問形でありながら、実質的意味は強い否定**なのです。こういう表現を反語・皮肉・アイロニー（イロニー）といいます。

問２《傍線部言い換え・抜き出し》

「外の文明」とは、今回敵役の「表面的な西洋の模倣」のことです。国内文明に対する外国文明の意味ではありません。しかもその具体例にあたるものを抜き出します。「五文字」「二つ」という条件も重大なヒントです。問１の関連個所で皮肉（批判）られていた「断髪の男子」「肉を食ふ者」が該当します。

問３《傍線部説明・選択肢》

「その難」とは直前部の「内の文明」すなわち、西洋文明の精神レベルの受容のことです。これを日本国内のことだと誤解を誘う選択肢がアの「自国の文化」です。したがって、記述に反する誤りです。なお、傍線部は、この難しい精神レベルの文明受容を「先にして」と語っています。この点から「最初から内面的な難しい文化を学ぶのではなく」としてしまったウも、「外国の難しい文明を学ぼう～ではなく」としてしまったエも記述に反する誤りです。さらに傍線部は、具体的な形ある「外の文明」はいつでも船便で輸入し港に陸揚げできるという意味で容易に受容できるから「後にし」と表現しています。その後、精神レベルの受容の進み具合が深いか浅いか見計らって具体物を輸入するのがよいとしています。オの「内面的で難しいこと」イコール「深いもの」、一方「外面的でやさしいこと」イコール「浅いもの」という分類は記述に反しています。その点でそういう「理解は、不適当」としている点には矛盾はありません。しかし、そもそも設問条件そのもの、この傍線箇所の説明にはなっていません。ちょっと複雑でしたが、イが正解です。

問４《傍線部説明・選択肢》

傍線部の説明であると同時に、今回の文章全体の理解にかかわる設問です。まさに《本文の対比構造》として図示した通りの分類を求めているわけです。また傍線部直前の「西洋文明はその『近代』の一地方形態に過ぎない」とは、西洋が「近代化」そのものであったり、「近代化」というゴールに到達してしまっているのではなく、「近代化」が進んではいるが一つのあり方、いわばユーラシア大陸の西のはずれに位置する一つの地域なのだ、ゆえに他地域・他国も「近代化」を目指しうるという主旨です。アやオは、あいかわらず「内の文明」を日本国内と誤解したものです。記述に反する誤りです。ウは「達成」が誤りです。西洋も、他の地域も「達成」はしていません。目標として、それぞれ進度の違いはあっても、ゴールインせず、精神レベルの文明化の過程にあるのです。したがって記述に反する誤りです。イは「関連性の薄い」が誤りです。関連性は大いにあります。誤解されて同一視されるほどのものです。だからこそ、慎重に区別が必要なのだというのが本文の趣旨です。したがって、これも記述に反する誤りです。正解はエです。

模範解答

問１＝ウ　問２　断髪の男子・肉を食ふ者（順不同）　問３＝イ　問４＝エ

第五講　小説その２　物理と心理

《本文の対比構造》

主役

主人公「私」＝精神レベルの吝嗇（ケチ）＝仕事に精進する＝理想の仕事をやり遂げること＝「不思議の国」・その住人「**鶴おじ**」

主な対比

敵役

一般的な吝嗇＝物理レベルの吝嗇＝村人の理解・物欲の世界・金惜しみ・物惜しみ

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

村でも評判の、物理的ケチと見なされている鶴おじとなぜ仲良くなったのか、なぜ物欲ではない精神レベルの吝嗇があるとの発見にいたった「私」が鶴おじと意気投合したのか、知りたいでしょ、続きを読んでね、というメッセージです。したがって、③が正解です。①は、「自慢の気持ち」とあり、本文の「自惚れる」と合致するように見えます。ところが、本文の自惚れは、世間の気づかぬ精神レベルの吝嗇家に共鳴できることを誇っているのです。それに対して、この選択肢は「人のいやがる吝嗇家」との付き合いになってしまってます。つまりいやなヤツとも友達になれる器の大きさ、懐（ふところ）の大きさを誇ってしまいました。記述に反する誤りです。②の「あきらめ」、④の「危ぶむ」、⑤の「敬遠」などすべて鶴おじについて否定的で、記述に反する誤りです。なお⑤の「妙な人物」は、「不思議の国」つまり文脈的には「理想の国」を誤解したものですね。文脈喪失の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

「私」と鶴おじは、仕事に打ち込む者同士として意気投合し、飲み友達になっているわけです。したがって、⑤が正解。①は、鶴おじと「私」との関係のはずが、「若い者」と勝手に拡張されています。こういう間違いを不当な一般化といいます。また「若い者」では、村人という今回の敵役も含んでしまいますから、対比混乱の誤りといってもよいでしょう。②と④は、「屈折」「すさんだ」など否定的に書いています。金惜しみのくせに飲んだくれだと。もちろん記述に反する誤りです。とくに「非常識なふるまいしかできない」は、不当な限定です。二人は仕事に燃える男たちなのに。③は、同一性分断の誤りです。二人は同じグループです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「正しく不思議の国」とは、理想とする仕事をなしとげたことへの感嘆、称賛の気持ちを表現した比喩です。ほんとにおとぎ話に出てくるみたいなシンデレラ城を物理的に作ったわけではありません。④はそれを物理的にとってしまった誤りです。

比喩を文字通りに解釈した誤りといってもよいですし、物理的スリカエと呼んでもよいです。さらに今回の文章はそもそもが「物理⟷心理」ですから、対比混乱の誤りとも呼べます。①も「家屋敷」が「二十数年も前に見たの」と変わらないと物理的な面で驚いています。これも比喩を文字通りに解釈した誤り・物理的スリカエ・対比混乱の誤りです。②は、「納得しにくい」との否定表現が記述に反する誤りです。⑤は、たくさんの誤りを含んでいます。まず「村」との「協力」の有無は今回の争点ではありません。正しい対比喪失の誤りです。また鶴おじファミリーはみんな働き者として描かれていますから、「家族からも孤立」「自分勝手」はことごとく記述に反します。さらにいやなヤツなのに「成功」するなんて「不可解」だ、というのは「不思議」というキーワードの勘違いですね。文脈喪失の誤りです。

問４《傍線部説明・選択肢》

①は、「家族を犠牲」が誤りです。日本の伝統的な作家・私小説作家にはそういう人が多いイメージがありますが、文中では誰も犠牲にしていません。記述に反する誤りです。また「貧乏に甘んじ」では、物理レベルのケチのことになってしまいますね。物理的スリカエ・対比混乱の誤りです。②は「篤実」が誤りです。情にあつく誠実、親切という意味ですが、「薄情⟷篤実」という対比ではありませんからね。正しい対比喪失の誤りです。③は、「財・物惜しみ・家屋敷・金銭」など徹底的に物理です。物理的スリカエであり、対比混乱の誤りです。⑤は、「無駄な表現」「一語一語」とあるように原稿用紙上の言葉づかいのレベルの話になっています。鶴おじは農家として理想を追求し、「私」は文学表現者として理想を追求するという話のはずが、小さくなってます。こういう間違いを不当な矮小化といいます。④が正解です。「精進」は目標に向かって努力することですから、精神レベルの吝嗇の言い換えとしてＯＫです。

模範解答
問１＝③　問２＝⑤　問３＝③　問４＝④

第六講　学問論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝好奇心のポジティブ面重視＝人間の知的活動の根源をなす情熱・知的情熱・偉大な情念・文化や学問の原動力・関心／ディドロ／レヴィ＝ストロース

⇕ **主な対比**

敵役

一般論＝好奇心のネガティブ面＝穿鑿（せんさく）・もの好き／**世間が重視しがちなもの**＝控え目な感情・弱々しい感情・小心翼々／スミス・バウエン

⇕ **小さな対比**（主役と）

脇役

知識・知的能力の差

《解説》

問１《傍線部説明・抜き出し》

樹木の「豊か」さは、「控え目な感情」「弱々しい感情」とは対比的な主役メッセージを表現したものです。さらに字数が五文字以内ということで、候補には「好奇心」「知的情熱」「偉大な情念」が挙がります。意味の上ではいずれもＯＫなのですが、あえてひとつだけ、完全解答と呼べるものを選ぶとき、**周辺表現の類似**が重大なヒントになります。すなわち、傍線部「豊かに葉を繁らせている」の周辺「そのおかげで～でき、～できる」と、「偉大な情念」の周辺「～によって～しうるのだ」の類似に着目します。こうして周りが類似（一致）なら中身も類似（一致）と考えて「偉大な情念」を選びます。

問２《指示語説明・記述》

スミス・バウエンの具体例内にある指示語の内容を書きます。したがって、問４とは異なり、具体例中の表現を拾います。**対比の表現・繰り返されている表現は大事**という原則にもとづきながら、「それ」の指示内容、つまりスミス・バウエンの言動内容を記述します。第一ポイント「植物(界)の豊かさや多様性」(豊かさと多様性はどちらか一方でもＯＫ)、第二ポイント「(植物に) 関心がない」「興味がない」「好奇心がない」など、第三ポイント「現地人に比べ」、第四ポイント「識別できない」「覚えられない」。以上の四つのポイントのうち、二つ取れたら上出来です。

問３《主題理解・抜き出し》

主役キーワード、しかも漢字二字とまで限定された抜き出しです。知的情熱としての好奇心をまとめあげた表現として、第五段落に「関心」とあります。さらに「関心こそ」などの強調表現があること、「知識」「知的能力の差」などの対比もともなっていて、決定的です。最終段落の一行前に、同じ意味のことば「興味」があります。しかし、これはスミス・バウエンの体験談という具体例に出てくる単語です。**具体例は一段落ちる、具体例よりまとまった表現が大事**、この原則から、「興味」は選びません。

問４《内容説明・記述》

問３の解説にも示した通り、スミス・バウエンの体験談は具体例です。したがって、その例自体を書いてはダメです。その例は、そもそもどんな大事なことを語るための例だったのか。それは第五段落です。さて、記述答案づくりの三大原則＝**具体例はカット・対比の表現・繰り返されている表現は大事（ただし一本化）**にもとづいていきましょう。得点になる「ポイント箇所」は次の通りです。第一ポイント「文化や学問の原動力は～」「知を拓くのは～」「文化の根幹は～」、第二ポイント「言語や概念の体系（言語だけでもＯＫ）」、第三ポイント「その（言葉の）精密度」、第四ポイント「知識ではなく」「知的能力の差ではなく」、第五ポイント「関心である」「関心のつよさの差による」。これらポイント箇所の順番は問いません。自分の答案にそれらポイント箇所に該当する単語があれば、加点します。全五ポイント中、三つ以上取れるとよいですね。

模範解答

問１　偉大な情念　　問２　植物界の豊かさや多様性に関心がなく、現地人ほどには識別することも不可能なこと。（三十九字）

問３　関心　　問四　文化の根幹を形づくっているのは言語の体系であり、その精密度は知的能力の差ではなく関心のつよさの差によるということ。（五十七字）

第七講　歴史論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝歴史家の主観重視・文学グループの歴史＝歴史をとらえる史観や世界観・歴史自体に参与・未来への情熱／最近の物理学／エドガー・ヴィント／ディルタイ／ヴァレリー

主な対比

敵役

十九世紀の素朴客観主義・自然科学グループの歴史＝歴史科学・細分化・個人の軽視・純粋な精神・データ重視・決定論

《解説》

問１《接続語空欄補充・選択肢》

Ａは、対比つまり逆接を導きます。空欄前では、歴史は文学グループ、それが空欄後「その後」自然科学グループに移行するわけですからね。したがって④「ところが」と入ります。Ｂは、前後をスムースにつなぐ順接です。空欄前も後も「客観的」「自然科学」「蓄積された厳密な史料」という科学的歴史の話ですから。したがって、②「かくして」が入ります。Ｃは、空欄直後の「〜あったとしたら」という仮定を導くものです。ゆえに①「もしも」が入ります。Ｄは、前提となる語句を導く表現です。つまり歴史事実の選択に先立って史観が働くのだよ、ということです。この「先立って」にあたる表現として③「そもそも」を選びます。Ｅは、譲歩です。敵役＝客観主義側の主張をふっておく、一度言わせるというスタイルです。その後「しかし」で乗り越えているのが根拠です。したがって⑤「もちろん」が入ります。同種の譲歩を導くものには「たしかに」「なるほど」「むろん」などがあります。

問２《脱文挿入》

こうした、ある文を本文中の適切な箇所に戻すという形式の問題では、「言い換え」になる、というのが基本です。今回も「すなわち」とありますから、同じ意味内容の表現箇所（つまり文学グループから科学グループへの鞍替え）をさがします。

問３《傍線部説明・選択肢》

「未来への情熱」は主役キーワードです。つまり、現在の人間（歴史家）が、過去の歴史を描くのは、未来への熱い関心があるからということです。つまり生きた人間の参与がそこにはあるわけです。関心や情熱の矛先を矢印でしめせば、【過去（歴史）← 現在（歴史家）→ 未来】という図式になり、これら過去・現在・未来はつながっているということになります。したがって②が正解。①はまず「癒着」がヘンです。悪代官と悪徳商人かよ！　また今までのこと（過去）は「反省し」、それとは切れて「未来にあっては」と、表現しています。これでは「過去と未来」が対比であるかのようです。これは正しい対比喪失の誤りです。③は「細部をあまねく（広くなにもかも）蒐集」が対比混乱の誤りです。敵役キーワードを答えてしまいました。④

は「アトム（なにもない空間にぽつんと個人が原子のように浮かぶイメージ）」を「排し」としていますが、排するもなにもそんな語句については対比にありません。正しい対比喪失の誤りです。さらに、「過去のすべてを廃棄」とは、あきれかえってでんぐりがえりますよ。まるっきり記述に反します。

問４《主題理解・選択肢》

⑤だけが主役キーワードです。その他はことごとく敵役側つまり、十九世紀の自然科学グループの言葉です。とくに①の「純粋な精神」には気をつけてください。「純粋」なんて語を見ると筆者側の、望ましい方ではないかと思ってしまうかもしれませんが、文脈上は、人間の主観、価値づけを排した客観データを「純粋」と呼んでいるわけです。言い換えれば、カタヨリもないかわりに、味もそっけもない、数値的記号的なものを指しているのですよ。

模範解答

問１　Ａ＝④　Ｂ＝②　Ｃ＝①　Ｄ＝③　Ｅ＝⑤　問２　移るのであります　問３＝②　問４＝⑤

第八講　現代社会論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝現代日本の特徴

＝「さまよえる」＝目標を失っても精神だけ静止せず、よろめいている状態・不安と不満のなかでさまよう／人類の長い歴史においても実は「さまよってきた」・目標はなくても日々の生活を積み重ねる

主な対比

敵役

明治から戦後の特徴

＝「スローガン」

＝国民的目標設定・「負の充足」

小さな対比

脇役

スローガンなしでも堂々とさまよう・自若

《解説》

問１《傍線部正誤問題》

今回の主役つまり現代日本のキーワードの言い換えを問うています。《本文の対比構造》の通り、①は小さな対比相手に該当するもので、対比混乱の誤りです。④は、最大の敵役である「スローガン時代」の説明です。「しらじらしー！」と叫んでしまいそうです。当然対比混乱の誤りです。②と③が合致します。

問２《傍線部説明・選択肢》

スローガンがあった明治から戦後しばらくの期間こそ、実は、特異な奇妙な時代であったわけです。大昔から人類は、大目標をかかげたり、ねじり鉢巻きしたり、シュプレヒコールなどあげたりせず、粛々（しゅくしゅく）と日々の営みを続けてきたのです。天候に左右されたり、収穫があがるだろうかと不安をかかえながら、それを「当然」とし、さまよいながら、例えば稲作を続け、牧畜を続けてきたのでしょう。それらを「稲作文化」、「牧畜文化」と呼ぶけれども、けっして「オレたちは、今日から稲作文化でいくぜ！　イエイ」「稲作を断固死守するぜ！　オー！」とやったわけではないのです。こういうわけで④が正解です。①の「自若」では小さな対比混乱の誤りです。②は「スローガンが設定」ですから大きな対比混乱の誤りです。③は「独自の文化」はよいですが、後半の「失わないようにする」がスローガンになってしまいます。これも対比混乱の誤りです。

問３《傍線部説明・選択肢》

スローガン時代のキーワード解説です。①の「心理状態を利用」、②の「強要することなく」、④の「心理的参加を期待」が、それぞれ「心理的な参加を強要」という記述に反する誤りです。③が正解です。なお、④の「多様な現象から共通の『足りない』部分を発見」では、スローガンはたった一つになってしまいます。この点も記述に反する誤り。

問４《全文理解に基づく正誤問題》

②と③は「現在（現代）」「さまよえる」と「明治以来」「スローガン」との対比関係をごちゃまぜにした、典型的な対比混

乱の誤り。⑤は「実質的参加」と「心理的参加」をあたかも対比であるかのように表現していますが、そのような比較はまったくありません。正しい対比喪失の誤り、その典型です。①と④が本文の記述に合致しています。

模範解答

問１　①＝×　②＝○　③＝○　④＝×　問２＝④　問３＝③　問４　①＝○　②＝×　③＝×　④＝○　⑤＝×

第九講　民俗学

《本文の対比構造》

主役

柳田国男の民俗学・かつての社会

＝声を出して泣くこと（慟哭）も食事を分かちあうことも共同体内のコミュニケーションだった

＝孤立した個人の集合にすぎぬ社会から脱出する手がかり

主な対比

敵役

現代＝泣くことが少なくなった時代・孤立の生活の不安・寂寥・孤立した個人の集合にすぎぬ社会

小さな対比

脇役

すすり泣く・声を出さずに泣く

《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

現代人、とくに「今日の有識人」が陥っている状況を答える問です。すなわち、「泣くということが一種の表現手段であった」かつてとの対比です。したがって①の「表現を言葉に頼り過ぎる」と類推可能です。②は「苦手」としていますが、本文は泣くことをめぐり「上手⟷苦手・下手」ということを比べていません。そもそも現代は泣くことを抑圧しているのですから。したがって正しい対比喪失の誤りです。③は「人前」が×です。「公衆の面前⟷私的空間」というような対比はありませんね。これも正しい対比喪失の誤りです。④は「他人」が×です。他人であれ自分であれ、泣くことへの抑圧があるのが現代なのです。「他人⟷自分」という変な対比をもちこんでいます。したがってこれも正しい対比喪失の誤りです。

問２《空欄補充・選択肢》

慟哭、かなしみの声をあげるという伝統的習慣との小さな対比を問うています。声をあげないすすり泣きとは区別しなければなりませんね。したがって、③が正答です。①は「忍び泣き」の研究を主役であるかのようにしています。これは対比混乱の誤り。考察対象は慟哭の方です。②も④ももちろん対比混乱の誤りですね。こういう「○○の誤り」という用語を使って考えると、間違いの選択肢がどのようにして作られているのかわかりますよね。

問３《傍線部説明・選択肢》

モノモライが近隣住人との「不可分の連鎖」を作る「社交」であることの言い換えです。「孤立の生活」の不安との対比でもあります。したがって①が正解。「連鎖」を「絆」と言い換えています。②は「陽気」が×。社交だから「イエイ、レッツ・パーティ！」と勘違いした文脈喪失です。③は「素朴な」が×です。本文は「素朴・質素⟷豪華絢爛（けんらん）・華美」という対比ではないからです。正しい対比喪失の誤りですね。④は「疾病が治って」が誤りです。〝隣の晩御飯〟にそのような薬理効果があるわけではありません。本文にあるとおり、できもの自体は軽微なものなのです。清潔にしていれば治ります。記述に反する誤りといっても、物理的スリカエといってもよいでしょう。

問４《空欄補充・選択肢》

泣くことも食べ物を他人からもらうことも、「一種の交通方法」「一種の表現手段」「人間の社交」ですから④が正解です。またそうしたことを研究することが「民俗学・フォクロア」という学問の仕事です。ゆえに①は記述に反する誤りです。さらに民俗学は民衆文化の事実を語っているわけですから「美徳」を語るための「昔話」ではありません。②も記述に反する誤りです。③はあたかも泣くことや食べ物をもらうことが、自己アピールのパフォーマンスであるかのようです。他者との共同体感情をつくることがたいせつなわけですから、これは記述に反する誤りです。

問５《主題理解・選択肢》

現代日本人が忘れたものでも、モノモライのような表現に残っていて、その意味を伝統的な生活の中から発見し語れる学問が民俗学です。したがって①が正解です。②は「失ってはならない美徳」が不当な当為判断であり、また記述に反する誤りです。事実としてあったのですから。③は「歴史に記録」が×です。歴史学ではなく民俗学の仕事ですよ。さらに現代の袋小路を脱出する手がかりとまで本文にはあるのですから、記録しておしまいではありません。記述に反する誤りです。すると④「現代～評価する必要はない」は、あきれかえってでんぐりがえります。記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝①　問２＝③　問３＝①　問４＝④　問５＝①

第十講　小説その3　日常と非日常

《本文の対比構造》

主役

農婦「お品」の非日常＝身体の異常・いつもなら構っている鶏にも構っていられない／娘の返事・かまどの赤い火

主な対比

比較相手

農婦「お品」の日常＝体は生まれつき丈夫＋百姓仕事＋豆腐や蒟蒻（こんにゃく）の行商＋鶏の世話

小さな対比

脇役

雨戸を開けない室内の暗さ

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

この日の特別ぶり、非日常さをもたらしたものが何であるのか原因・理由を問うています。第五段落にあるとおり「身体に変態を来した」ことです。したがって⑤が正解。①の「冬至が近づく」「俄商人が現れる」は毎年のこと、つまり日常です。もし「いやー、今年はついに冬至が来なかったねぇ」なんてことがあったら、ビックリだよ。これは対比混乱の誤りです。②「子供だけを残して行商」もいつものことです。この日の不安は体調ですから記述に反するといってもよいですし、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。③と④の「はげしい西風」も「豆腐の水〜冷たさ」も冬の日常でしょう。百歩譲って、この日に限って西風がこたえる、水が冷たいとしてもそれは体調異変の結果であって、原因・理由ではありません。したがってこれらも対比混乱の誤りです。哲学者のニーチェも言ってますよ、〝人は肝心なところで原因と結果をとりちがえる〟ってね。

問２《傍線部説明・選択肢》

打って変わって日常を問うています。つくづく入試問題というものが、つまり「読解力」を問うということが、対比関係をとらえているかどうかに集約されることがわかります。さて、本文のお品は、この日の身体異常でいつもならできていることができないわけですから、いつもは鶏の世話をしていたはずです。②③は記述に反しており、④が正解です。①は鶏とわが子とを同じレベルにしていますが、これが誤り。この日の緊急事態で、お品がその名を呼んだのは娘の名前だったことが肝心です。鶏の名前を呼んだりしたら（コッコちゃーんとか言って）、たまげます。こんな微妙に見える選択肢においても「対比」という目で見ることができれば、クリアにカットできるのです。つまり対比混乱の誤り。⑤は鶏を放し飼いにしている事実に反します。つまり記述に反する誤りです。また「たえず」は不当な全称判断とも言えます。

問３《傍線部説明・選択肢》

お品の心理描写ですよ。体調不良でなんとか帰宅して、娘がいてくれた安堵感から、威勢よく「聞こえた」わけです。物理的に「〇〇ホーン」「〇〇デシベル」で測れる声の大きさではありません。また暗い室内と明るいかまどの火が見事な対比・

対照・コントラストになっています。したがって③が正解。①は「若さ・元気さ←→疲れ」という勝手な対比を持ち込んでいますね。正しい対比喪失の誤りの典型です。②と④は物理的スリカエです。娘がうれしさのあまりいつもより大声で叫んだかのようになっています。⑤は同一性分断の誤りです。「威勢のいい返事」と「かまどの赤い火」は同じグループです。

問４《主題理解と表現の特徴・選択肢》

①の「写実的」、④の「とくに技巧を用いることなく」が、しらじらしーと叫んでしまいそうな間違いです。本文では「西風が～林を苛め」「木の枝は～泣いた」「林の梢が～笑いさざめく」というように擬人法（人間ではないものを人間であるかのようにたとえる）という表現技法を多用しています。ほんとに笑ったら怖い！　オカルトか！　こういうわけで記述に反するといってもよいですし、比喩を文字通りに解釈した誤りといってもよいでしょう。③は「母が子を思い」が×です。これでは子供のことを心配する母親の話になってしまいます。本文では、体調異変の自分への救いを求めるように、わが子の名を呼んだのです。記述に反する誤りです。⑤は「夜明けもはるかに遠い絶望」が×です。雨戸を開けない室内の暗さを勘違いしたような選択肢です。かまどの火も娘の声も希望を表しますよ。したがって記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝④　問３＝③　問４＝②

第十一講　科学技術論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝技術の多様性・多次元性・他者性＝デザイナーの意図を超える／文化ごとに解釈が多様である

主な対比

敵役

技術に関する合理主義＝デザイナーの意図通り一定一義的な使用方法

《解説》

問１《傍線部説明・記述》

「解釈の柔軟性」とは、文化が違えば道具の使い方も変わるということで、筆者側のメッセージです。さらに**具体例はカット・対比の表現・繰り返されている表現は大事**という記述答案づくりの原則にしたがいます。では、得点箇所を挙げます。第一ポイントは主語にあたる「人工物」です。あるいは「道具」「技術」でもＯＫです。第二ポイントは「本来の意図（目的）と違う」「一定ではない」「一義的な仕方ではない」「デザイナーの意図に反する」など、いずれでもＯＫです。第三ポイントは「多次元性をもつ」または「新たな目的が付加」です。以上三つの内、二つ指摘できるとよいですね。

問２《傍線部説明・記述》

敵役の見解を説明する問題です。つまり、「一定の使用法を強制」グループ側からの反撃部分です。すなわち、むかしの素朴な技術については、自由に使っても構わないだろうが、近代以降の複雑な道具・人工物についてはマニュアル通りに使わないといけないぞ、という意見です。第一ポイントは「産業革命以降（以後）」あるいは「近代以降」、第二ポイントは、「技術のネットワークが巨大化」または「技術を支えるネットワークが大きい」、第三ポイントは「一義性」「デザイナーの意図」「一定の仕方」など、第四ポイントは、「強制される」または「制御される」です。なお「なぜか」という設問条件ですので、文末表記は「から」「ので」「ため」などとします。しないと1点減点です。

問３《傍線部および全文理解・記述》

筆者の見解によれば、産業革命以後の近代的技術についても、「解釈の柔軟性」は見られます。それこそが「技術の創造性」ということになります。最終段落に「他者性」とありますが、道具が決まりきった使用法にとどまらず、それ自体が生きているかのように、「私」から離れて独立性をもってしまうことを表現しています。さて、「全体の論旨を踏まえて」との条件ですから、全文要約のようになります。あらためて記述の三原則にしたがって解答しましょう。第一ポイントは、「一義的使用」「一定の仕方」、第二ポイントは、「単なる道具」、第三ポイントは、それらに「還元できない」「単純化されない」、第四ポイントは、

「他者性をもつ」、第五ポイントは、「デザイナー（製作者）の意図を超える」、第六ポイントは、「既存の目的―手段―連関を新たな目的―手段―連関に変換する」、第七ポイントは、「評価がポジティブであれネガティブであれ」「肯定であれ否定であれ」、第八ポイントは、「新たな意味を獲得する」です。順番は問いませんが、五つ以上ポイントを獲得できると合格です。

模範解答

問１　人工物が本来の意図とは違う用い方をされる多次元性をもつこと。（三〇字）

問２　産業革命以降は、技術のネットワークが巨大化し、一義性が強制されるから。（三十五字）

問３　技術が、一義的使用による単なる道具に還元できない他者性をもち、デザイナーの意図や既存の目的―手段―連関を新たな目的―手段―連関に変換し、評価が肯定的であれ否定的であれ、新たな意味を獲得するという特性。（一〇〇字）

第十二講　芸術論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝
芸術＝変化は必然的・先行するものを変形する・不可逆的な変化／専門家の条件とは、先行するものの理解と変形の理解の力

主な対比

比較相手

科学＝変形の必然性はない
服装＝流行・循環的変化・個人の好み
芸術の一般論＝万人の胸を打つ・感性に訴える

小さな対比

脇役

制作の背景や動機についての知識

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

筆者側の見解を問う問題です。芸術は先行するものをふまえて変化するのは必然的で、完成というものはないということです。しかもその点で科学とは対比的です。したがって、③が正解。①は「客観的に〜測ることができる」という科学の説明自体が、すでに記述に反しています。またそうした測る「尺度」のあるなしを比べていますが、正しい対比喪失の誤りです。②は芸術の特性として「流行」を挙げていますが、もちろんこれは「服装」の特徴ですから、対比混乱の誤りの典型です。④も同様に芸術の特徴として「循環的な変化」としていますが、これも「服装」だよね。対比混乱の誤りです。⑤は「芸術作品⟷芸術」という対比になってしまってます。まるで「芸術作品という具体的なもの⟷芸術そのものという抽象的なもの」との対比みたいです。これぞ正しい対比喪失の誤りですね。

問２《傍線部説明・選択肢》

これも筆者の見解を問うもので、①が正解。芸術理解が、学習なしに（先行するものへの理解なしに）万人の胸を打つとか感性に訴えるというのは誤解なわけです。筆者のメインメッセージは一貫しており、シンプルです。②は「純粋な感性⟷暗い感性」を比べてしまった正しい対比喪失の誤りです。そもそも「感性」と答えてしまっている点では対比混乱の誤りとも言えます。③は前半の「普遍」がすでに誤りです。これは「万人の胸を打つ」のグループで対比混乱の誤りです。さらに後半の「人間は〜変化」は、記述に反する誤りです。変化するのは「芸術」ですよ。④は「だれが、いつ、どのように」が×。これは制作の背景や動機にあたる小さな対比混乱の誤りです。⑤は、「個人〜好み」が服装のキーワードに当たります。対比混乱の誤りの典型です。

問３《傍線部説明・選択肢》

間違い探しの問題です。こうした問題では、「記述なし」では決め手になりません。はっきり名指しで「○○の誤り」を優先します。例えば①の「バランス」、③の「選手の立場」「外側の条件」、④の「素材」、⑤の「登場人物」などの記述は本文に

はありません。しかし②の「制作の動機などについて十分な知識を備え」は、記述に対しはっきり矛盾します。対比混乱の誤りです。これが正解です。

模範解答

問１＝③　問２＝①　問３＝②

復習問題解答

復習問題解答　第一講

（ア）③　（イ）②　（ウ）③　（エ）①　（オ）⑤
（カ）③　（キ）⑤　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）礼讃（礼賛）　（イ）岐路　（ウ）加減　（エ）若干　（オ）報酬

復習問題解答　第二講

（ア）②　（イ）①　（ウ）④　（エ）③　（オ）②
（カ）⑤　（キ）③　（ク）①　（ケ）③　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）可変　（イ）好例　（ウ）想定　（エ）妥当　（オ）判然
（カ）把握　（キ）浸透　（ク）融合　（ケ）習性　（コ）究極（窮極）

復習問題解答　第三講

（ア）②　（イ）④　（ウ）④　（エ）⑤　（オ）②
（カ）③　（キ）①　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）遅延　（イ）変容　（ウ）体得　（エ）経過　（オ）蓄積
（カ）忘却　（キ）痕跡　（ク）錯誤　（ケ）徹底　（コ）幻惑

復習問題解答　第四講

（ア）②　（イ）①　（ウ）④　（エ）⑤　（オ）②
（カ）①　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）免疫　（イ）取捨　（ウ）浅薄　（エ）兆候（徴候）　（オ）模倣
（カ）派生　（キ）普遍　（ク）翻訳　（ケ）乖離　（コ）理屈

復習問題解答　第五講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）④
（カ）①　（キ）②　（ク）④

解答漢字一覧

（ア）共鳴　（イ）在所　（ウ）感心　（エ）依然　（オ）養蚕

復習問題解答　第六講

（ア）②　（イ）④　（ウ）①　（エ）③　（オ）⑤
（カ）②　（キ）①　（ク）④　（ケ）⑤　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）思索　（イ）源泉　（ウ）到達　（エ）体系　（オ）指摘
（カ）根幹　（キ）精密　（ク）提供　（ケ）栽培　（コ）到底

復習問題解答　第七講

（ア）③　（イ）④　（ウ）②　（エ）④　（オ）⑤

（カ）②　（キ）④　（ク）②　（ケ）②　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）制約　（イ）厳密　（ウ）構成　（エ）蓄積　（オ）埋没

（カ）世界観　（キ）偏愛　（ク）計量　（ケ）無私　（コ）参与

復習問題解答　第八講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）⑤　（オ）④
（カ）③　（キ）③　（ク）①　（ケ）②　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）革命　（イ）在来　（ウ）動員　（エ）要約　（オ）犠牲
（カ）所得　（キ）付加　（ク）放浪　（ケ）強要　（コ）挫折

復習問題解答　第九講

（ア）③　（イ）②　（ウ）①　（エ）②　（オ）⑤
（カ）②　（キ）①　（ク）④　（ケ）①　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）警告　（イ）彼岸　（ウ）帰着　（エ）弊害　（オ）豪傑
（カ）有識　（キ）平生　（ク）疾病　（ケ）深遠　（カ）検束

復習問題解答　第十講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）②　（オ）④

（カ）③　（キ）②　（ク）③

解答漢字一覧

（ア）悲痛　（イ）丈夫　（ウ）懇意　（エ）威勢　（オ）勾配

復習問題解答　第十一講

（ア）④　（イ）③　（ウ）③　（エ）①　（オ）④
（カ）④　（キ）⑤　（ク）②　（ケ）②　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）推奨　（イ）制御　（ウ）一義　（エ）付加　（オ）典型
（カ）柔軟　（キ）娯楽　（ク）既存　（ケ）普及　（コ）還元

復習問題解答　第十二講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）②　（エ）①　（オ）⑤
（カ）②　（キ）③　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）帰結　（イ）循環　（ウ）変遷　（エ）即興　（オ）飛躍
（カ）情勢（状勢）　（キ）奇抜　（ク）動機　（ケ）驚異　（コ）成果

はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「〇〇と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テスト現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。**ただし選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

１　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

２　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

３　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ１点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

４　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、１点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a　| |人|間|は|…| →　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b　|…|…|…|こ|と| →　※**句点なし！**（１点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c　|…|…|…|こ|と。| →　※**句読点は一文字分！**（１点減点）

より本質的な解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

- ○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
- ○対比の表現（AではなくBである）！
- ○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）

○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。

○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身

語句 ← 心身の一体性

一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で**「A⟷B」**という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、**「C⟷D」**といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は**「善⟷悪」**という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、**「すべての○○は」「あらゆる○○は」**と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、**「○○のみ」「○○だけ」**と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、**「○○であるべきだ」「○○にしなければならない」「○○する必要がある」**と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランＣをオススメします。

プランＡ……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランＢ……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランＣ……第三講までプランＢで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランＡ
プランＤ……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、ＡとＢを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランＡ、奇数の講義ではプランＢというように

予習の時間＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講はその１が八分、その２が十二分、なお国公立大学など記述問題を含む講では二十五分が基本となります）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンＣがオススメです。

パターンＡ……右の基本時間通り
パターンＢ……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンＣ……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率
（例えば第三講なら全部で十三題）

○　私大………………（第一講その1・三講・四講・七講・八講・九講・十三講・十四講・十七講・十八講・十九講・二〇講・二十三講・二十四講）→**六十五％以上**
○　国公立大…………（第六講・十一講・十六講・二十一講）→**五十五％以上**
○　共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その2・二講・五講・十講・十二講・十五講・二十二講）→**八〇％以上**
○　復習問題………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。 勉強したような気になるだけで、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）

『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの

『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Ｚ会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。

『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Ｚ会編集部（Ｚ会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。

『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。

『入試精選問題集７　現代文』（河合出版）……難関私大および国公立大二次向け

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

教材選定について

- 有名難関大学の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（日本文化論・科学論・歴史論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目　次

第十三講　弁証法……p. 10
第十四講　文学論・演劇論……p. 15
第十五講　小説その４　現代と回想……p. 21
第十六講　コミュニケーション論……p. 28
第十七講　身体論・芸術論……p. 33
第十八講　文学論　カルチュラル・スタディーズ……p. 38
第十九講　学問論その２……p. 44
第二十講　日本文化論・音楽論……p. 50
第二十一講　歴史論その２……p. 56
第二十二講　小説その５　大能力と小能力……p. 60
第二十三講　日本語論・翻訳語論……p. 69
第二十四講　情報化社会論その２……p. 75

第十三講　弁証法

論理を尊ぶ風は西洋伝来である。十九世紀のヨーロッパは科学的で、たたいてもこわれないロジックという新しいおもちゃに夢中になっていたらしい。今世紀になって、不調和の美しさなどということが言われ出したのは、その反動であろうか。純一に対して複雑が新しい価値として登場した。社会的歴史的現象の説明として、複数の傾向の交叉（こうさ）・交流という流動の概念が生まれる。音楽の不協和音への関心も高まり、不調和の調和の考えが一般にも訴えるところをもつようになった。

文学上でいうと、一語一義的考えに対して、各語が同時に多義的であることが強調されるに至った結果、表現の晦渋（かいじゅう）、曖昧など、従来は消極的に考えられて来たものが、積極的に肯定される美学が生まれたのである。総じて、非合理への再認識であった。

しかし、こういう超論理への開眼は一日にして行なわれたものではなかったにちがいない。不調和の調和は、すでに、正と反とが止揚されて合になるという弁証法において、成立している。正と反とは矛盾対立の関係にある。両者を同一平面に止めておけば、プラス・マイナス・ゼロの無為の中和を起こす。これを別の次元で統合するのが止揚にほかならない。［A］を弁証法的に説明すれば、止揚された［B］ということになる。

形式論理の上ではともかく、日常生活においては、不調和の調和の価値は直観的にとらえられている。ことばのおもしろさが、大なり小なり、この統合された矛盾を含んでいるのは注目すべきである。

ことばの矛盾の積極的意義を認めているもののうちで原型をなしていると考えられるのが、修辞学で撞着（どうちゃく）語法と呼ばれているものである。

［C］とか［D］とかいうようなのが撞着語法であるが、矛盾概念が表面にはっきり出ていることによって、独自のおもしろさが感じられる。正攻法の論理の手のとどく警句的真理がこうした形式で表現できるのは興味深い。

ごく古くから撞着語法のような言い方があったことを考えると、人間は、元来、決して矛盾を怖（おそ）れたり、嫌ったりするものでないことがわかる。

不調和の調和は、自然にそうなるのではなくて、違和のものに力を加えて無理に融合させるのである。一見その融和は中和に似ているが、実際はそれとはまるでちがった大きなエネルギーが秘められている。

悪い矛盾が［E］相殺（そうさい）の論理であるとするなら、価値のある矛盾は止揚された［F］統合である。［G］矛盾のように反発し合うものをただ中和させてしまうのではなく、［H］矛盾は、対立するものを掛け合わせて、思いもかけない大きな［I］可能性をつくり上げる。矛盾の中には、こういう［J］ともいうべきものがあることを、とくにわれわれは、忘れないようにしておかなくてはならない。

よく日本人は論理に弱いと言う。日本人の思考は矛盾だらけだとも言う。そして、そういうことをいちばん信用しているのは日本人自身である。もちろん、われわれの回りには悪い矛盾もずいぶんあるし、それを警戒するのに怠惰であってはならないが、日本文化に固有な論理には一顧（いっこ）も与えないでおいて、外国のロジックに合わないからと言って、非論理的だといって恐縮しているのは、あまり感心したことではない。

思考方法をポジティヴなものとネガティヴなものと分けると、日本人の思考はネガティヴな形式をとることが多い。はじめから正を正として描くのではなく、負と負の相乗によってポジティヴな世界をあらわす方法を好む。その結果が、一見して矛盾のように思われる形を借りてくることがすくなくない。しかし、それを消極や矛盾と見るのは皮相（ひそう）であって、実は、しばしばたくましい創造なのである。

（外山滋比古『省略の文学』）

問１　空欄Ａ・Ｂに入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から選べ。

①　Ａ　中和　Ｂ　調和
②　Ａ　中和　Ｂ　矛盾
③　Ａ　調和　Ｂ　中和
④　Ａ　調和　Ｂ　矛盾
⑤　Ａ　矛盾　Ｂ　中和
⑥　Ａ　矛盾　Ｂ　調和

問２　空欄Ｃ・Ｄに入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から二つ選べ。

①　あつものに懲(こ)りてなますを吹く　②　有難迷惑　③　石橋をたたいて渡る

④　公然の秘密　⑤　大は小をかねる　⑥　恥の上ぬり

問３　空欄Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊに入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選べ。（なお、Ｅ・Ｇ、Ｆ・Ｈにはそれぞれ同一のものが入る）

①　相乗的　②　創造的　③　平面的　④　立体的

問４　本文の第五段落（「形式論理の……」）から第八段落（「ごく古くから……」）までの中、故意に誤記された箇所がある。例にならって書き直せ。

例　論理を卑(いや)しむ　→　論理を尊ぶ

問５　本文中の次の語句の中、本文全体の趣意からして、肯定的(ポジティヴ)な意味合いで用いられているものと否定的(ネガティヴ)な意味合いで用いられているものとがある。後者を二つ挙げよ。

①　新しいおもちゃ　②　音楽の不協和音　③　非合理

④　超論理　⑤　形式論理　⑥　撞着語法

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●外山滋比古＝とやま　しげひこ（一九二三〜）→英文学者・言語学者。
　著書である『思考の整理学』は東大京大生協で一位の売り上げ

語句

皮相＝ひそう→うすっぺらな表層
撞着＝どうちゃく→矛盾　二律背反　自己撞着　自家撞着
直観＝ちょっかん→いっきに本質や全体を把握する・イントゥイション
　cf直感→ひらめき・勘・第六感・インスピレーション
警句＝けいく→短くて核心をつくことば・アフォリズム・箴言（しんげん）・格言
修辞学＝しゅうじがく→レトリック／論理（ロジック）が形式的な一貫性や矛盾のないことを重視するのに対し、レトリックでは効果や印象付けを重視し、さまざまな表現技法を考える
弁証法＝べんしょうほう→対話を通してより高度な意見を生み出す思考法・ディアレクティーク
演繹法＝えんえきほう→大きな原理原則から発想して、個別事例の説明を行う思考法・数学的方法・ディダクション
帰納法＝きのうほう→多くの個別事例から発想して、原則を導き出す思考法・実証科学、実験科学の方法・インダクション

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）これは社会的歴史的なゲンショウだ　①象　②像　③症　④証　⑤床

（イ）対立やムジュンを弁証法的に乗り越える　①純　②準　③盾　④巡　⑤殉

（ウ）異なる意見の対立を弁証法的にシヨウする　①使　②仕　③試　④私　⑤止

（エ）自己卑下は、カンシンできないね　①寒　②歓　③感　④関　⑤観

（オ）互いの意見を否定し合ってソウサイする　①債　②殺　③再　④蔡　⑤災

（カ）少しの配慮もなくイッコも与えない　①個　②子　③雇　④考　⑤顧

（キ）異質なもの同士のソウジョウ効果　①剰　②情　③場　④乗　⑤醸

（ク）しっくり合わずイワ感が残る　①違　②異　③緯　④畏　⑤意

（ケ）物事への取り組みがショウキョク的だ　①小　②症　③消　④少　⑤将

（コ）表面しか見ないヒソウ的見解　①層　②愴　③装　④相　⑤壮

第十四講　文学論・演劇論

シェイクスピアの『マクベス』第五幕に、夫をそそのかして主君を暗殺したマクベス夫人が、死の直前に錯乱する有名な場面がある。夢遊病者のように夜中に徘徊（はいかい）し、手をこすりながら呟（つぶや）く。「消えてしまえ、呪（のろ）わしいしみ！　早く消えろというのに！　一つ、二つ、おや、もう時間だ。地獄って、なんて陰気なのだろう！（中略）まだ血の臭いがする」。幻視、幻聴、幻臭が一挙に夫人を襲うのである。

『リア王』を例にあげるまでもなく、シェイクスピアは強い意志のエネルギーをもった人間が、その強さゆえに復讐（ふくしゅう）され錯乱する様態、首飾りの糸が切れ、それぞれの玉が飛び散ってしまうように、一人の人間を調和あるものとさせている五感の分裂状態を描く天才である。描くとは、文字に書かれているから言いうることなので、演劇の舞台にそくしていえば、錯乱とはどのように見えないものかを想像させる、というべきだろう。演劇とは見えないものを見えるようにすると思っている人たちもいるが、それは逆で、見えるものを通して見えないものを想像させたり、直感させたりするところにその表現の本質がある。［ a ］この場面を演出するときに、血のしみや時計の音や地獄を思わせるような具体物を持ち出すことは意味をなさない。言葉の音楽的な側面と身体的な集中の質によって、一人の人間の見えない意識状態を想像させる演技をする以外にはないのである。

昨年から今年にかけて、私はカフカの小説『変身』をロシア人と日本人が演じる舞台を見た。いずれも演出はロシアのメイエルホリド・シアター・センターの芸術総監督ヴァレリー・フォーキンである。カフカの『変身』は次のような書き出しで始まる。「ある朝、グレゴール・ザムザが気がかりな夢から目ざめたとき、自分がベッドの上で、一匹の巨大な毒虫に変ってしまっているのに気づいた」。

この言葉どおり、舞台でも一人の男が虫に変身する。［ b ］、ベッドの上で手足を震わせ、虫を思わせるしぐさをしだすのである。そして最後まで俳優は、二本足で立つことはなく、床を這（は）いずりながら虫として死を迎える。演技とは物真似（ものまね）であるという言葉があるが、字句どおりに虫の真似が身体的に行われているのである。その振り付けは、力量のある俳優のみが身につけうる種類の見事なもので、小説の内容とは関係なく楽しめるのである。とくに野外劇場で上演された日本のそれは、木々の中をも

虫が徘徊したりする演出の巧みさもあって、哀（かな）しい虫の一生が展開される童話のような出来具合になっていた。

この舞台の演出と演技を楽しみながら、私はその半面、演劇という表現ジャンルがそなえている利点と、それゆえの落とし穴のようなものに思いをはせざるをえなかった。それは、演劇が演出しだいであらゆるものごとを視覚的に楽しませることができるために、＜　Ａ　＞という行為の大切さを一瞬忘れさせてしまうことである。

［　ｃ　］、カフカの『変身』の毒虫は現実の虫のことではない。人間のことである。人間の自意識の一つの在り方を文字に置き換え表現したものである。人間を虫として描写し、人間存在の孤独とその恐怖をあばきえたのは、文学者としてのカフカの創造行為の力であるが、その文学的な表現である虫を視覚的に変換し存在させれば、『変身』の本質を見させることができるわけではない。カフカ自身もこの小説が出版されるにあたり、出版社に次のような挿絵についての注文をしている。「虫そのものが描かれてはなりません。遠くからでさえも描かれてはなりません」。

ものごとを理解することは、ものごとを視覚的に了解することだと演劇にかかわる人たちが思いだしたのは、いつのことであろうか。むろん、ものごとをはっきりと見ることが、対象を我がものとして理解することだとは昔から日本人も考えてきた。心を見る、湯加減を見る、ひとを見る、などと言ってきたのである。しかし、この＜見る＞とは、ものごとを視覚的に了解する行為だけを意味するわけではない。むしろ、それだけでは対象を理解することが不可能だから、＜見る＞と言ったのである。

現在の社会は視覚を軸にした情報社会である。そしてその特徴は、ものごとの背後にある見えないものを見させるのではなく、見えるものだけを優先して価値判断する社会だということである。特にマスコミにおいて社会という言葉が一般的に用いられるようになり、我が国における社会の未成熟あるいは特異なあり方が覆い隠されるという事態になったのである。イラク戦争などをテレビで見ても、私はいまこそ見えるものだけからものごとを考えるのではなく、見えるもののうちに浸透したり、その背後に存在している見えないものを、＜見る＞という行為によって感知する力を取り戻さなければならないと感じる。そこにこそ、芸術家や芸術創造の存在理由があると改めて思うのである。

問１　前の文中には、論旨の展開からいって余分な文が一つ入れてある。それはどれか。その文の初めと終わりの三文字を答えよ（句読点なども一字と数える）。

問２　文中の空欄［A］に入るもっとも適当な語句を、次の中から選べ。

①　見えるものを見る　②　見たくないものを見る
③　見たいものを見る　④　見えないものを見る

問３　文中の空欄［a］～［c］に入るもっとも適当な語句を、次の中から選べ（ただし、同じものを二度以上用いてはならない）。

①　というより　②　だから　③　やはり　④　たとえば　⑤　たかだか

問４　傍線部「心を見る、湯加減を見る、ひとを見る」とあるが、それらの「見る」と違った用法を持つものが次の中に一つだけあるとすれば、それはどれか。もっとも適当なものを選べ。

①　味を見る　②　世相を見る　③　図面を見る　④　時代を見る

問５　本文の論旨に合わないものが次の中に二つあるとすれば、それはどれとどれか。もっとも適当なものを選べ。

①　人間の五感の分裂状態は文章で書くことが不可能であるから、かえって演劇という舞台を通してそれを示して行こうという動きが出て来た。
②　見るものを通して何かを想像させるということが大切であるという考え方に沿って、演劇における演出はなされるべきである。
③　カフカは人間が虫になるという話を小説に書いたが、それは人間の意識の奥底を描こうとしたのであり、単なる形態の変容の面白さをめざしたのではない。

④　ものをはっきりと見つめることが難しくなった時代では、現実を見据える目よりも、想像の世界を見つめる目を養う方が大切である。

⑤　見えるものがさまざまに交錯する現代こそ、見えないものを想像するという芸術の本質が改めて見直されなければならない。

第十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●鈴木忠志＝すずき　ただし（一九三九〜）→現代を代表する演出家。
「見えるものと見ること―感知する力」

●ウィリアム・シェイクスピア（一五六四〜一六一六）→英国を代表する劇作家。
代表作『ハムレット』『ジュリアス・シーザー』『アントニーとクレオパトラ』『テンペスト』『ロミオとジュリエット』など

●フランツ・カフカ（一八八三〜一九二四）→チェコのドイツ語作家。
代表作『変身』『城』『審判』『オドラデク』
日本の作家、安部公房（あべ　こうぼう　一九二四〜一九九三）も自分への影響を告白している。

復習問題　第十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）恐ろしいゲンチョウが聞こえる　①眩　②原　③幻　④玄　⑤呟

（イ）ムユウ病者のように徘徊する　①誘　②夕　③有　④遊　⑤悠

（ウ）五感のブンレツ状態を描く　①列　②烈　③裂　④劣　⑤埒

（エ）舞台を巧みにエンシュツする　①演　②園　③宴　④艶　⑤縁

（オ）新作映画のカントクに起用する　①篤　②得　③読　④督　⑤匿

（カ）外国小説がシュッパンされる　①伴　②汎　③班　④版　⑤帆

（キ）湯カゲンをみて調節する　①加　②舌　③下　④火　⑤科

（ク）見えるものをまずユウセンする　①裕　②憂　③宥　④優　⑤雄

（ケ）日本社会のトクイなあり方を分析する　①以　②意　③異　④違　⑤威

（コ）人生のコドクを耐えしのぶ　①個　②小　③狐　④児　⑤孤

第十五講　小説その４　現代と回想

［1］　私は掘割を見下ろしていた。もう秋の初めの頃のように厭な臭いが鼻を突くこともなかったが、水はやはり澱んだまま流れなかった。そこに種々雑多なものがゆらゆらと揺れていた。包装紙や、木切れや、藁や、ブリキの罐や、土瓶のかけらや、その他いろいろのものが。濁った水面には油が浮いてぎらぎらし、乏しい日光を反射していた。

［2］　私は昔ギリシャ神話を読んで、うろ覚えに忘却の河というのがあったのを覚えている。三途の河のようなものだろう、死者がそこを渡り、その水を飲み、生きていた頃の記憶をすべて忘れ去ると言われているものだ。しかし私にとって、忘却の河とはこの掘割のように流れないもの、澱んだもの、腐って行くもの、あらゆるがらくたを浮かべているものの方が、よりふさわしいような気がする。この水は、水そのものが死んでいるのだ。そして忘却とはそれ自体少しずつ死んで行くことではないだろうか。あらゆる過去のがらくたをその上に浮かべ、やがてそれらが風に吹かれ雨に打たれ、それら自身の重味に耐えかねて沈んで行くことではないだろうか。

［3］　私はその時、彼女の生家を訪ねて行った。実にはるばると、日本海のほとりまでその住所を頼りに探しに行った。その家で応接に出たのは、眼を病んでいるらしくて赤く充血した眼をした婦人だった。それが彼女の母親であることは、向こうが、娘のことですか、と言うまでは分からなかった。それほど見すぼらしくやつれてはいたが、どこか彼女に似ているところがないわけではなかった。娘のことですか、と言って、訛りの多い方言でぽつりと答えた。娘は死にました。私は事情が分かるまでＡ押し問答を繰り返したが、その間じゅうこの婦人は難しい方言と、赤くただれたその眼とで私をおびやかした。私の話を聞こうともせず、私が何者であるのかを知ろうともせずに、娘は身籠ったのを恥じて淵から身を投げて死んだ、と言い続けた。その赤くただれた眼は、風雪のせいだったのだろうか、娘を悼む涙のせいだったのだろうか。婦人は私を門口から追い返した。線香を上げさせてもくれなかった。この母親自身も恥じていたのだ。

［4］　私はかつて彼女の口から聞いたことのある断崖へ行ってみた。私は夢遊病者のように歩いていて、いつ、どういうふうにそこへ達したのか覚えていない。また、そこの風景も何ひとつ覚えていない。確かに下を見下ろすと眼のくらめくような

恐ろしい場所だったような気がする。そして更に私はふらふらと歩いて、いつしか海岸に出ていた。秋の終わりで、寒い風がびゅうびゅうと吹きつけていたが、私は少しも寒いとは感じなかった。

［5］そこが賽の河原だった。洞窟もあった。あたりには人一人いず、海には舟一艘見えなかった。私は河原の岩を踏んでその洞窟にはいって行った。白い涎掛けをつけたお地蔵様があり、小さな石仏があり、その前や横には幾箇所にも小さな石が積み重ねられていた。蝋涙のこびりついた蝋燭の跡があり、子供の形見らしい襦袢や着物などがあった。もっと色々なものがあったのかもしれない。しかしこの仄暗い洞窟の中は、打ち寄せる浪の響きが凄まじく木霊して、ぞっとするような妖気を含んでいた。子供たちの多くの霊が、生き返らせてよ、生き返らせてよ、と叫んでいるような気がした。私はそこにしゃがみ、小石を取って、重ねてある上に一つ載せた。また一つ載せた。その塔はぐらぐらし、あっというまに崩れた。私はまた、必死の注意をこめて、一つずつ小石を積み重ねて行った。それが魂の、死んだ魂への、何等かの救いになるものだろうか。いや私は、私自身への救いのつもりで、この難しい作業を続けていたのだ。私はそれを終えると、最後に手にあった石をポケットに入れ、逃れるようにそこをあとにした。その洞窟を、その賽の河原を、そのさみしい彼女の故郷の村を、B最も恐ろしいもののようにあとにした。

［6］私は手摺りにもたれて、長い間掘割の濁った水を眺めていた。美しい大きな眼をしていた彼女、赤くただれた眼をしていたその母親、鬚だらけの顔を微笑させていた戦友、生きながら死顔をしていたその若い妻、私は幾つもの顔を思い出した。戦後パージ（注）になって死んだ父、そのあとを追って老け込んだ顔に涙を浮かべながら死んだ母、幼い頃のもう記憶がさだかではない実の両親、同胞たち、そして生まれると間もなく、名前もつけられずに死んでしまった私の子供。そして彼女と共に、ついに命というものを天から授かることもなくて死んだもう一人の私の子供。その顔を私は決して、決して、知ることはないのである。

［7］私は立ち上がり、着て来たオーバーのポケットを探って小さな石を一つ取り出した。それは私が賽の河原から拾って来て、今まで大事に保存して来たものだ。妻は恐らく気がついたこともなかっただろうが、それは私にとって、彼女と彼女の生むべきはずだった子供との唯一の形見だった。その小さな石には、私が忘れようと思い、忘れてはならないと思い、しかも私がもう何年も、いや何十年も、忘れたままになっていた無量の想いが籠められていた。その石は私の罪であり、私の恥であ

り、失われた私の誠意であり、惨めな私の生のしるしだった。石は冷たく、日本海の潮の響きを、返らない後悔のようにその中に隠していた。

［８］　私は再び窓へ行き、その石をじっと掌の中であたためてから、下の掘割の中へ投げた。ゆるやかな波紋が、そこに浮かんでいるがらくたを、近いものは大きく、遠いものはかすかに揺るがせながら、しかし、いつのまにかその輪を広げて、やがて消えて行った。

（福永武彦『忘却の河』）

（注）パージ――ここでは、太平洋戦争終了直後、戦争指導者や協力者と見られた人々が、公職や特定の会社、報道機関、教職などから追放されたこと。

問１　傍線部Ａの語句の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　相手を黙らせ一方的に主張すること
②　互いに体を押し合って言い争うこと
③　交互に質問し互いに答え合うこと
④　休む間も無く問答を続けること
⑤　互いにかみあわないまま言い合うこと

問２　本文の［１］～［８］の段落の中で、「私」が回想している場面が描かれている段落はどれか。その組合せとして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　［１］・［２］・［８］
②　［２］・［３］・［６］
③　［３］・［４］・［５］
④　［４］・［５］
⑤　［６］・［７］

問３　本文の［３］の段落における「母親」の態度の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　この「母親」は、娘の死を悼むあまりに、娘の知り合いである「私」を家に入れることを、親として恥ずべきこととし

て拒絶し、線香すらも上げさせないのである。

②　この「母親」は、娘が身籠って自殺したことを自分に恥をかかせたとして、娘を訪ねて来た「私」に対して娘のことを話したがらず、「私」の弔いも拒絶しているのである。

③　この「母親」は、訪ねて来た娘の知り合いの「私」に、身を投げて死んだ娘のことを話すと、自分の恥を責められるので、話したがらず家にも入れないのである。

④　この「母親」は、娘が身を恥じて死んだのを、単に娘だけのこととしないで自らも恥じ、「私」の話を聞こうともせず、「私」の弔いすらも拒否しているのである。

⑤　この「母親」は、娘を自殺させてしまったことを、はるばる娘を訪ねて来た「私」に恥じて、家にも入れず、「私」に弔ってもらうことも遠慮しているのである。

問４　傍線部Ｂ「最も恐ろしいもののようにあとにした。」とあるが、それは「私」のどんな様子を表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　賽の河原でわが子の魂を救おうと塔をつくり、その成果として小石を一つポケットに入れた「私」が、この地から一刻も早く一歩でも遠く離れたがっている様子を表している。

②　賽の河原で塔をつくったくらいで救われるとは思えない「私」が、自分の罪をまざまざと感じさせられ、その慄（おのの）きに襲われている様子を表している。

③　賽の河原がいかにさみしいものであったかを身をもって知った「私」が、死者たちへの切ない思いを懸命に振り払おうとしている様子を表している。

④　賽の河原のぞっとする妖気のなかで、子供たちの霊の叫びを聞いた「私」が、心の底から震え上がって、まだ心身ともにそれから脱しきれないままでいる様子を表している。

⑤　賽の河原で自分の罪の救いとして難しい作業を終えた「私」が、罪から救済された思いを失うまいとしている様子を表している。

問５　傍線部Ｃ「私は再び窓へ行き、その石を……下の掘割の中へ投げた。」とあるが、それは「私」にとってどのようなことを意味しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① かつて自分の子を宿した女性を死に追いやったことに激しい悔恨を覚えている「私」は、生まれるはずであった子供の唯一の形見である「小さな石」を掌であたためてから掘割に投げ込むことで、そこに深い鎮魂の思いを託しているのである。

② 自身の過去を振り返る時、犯してきた様々の罪のみが思い返される「私」は、それら幾つもの罪のしるしである「小さな石」を掘割に投げ入れることによって、そうした過去の一切から目をそむけ、新たな心で生き直そうと決心しているのである。

③ これまで数々の死に立ち会ってきた「私」にとり、「小さな石」とはそれら死んでいった人々への自己の不実さを常に突きつけるものであったが、それを掘割の底に沈めることで、「私」は自責の念を心の深部に抱き続けようと決意しているのである。

④「私」にとって過去とは多くの人々との死別や生別を意味するものであり、「小さな石」はそうした惨めな生のしるしに他ならなかったが、それを掘割に投げ放つことのうちに、「私」は幸福な人生の新たな始まりを予感しているのである。

⑤ 深い罪の意識の中で過去につきまとわれている「私」にとって、「小さな石」とはそのような過去を象徴するものであり、それを掘割に投げすてることに、「私」はそうした過去に対する拘泥から解き放たれることへの願いをこめているのである。

第十五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●福永武彦＝ふくなが　たけひこ（一九一八～一九七九年）『忘却の河』↑芥川賞＋センター試験
●池澤夏樹＝いけざわ　なつき（一九四五～）『スティル・ライフ』↑芥川賞＋センター試験
cf 親子でセンター試験……太宰治と津島佑子

語句

三途の川＝さんずのかわ↓死後、冥土へ行く途中で渡るとされる川
　cf 彼岸＝ひがん↓あの世・迷いから脱した悟りの境地
　　此岸＝しがん↓この世・悩みや迷いに満ちた現実世界
賽の河原＝さいのかわら↓親に先立って死んだ子供がいくとされる、三途の川の河原

復習問題　第十五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）北国のフウセツに耐える　①説　②節　③刹　④雪　⑤切

（イ）子供のカタミの品です　①見　②身　③実　④味　⑤未

（ウ）客をオウセツ間に通す　①往　②応　③奥　④墺　⑤押

（エ）仏壇にセンコウをあげる　①講　②鉱　③幸　④香　⑤効

（オ）大きなハモンが広がる　①門　②紋　③文　④聞　⑤悶

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）うろ覚え

①棒暗記した記憶　②不確かな記憶　③間接的な記憶

④誤りの多い記憶　⑤無意識の記憶

（キ）無量の想い

①数少ない想い　②正体不明の想い　③とるに足りない想い

④はかりしれない想い　⑤大雑把な想い

（ク）悼む

①思いやりを示す　②落ち度を指摘する　③人の死を嘆き悲しむ

④板挟みになる　⑤失敗を謝罪する

第十六講　コミュニケーション論

食をともにする、ということは人間にとって特別な意味を持っている。家族や職場の同僚との日々の食事、久しぶりに会う旧友との食事、仕事の相手先との契約がかかった大事な食事、生涯の伴侶（はんりょ）と出会う見合いの席の食事、旅先で招かれた思いがけない食事など、われわれは食事を通してさまざまな人々と対面し、時を共有する。食事は人々の出会いの時を演出し、親密な関係を確認させ、壊れかかった関係を修復し、新たな関係を作る大きな力を持っている。食事がなければ、人々はこんなにも頻繁（ひんぱん）に出会うことはないだろうし、向かい合って話をすることもないだろう。それはとても不思議なことだと私は思う。なぜなら、人間に近縁な霊長類は食をともにするということはめったにないし、これほど多様な仲間と顔を付き合わせることもないからだ。

そもそも霊長類にとって食べるという行為は極めて個人的な営みだ。食物は争いのもとになりこそすれ、他者と分かち合ったりするものではない。単独で生活しているサルたちはそれぞれなわばりを構（かま）えているが、それは他者に邪魔されずに食物を独占できるようにするためだ。群れを作って暮らすサルたちは互いに優劣の順位を認知しているが、それは食物をとる優先権をあらかじめ決めてトラブルを起こさないようにしているからである。劣位な方が食物をとることを控えればけんかは起きないし、周囲がそのルールを守るように仕向ければトラブルは長引かない。食物は優劣の関係を反映させる源泉であり、サルたちは食物を前にして互いの差異を認知することによって共存している。

そんなA物騒な代物をなぜ人間は親密な関係を作るために用いるようになったのだろう。その答えは類人猿の食物を分配する行為の中に隠されている。人間に最も近縁なゴリラとチンパンジーは、他者に乞（こ）われると採食場所や食物を譲ることがある。しかも、優位者ではなく劣位者が分配を要求することが多い。サルとは違って類人猿は、食物を前にして劣位者が優位者に抑制を強いることがあるのだ。しかも面白いことに、ゴリラもチンパンジーも相手が食物をとる前に分配を要求することはない。優位者が食物を手にしてから、相手の顔を見つめ、手を伸ばして分配を乞うのである。これは、その食物が食べたいというだけでなく、「他ならぬあなたの食物がほしい」と要求していることを示唆している。つまり食物は相手と自分との親和的なきずなを確認する手段となっているのだ。そして渡される食物には、その所有者の顔があたかも刻印されるかのように影響力が付与される。

おそらく渡すものはその効果を知っている。肉食をするチンパンジーが最もよく分配をせがむのは群れの中で最優位のオスであり、オスは自分の同盟者や交尾相手によく肉を分配する傾向があるからだ。チンパンジーにとって食物の分配はある程度他者を操作する手段になっていると考えることができる。

人間の分配や共食もこの類人猿の分配行動から由来したものだと思う。ただ、人間では他者を操作する力が極力弱められている点が違う。アフリカの狩猟採集民は狩猟の後、誰（だれ）が獲物を仕留めたかわからないように分配し、最終的にキャンプの仲間全員に平等に肉が行き渡るようにする。これは個人の所有を徹底的に排し、権威が生じたり、仲間の間に差異が際立ったりしないように配慮するからだ。おそらく彼らは、食物を所有し、それを特定の相手に分配することが、ともに生きる仲間との平和を乱すことをよく知っているのだろう。

B類人猿と違って人間は、食物に自分の顔が刻印されることを避けて共存を果たしているのである。人間の社会ではどこに行っても、食物は自分のものであって自分のものでないという不思議な性質を持っている。せっかく丹精込めてつくった食材や料理でも、客が来れば惜しげもなく与えるのが礼儀である。食物を与えても相手にあからさまな見返りを要求しないし、初めから何かを交換条件にして食事を供したりはしない。食事は供する側と受ける側のどちらにとっても対等な許容の表現であり、相手に対して心を開くという互いの信頼によって成り立っている。

おそらく人間が食事という行為を創造するためには、「食は個体の間に緊張ではなく和をもたらす」という他の霊長類とはさかさまの発想が必要だった。その結果、サルにも類人猿にもできなかった不思議な宥和（ゆうわ）のひとときを可能にしたのだが、C社会的な食事はまだ人間にとっても生得的な行動とはなっていない。人間の採食行動は霊長類の祖先の特徴を色濃く反映しているからである。毎日何度も食事をとり、どこでも排泄（はいせつ）しようとするのは、熱帯林で果実を食べ、その種子を散布する役割を果たしてきた霊長類の特徴を受け継いでいる。幼児に排便のしつけをするのが難しいように、食べ物を仲間と分け合って食べることを学ぶには時間がかかる。人間の幼児は早くから食物を用いてコミュニケーションをとろうとするが、その適切な方法を知っているわけではない。その技法は社会的な場で何度も経験をつみながら鍛えていかねばならないのである。

（山極寿一「食というコミュニケーション」）

問１　傍線の箇所Ａ「物騒な代物」とあるが、何がどのような意味で「物騒」なのか。二十五字以内で説明せよ。

問２　傍線の箇所Ｂ「類人猿と違って人間は、食物に自分の顔が刻印されることを避けて共存を果たしている」とあるが、類人猿と人間の「共存」のしかたの違いを対比して八十字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所Ｃ「社会的な食事はまだ人間にとっても生得的な行動とはなっていない」とはどういう意味か。本文の内容に即して五十字以内で説明せよ。

第十六講　知識モノ解説

語句

生得的＝せいとくてき→生まれ持っての・先験的・先天的（ラテン語のア・プリオリ）
　対義語　経験的・後天的（ラテン語のア・ポステリオリ）
宥和＝ゆうわ→大目に見る・寛大に対応　　cf 融和→打ち解ける
霊長類＝れいちょうるい→サル類とヒト類を含む動物の中で最も進化した哺乳類霊長目の総称
類人猿＝るいじんえん→霊長類のなかでも人間に最も近いもの　チンパンジー、オランウータン、ゴリラなど

復習問題　第十六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）職場のドウリョウと食事する　①亮　②僚　③寮　④療　⑤瞭

（イ）人生のハンリョと出会う　①飯　②半　③伴　④汎　⑤判

（ウ）壊れた関係をシュウフク　①修　②集　③繍　④収　⑤拾

（エ）ヒンパンに街で出会う　①品　②賓　③牝　④貧　⑤頻

（オ）誰にもジャマされない　①間　②摩　③魔　④痲　⑤麻

（カ）相手とシンワ的なきずなを作る　①神　②心　③真　④親　⑤深

（キ）森へシュリョウに出かける　①種　②主　③取　④守　⑤狩

（ク）種子を広範囲にサンプする　①参　②散　③産　④賛　⑤惨

（ケ）動物のサイショク行動を観察　①祭　②際　③菜　④採　⑤栽

（コ）タンセイ込めて料理する　①丹　②端　③嘆　④単　⑤短

第十七講　身体論・芸術論

異なる世界の要素を意図してとり入れてきたといわれるバレエにも、アフリカのダンスの要素はほとんど関与しなかったようだ。ここでいう「アフリカ」は、ベルベル＝アラブの文化を基層に地中海世界の一部をなしている北アフリカを除く、サハラ以南のいわゆる「黒人アフリカ」である。

バレエにアフリカのダンスが関わらなかったのは、何よりもアフリカの人々にとっての踊る行為が、「おどる」というコンセプトにおいても、パフォーマンスとしての身体の使い方においても、バレエとはあまりに異質だったからであろう。見方を変えれば、アフリカのダンスのバレエにとっての異質性をとりあげてみることで、バレエというものが外部世界の要素を摂取しながらも保ちつづけてきた、［Ａ］の特徴を問い直してみることも可能になるといえるかもしれない。

アフリカにおけるダンスは、アフリカの人々がヨーロッパの植民地支配から独立した、国によって違いはあるがほぼ一九六〇年代から、主として欧米での劇場公演を目的としていくつかの国で政府主導で編成された民族歌舞団を除けば、劇場空間で観賞のために集まった観衆を前に踊られるものは、ほとんどなかったといってよい。だがそれは、アフリカ社会に踊ることへの愛好が稀薄だったということを意味しない。逆に、踊ることが日常生活に浸透し、甲<u>すべての人がダンサーだった</u>ともいえるために、観賞する興行としての踊りが成立しにくかったとみることもできる。

セネガルの元大統領で詩人で、「ネグリチュード」（黒人性）の思想の提唱者でもあるレオポルド・サンゴールは、かつてアフリカの黒人の特質を、デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」（Je pense, donc je suis.）をもじった「われ踊る、ゆえにわれあり」（Je danse, donc je suis.）ということばで表現したことがある。これは、踊ることが生きることと不可分のアフリカの人たちの実存をよく表わしている。

実際、アフリカの村の生活でも町の生活でも、たとえば夕暮どき中庭の石の上に置いたトランジスターラジオから、ちょっとでも「踊れる」音楽が聞こえてこようものなら、よちよち歩きの幼児でもリズミカルに腰や肩を動かしはじめるし、夕餉（ゆうげ）の支度をしていた「お婆さん」と呼んでもいい女性も、鍋の汁をかきまわしていた乙<u>杓子</u>を手に持ったまま、おどけた身ぶり腰ぶりで

踊りだす。それは踊らずにいられない、身体に内蔵された衝動——日常踊ることがまずないといっていいヤマト民族の一人である私の目には、ほとんど遺伝子にセットされているとしか思えない衝動の［B］なのである。しかもそれが、見ていても楽しくなる、上手な踊りなのだ。

私が三十年来アフリカで最も親しくつきあってきたサバンナの農民モシ族（現ブルキナファソ）には、「音楽」に当たる概念がなく、メッセージとして意味のある音とそうでない雑音、現代の情報科学でいうシグナルとノイズに対応する概念があるだけなのだが、メッセージとして意味があるかどうかの基準には、その音が聞く人を踊らせる力があるかどうかも含まれている。モシの人たちにとって、音がメッセージを伝達するということのうちには、知性や感性に対してだけでなく、踊りださずにいられなくなるような、身体への働きかけも、重要な一部としてあるのだ。

つまりアフリカの人たちにとって、ダンスは観るものである前に自分で踊るものであり、身体で表現するよりは、身体を通じて自分が何かを感じとり、享受する行為であるように思える。醒めた個を、集合性ないしは共同性のなかに埋没させること、「時」を止めて空間として展開するかわりに、「時」のなかに身を投じて純粋に「時」をからだごと生きること。死者をとぶらう祭りで、夜っぴて砂ぼこりを蹴立てながら全身で踊りつづける人たちを見ていて、私はこの人たちが文字（エクリチュール）を必要としなかった理由がわかったような気がした。ある種の踊りは、時を止め観念を外在化し固定するという文字をしるす行為の、対極にある行為ではないかと私は思うのだが、アフリカの踊りからみると、バレエなどはエクリチュールの延長にむしろ位置づけられるといっていい。

問１　空欄［A］に入る最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　地域文化としての歴史性
②　劇場芸術としての歴史性
③　身体表現としてのアイデンティティ
④　民族文化としてのアイデンティティ

問２　傍線部甲の「すべての人がダンサー」とは、ここではどのような事態をいっているのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　踊りを何らかの生活の糧にして皆が暮らしている。
②　皆が生まれながらに踊りの才能を身に付けている。
③　日常の生活の場や環境が劇場空間にもなっている。
④　皆が踊っているので観衆というものが存在しない。

問３　波線部乙に関して、「（　）も杓子も」という慣用句があるが、（　）と同じ動物の名前が入るもので最も適当なものを次の中から一つ選べ。

①　（　）も食わない　②　（　）を被る　③　（　）の一声　④　（　）の歩み

問４　空欄 B には漢字二字の熟語が入る。その組み合わせる漢字二つを次の中から選べ。

①　幻　②　想　③　見　④　発　⑤　現　⑥　影

問５　本文が述べている内容と合致するものが次の中に二つある。それはどれとどれか。

①　バレエは身体文化だと思っているが、アフリカのダンスと比べるとむしろ文字文化の範疇（はんちゅう）に入ってしまう。
②　バレエのような劇場芸術は、見るものと演じるものという二項対立的な世界に人々をふり分けてしまう。
③　文字という記録し表現するための固定した記号など必要としない行為は、欧米社会では理解されがたい。
④　踊るという行為が、生きることと密接不可分な社会は、欧米的な身体文化の枠組みには収まらないものがある。
⑤　文字を必要としない社会の人々の方が、文字文化の社会の人間よりも優れた身体文化を営んでいる。
⑥　踊りが相互のコミュニケーション言語となっているアフリカのある社会では、文字など必要としない。

第十七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●川田順造＝かわだじゅんぞう（一九三四〜）→今回の文章（『アフリカの声　歴史への問い直し』）の執筆者。
文化人類学者でレヴィ・ストロースとも親交があった。
研究対象の西アフリカ、モシ族に関する文章は慶應大学文学部の小論文入試でも出題された。

語句

実存＝じつぞん→現実存在・「人間とは〜」といった類的な大きなくくり、抽象的概念的なまとめではなく、
個々に呼吸していきているリアルな人間像
夜っぴて→一晩中・夜もすがら
猫も杓子も→誰もかれも、みんな
cf 杓子定規＝しゃくしじょうぎ→決まりきった、融通がきかない
犬も食わない→ひどく毛嫌いする
鶴の一声→有力者の一言で決定すること
牛の歩み→ひどくゆっくりなこと
アイデンティティ→他者から認証された個性

復習問題　第十七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）アラブの文化をキソウとする　①基　②機　③帰　④来　⑤着

（イ）バレエの劇場コウエンが始まる　①講　②公　③巧　④広　⑤後

（ウ）政府シュドウで組織される　①守　②首　③主　④手　⑤衆

（エ）ある思想のテイショウ者に会う　①証　②唱　③賞　④称　⑤昭

（オ）音楽団をヘンセイする　①編　②偏　③変　④遍　⑤片

（カ）全身で喜びをキョウジュする　①教　②共　③享　④興　⑤経

（キ）身体にナイゾウされた衝動　①臓　②蔵　③像　④象　⑤造

（ク）思考やカンネンを表現する　①感　②勘　③官　④観　⑤歓

（ケ）内なるものをガイザイ化する　①概　②慨　③害　④外　⑤蓋

（コ）ジュンスイに体ごと生きる　①殉　②準　③潤　④順　⑤純

第十八講　文学論　カルチュラル・スタディーズ

文学の研究では、この三十年ほどの間に、ほとんどすべての点について問題が発生し、新しい考え方が提唱されてきた。その中でも今大きな問題になっているのが、文学と文化の関係のあり方である。文学そのものが文化の重要な部分であることは疑い得ないとして、その文学が文化のどの部分に位置し、互いにどのように規定し規定される関係にあるのか、それが問題にされているということである。Aその二つを敵対関係におこうとする議論もいたるところで見かける。例えばハロルド・ブルームの『西欧のカノン』には次のような極論が登場する。

今英文科と呼ばれているものはカルチュラル・スタディーズ科[注1]と改称され、そこでは漫画のバットマンやモルモンのテーマパークやテレビや映画やロックが、チョーサーやシェイクスピアやミルトンやワーズワスやウォレス・スティーヴンズにとって替ることとだろう。

このような極論を誘発する状況があるのは事実だとしても、今の時代に西欧の古き良き伝統に固執してみせるその調子からは、その伝統を足場として権威と名声を築きあげてきた学者の怨念めいたものが洩れてくるだけの話である。彼にとっての文化とは何よりもまずエリート階級の教養としてのそれなのだ。

しかし将来につながる可能性をもっているのは、むしろそれとは対照的に、対抗文化[注2]の世代に属するジェイムズ・クリフォードの文化のとらえ方の方であろう。この人類学者は、バフチンの思想を引用しながら、その文化概念を展開する。さまざまの全体性を非物質的なものとして表象することに意を用いていたバフチンにとって、統合された文化世界や言語は存在しない。そのような抽象的な統一体を措定しようとするあらゆる試みは、モノローグ的権力の構築物なのだ。ひとつの「文化」とは、具体的には複数の下位文化、部内者、部外者、多様なグループなどの制限のない創造的な対話である。また、ひとつの「言語」とは、地方語、職業用語、一般的な決まり文句の相互作用や闘争であり、異なった年齢グループ、個人等々の発話である。バフチンに

とって、多声的小説とは、文化的あるいは歴史的な全体化による力業ではなく、むしろ多様性のカーニヴァル的闘技場だ。バフチンは談話的複合性、ないしは複数の声の対話的相互作用に適した、あるユートピア的なテクスト空間を発見する。文化をさまざまの階級、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、土地、宗教、年齢などによって差異化している価値観の複合体とする見方に、私も賛成する。しかもその複合体を構成する各部分は併存しながらも、絶えず大小強弱の対立を起こしているはずである。そこでは、全体が均質化して安定状態に達するなどということは考えられない。

イギリス産のカルチュラル・スタディーズの中でほぼ公認されている文化のとらえ方は、このような文化概念にこそ接ぎ木すべきものであるだろう。例えばレイモンド・ウィリアムズの有名な規定によれば、

文化とは、ひとり芸術や学問のみならず、さまざまの制度や日常の行動を通しても、何らかの意味や価値観を表現することになる特定の生活のあり方を描き出すものなのである。この規定から出発すると、文化を分析するとは特定の生活のあり方、特定の「文化」の内にひそむ、そこに見てとれる諸々の意味と価値観を明らかにするということである。

ということになる。ここで言われている「特定の生活のあり方」は特定の階級や民族や国家に限定されるものではあり得ない。特定の文化にしても、教養のあるエリートのみに限定されるものではないし、逆に民衆文化と同一視されるものでもない。純粋な民衆文化など存在しないし、エリート文化なるものが質の高いエッセンスのみからなるなどと考えるのは茶番にすぎない。

注１　カルチュラル・スタディーズ……今まで研究の対象とされていなかったいわゆる大衆文化をも視野にいれ、従来の文化概念を問い直しつつ発達した人文・社会科学分野における新しい研究方法。

注２　対抗文化……一九六〇年代にアメリカを中心に起こった反体制的・反主流の政治文化。

問１　傍線部Ａに見られるように、筆者は文学と文化を「敵対関係」にとらえている例としてハロルド・ブルームの論を挙げている。筆者はブルームに対してどのような考えを持っているか。もっとも適当なものを次の中から選べ。

①　文化をエリートの教養に限定するブルームに対して、筆者はむしろ民衆文化こそ文化だと考えている。
②　カルチュラル・スタディーズが対象にしているような民衆文化を文化概念に含めないブルームに対して、筆者はブルームが古い学問的伝統に固執していると考えている。
③　カルチュラル・スタディーズが英文科にとってかわると主張するブルームに対して、筆者はそのような状況にはならないだろうと考えている。
④　カルチュラル・スタディーズが英文科にとってかわると主張するブルームに対して、筆者は極論ではあるがおおむね正しいと考えている。

問２　バフチンの思想を介してクリフォードが考える文化の説明として、もっとも適当なものを次の中から選べ。

①　文化は上位文化と下位文化で構成され、上位文化はモノローグ的権力によって下位文化を支配する。
②　文化は固定的なエリート階級の文化と確固とした民衆文化で構成され、完全に二分化される。
③　文化は多様性を持つ複数のグループで構成され、それらがぶつかり合いながら作られる。
④　文化は複数の多様なグループが、お互いに協調し合うことによって創造される。

問３　傍線部Ｂ「特定の生活のあり方」の説明として、もっとも適当なものを次の中から選べ。

①　特定の階級や民族や国家の制約を常にうけているという生活のあり方。
②　特定の意味や価値観が日常の行動にも現れてくるという生活のあり方。
③　特定の社会制度に制約を常に受けているという生活のあり方。
④　特定の意味や価値観が芸術や学問に現れてくるという生活のあり方。

問４　本文の主旨に合致するもっとも適当なものを次の中から選べ。

①　文化の分析とは、エリート階級の教養を対象とし、その社会の人々の行動や生活の奥にある意味や価値観を分析することである。

②　文化の分析とは、一般の人々の日常を対象とし、彼らの価値観を明らかにすることである。

③　文化の分析とは、多数の国々の文化を比較検討し、その文化固有の価値観を分析することである。

④　文化の分析とは、具体的な対象が問題なのではなく、人々の行動や生活の奥にある意味や価値観を明らかにすることである。

第十八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●富山太佳夫＝とみやま　たかお（一九四七〜）→今回の文章（『文化と精読　新しい文学入門』）の執筆者で英米文学の研究者

語句

ジェンダー→社会的性差・生物学的な性差を意味するセクシュアリティやセックスと異なり、歴史的社会的に形成された男女の差

ユートピア→トマス・モアの作品に基づく理想郷　ギリシャ語では「どこにもない場所」を意味する

類義語　楽園・別天地・桃源郷（とうげんきょう　俗世を離れた平和な世界・陶淵明（とうえんめい）が描いた）

アルカディア（ギリシャ語・牧歌的な楽園）

蓬莱（ほうらい　中国の伝説で描かれる仙人が住む不老不死の地）

対義語　ディストピア→SFで描かれるような反理想郷・暗黒の未来

措定＝そてい→当然の前提とみなすこと

茶番＝ちゃばん→ばかばかしい振る舞い。本来は、その場にあるもので笑いをとる即興寸劇、「茶番狂言」の略。「モノぼけ」といったところ

復習問題　第十八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア) マンガを読みふける　①慢　②饅　③漫　④満　⑤萬

(イ) 古き伝統にコシツする　①嫉　②質　③叱　④失　⑤執

(ウ) ケンイある学者　①威　②意　③畏　④居　⑤維

(エ) 学者のオンネンにすぎない　①恩　②怨　③穏　④御　⑤遠

(オ) 学識経験者のキョウヨウ　①用　②要　③庸　④様　⑤養

(カ) ある学説をインヨウする　①洋　②用　③揺　④拗　⑤揚

(キ) 彼とはタイショウ的な考え　①称　②象　③照　④賞　⑤正

(ク) ある前提をソテイした発想　①措　②祖　③租　④素　⑤楚

(ケ) 様々な価値観のフクゴウ体　①副　②復　③福　④複　⑤腹

(コ) 学問的な言葉でキテイする　①基　②規　③帰　④機　⑤着

第十九講　学問論その２

「生命は学習である」とよく言われる。私たちは学ぶことによって生き、生きることによって学ぶ。すべての人間的行動の基礎には知が横たわっており、私たちは生きる上でその知を動員する。そして、さらに知るために行動し、知るがゆえに行動する。しかし、知るとはいったい何であるか、私たちは意外にそれを知らない。

知るとは、存在するものを知覚し、思考することである。言い換えれば、存在しないものを知ることはできない。知るとは、そこに何かがあることを意味している。それが何であるかを知らないとき、私たちは行動の手がかりを失って不安になる。では、何かを知っているというとき、私たちは実際それをどれほど知っているだろうか？

私たちは友人を知り、自分の町を知り、国を知る。しかし友人について、私たちは間違うことがある。自分の住んでいる町も、隅から隅まで知っているわけではない。国については、なおさらそうであろう。このわずかな例からしても、［　A　］ことがわかる。

存在するものを絶対的かつ全体的に知ることはできない。私たちは自分の感覚と理性によって物事を知る。つまり私たちの知は、身体と精神の枠組みに則して働くのである。逆に言えば、私たちは存在を知覚し思考する手段そのものによって、存在から切り離されている。知は媒介によって成立する。すなわち、［　B　］。

事物をありのままに知ることはできない。おそらく、人間の眼とはべつの眼は、人間の眼に映る風景とはべつの風景を見るであろう。たとえば、人間の色彩体験にとって大きな意味をもつ緑の世界は、昆虫にとって明るい灰色に見えると推測されている。人間の脳とはべつの脳は、べつの思考をするであろう。正確さと厳密さだけを理想としない精神なら、いまあるものとはべつの数学、べつの物理学を構想するかもしれない。ロボットにとってならばともかく、科学的な知識でさえ完全に客観的な知ではありえない。

つまり、真実を存在との合致と定義するなら、知と真実とはべつのものである。けれども、真実からまったく離れた知を、知と呼ぶことはできない。それはたんに過誤であるか、幻覚であろう。いかなる知も絶対的ではありえないが、だからといって、

C。

宇宙の運動について、コペルニクスとニュートンの理論は、古代ギリシアのプトレマイオスの理論より真実に近い。そしてアインシュタインの相対性理論は、さらにいっそう真実に迫っている。相対性理論はそれまでの理論を説明するが、それまでの理論は相対性理論を説明することができない。ここから次のことが言えるだろう。知はすべて相対的であるが、D。

だから科学史というものが成立し、そこにはE的な進歩が見出される。科学の歩みのなかで一度犯された誤りが、同じままに繰り返されることはない。科学理論は検証され、テストされ、それに合わない事実がひとつでもあれば、誤りとして退けられる。そして検証に耐えうる理論が、それに代わって提起される。言ってみれば、理論の淘汰が行われるのである。ここから言えるのは、どのような科学理論も相対的かつ一時的な真理であるということだ。

むろん、科学は知の理想的な形態である。けれども、科学的なものだけが知であるわけではない。私たちは科学によって保証されていない多くの事柄を知っている。実際、自分の嗜好による事物の選択を、私たちはいかなる科学によって教えられたわけではない。このことは感覚や経験が、たとえ限定されたものであっても、すでにひとつの知であることを意味しているだろう。

さらに言えば、F。たとえば、裁判所で証言を求められるとする。しかし、その証言が科学的であるとは言えない。自分の見たもの、自分の見たと信ずるもの、自分の知っていると信ずることを述べるよう求められるだけだ。だから、そこには間違いも起こりうる。したがって、複数の証言が望ましい。しかし、そうした複数性も、真実にいたる可能性を仮定しているだけである。そして、この仮定された真実がなければ、有罪と無罪の差が存在しなくなる。私たちは真実が存在し、それに触れることができると信ずることによって、誤りと戦っているのだ。

ただし、この仮定された真実をけっして固定してはならない。真実が固定されたとたん、私たちはそれ以上考えることをやめてしまう。あるいは、固定された真実との関係でしか物事を考えなくなる。しかしまた、そうした固定を避けようとして、真実はどこにもないということも、思考を同様に停止させる。なぜなら、真実がどこにもないとしたら、真実がないということも真実ではなくなり、すべてが曖昧さのなかに放置されてしまう。

私たち人間の行動の基底にある知は、私たちの限られた感覚と経験を通じて日々流動し変化しつつ、明らかなるものを求めて旅をつづけている。言い換えれば、私たちには学ぶことがつねにある。人間の知はこの意味において、無知蒙昧と全知全能の間

にあると言っていい。だからこそ、知は進歩する。

問１　空欄［A］〜［D］に入る最も適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。ただし、同じ記号を二度以上選んではならない。

①　知は信心でも意見でもない　②　知と科学とはべつのものである

③　直接的な知というものはありえない　④　完全なる知というものは存在しない

⑤　すべての知が同じ価値をもつわけではない

問２　空欄［E］に入る最も適当な語句を、次の中から選べ。

①　不連続　②　合理　③　不可逆　④　飛躍　⑤　不可避

問３　空欄［F］に入る最も適当な文を、次の中から選べ。

①　真実の無視も起こりうる　②　ありえない真実も存在する

③　真実とは関係のない知も存在する　④　非科学的に見える知こそが真実である

⑤　科学的でない真実というものもありうる

問４　問題文の論旨および筆者の立場に合致するものを、次の中から一つ選べ。

①　知の進歩といっても、それは何の基準もないものであり、どこへ向かって進んでゆくのかわからない危険をつねにはらんでいる。

②　人間の知は身体と精神に条件づけられた相対的なものであるが、だからこそ私たちはありうべき真実を求めて探究をやめない。

③　抽象的な科学理論よりも、地道な感覚や経験に根ざした非科学的に見える知こそが、私たちの日常生活にとって大切なものである。

④　本能の壊れた動物である人間は、身の回りのわずかなものを手がかりに恣意的な知を構築して自分の生命を維持していくより仕方がない。

⑤　信心や意見は個人的な取捨選択の対象になりうるが、知は相対的に見えてじつは絶対的なものに触れているので、どのような知も尊重せざるをえない。

第十九講　知識モノ解説

語句

嗜好＝しこう→個人の好み　嗜好品→必需品ではなく好みで選ばれるもの。タバコやコーヒー、紅茶など

類義語　奢侈品＝しゃしひん→ぜいたく品

無知蒙昧＝むちもうまい→知識が不十分で道理が通らない。知恵の光がとどかないこと。これに知恵の光を当て、教え導くことが「啓蒙＝けいもう」。知恵の光をラテン語で「ルクス・ウェルターティス」

復習問題　第十九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）スミからスミまで知っている　①済　②端　③末　④隅　⑤角

（イ）身体と精神のワクグみ　①粋　②涌　③枠　④惑　⑤湧

（ウ）知はバイカイによって成立する　①培　②媒　③賠　④陪　⑤倍

（エ）シキサイ豊かな表現　①菜　②彩　③催　④採　⑤蔡

（オ）新しい学問をコウソウする　①講　②効　③構　④考　⑤高

（カ）仮説と真実とのガッチ　①致　②知　③値　④智　⑤弛

（キ）知はすべてソウタイ的である　①帯　②体　③耐　④対　⑤態

（ク）理論を実験でケンショウする　①顕　②験　③研　④険　⑤検

（ケ）思考をテイシする　①挺　②艇　③停　④態　⑤亭

（コ）人間の行動のキテイにあるもの　①底　②呈　③抵　④低　⑤体

第二十講　日本文化論・音楽論

「能」や「間（ま）」と謂（い）うような［X］なことばが、すげなく簡明にただひとつの音で表わされる日本語。平常それを用いている私たち日本人の、他民族とは異った好みや慣習。人間が創りだしたり表わしたりするものの悉（ことごと）くは、そうした言語や習俗を離れて在ることはない。西洋と東洋と謂う区分は雑駁（ざっぱく）に過ぎて嫌だが、機構的に最も単純な笛一管を例にとっても、そこに各民族、各地域社会の好みや習俗の隔たり、文化の表情の微妙な差異を聴くことができる。そして今日（いま）は、人類が生みだした文化の水脈が相互に影響し合いながら、私たちの生活（くらし）のただ中に渾然と渦巻いて在る。しかし、それだからいっそう、私たちには振り返らねば見えないような過去ではない、この瞬間の現実を支えて生きている過去を学ぶことが重要になってきた。たしかに人類は、日々共通の言語を目指し歩み進んでいるが、日本の音を、それが求めもしない西洋の形式に無体にも封じこめようとするような不自然なことをするまえに、民族の感受性や美意識、それを培った異質の風土から生まれた固有の文化の、相互に異る相貌（すがた）を明らかにし、確かめなければならないと思う。

日本人の芸術表現について考えてみると、A西洋人は、自然の中にその類型を見出すことができないようなものとしての人工（表現）を珍重するが、私たち日本人は、作りだすもの（表現）に、自然と同質を見て喜ぶ向きがあるように思う。このことは、音の嗜好にも当てはまる。西洋音楽は、雑音的なものを排除することを、歴史的に推しすすめてきた。だが、西洋近代音楽の周縁に今日もなお存在する多くの民族（民俗）音楽は、その騒音や雑音の使い方、混ぜ方の工合いによって固有の音楽を創造している。そして、日本人は、自然の雑音に対して、それとはまた別の、独自の美的態度を所有しているように思う。わが国の芸能の概ねは、かつて大陸や半島から渡来したものであり、後にそれらは、禅や仏教その他の影響によって独自の日本化を示したのであるが、その日本化の著しい特徴は、たとえば、移入された音階や律動のような音楽的主要素を基に新たに展開すると謂うのではなく、音楽表現上の音階や律動等はそのままにして、それよりむしろ楽器の音色（ねいろ）のひとつひとつを新たに深めて行くような傾向を示した。それは、中国の刺繍や彫刻等が、素材に対して極めて人工的な加工を施すのとは反対に、自然の素材を可能なかぎり元のままに据（お）こうとする態度に近い。

　私は常々、邦楽の演奏家と接している中で、日本人は音によって表現(あらわ)そうとするより、音を聴きだそうとすることを重んじているのではないか、と感じることがある。「間(ま)」とか「さわり」のようなことばは、表現における実際的な技術上の意味を示すものでありながら、同時にそれは、［Ｙ］な美的観念でもある。さらに、「一音成仏」というような思惟を生みだしているのは、日本人が、音によって表現(あらわ)すのではなく、音本然の貌(すがた)を聴くことに重きを置いたからではないか、と思う。日本人は、Ｂ自然の騒音や雑音を単なる表現上の素材として外在するものとしては観ずに、世界の全相をそこに映すものとして把えたのだ。そうした美意識が、能のような高度な芸術をつくりあげた。

　世阿弥が創出した夢幻能のように、一人の演技者の中に集約されるような形での劇(ドラマ)は、西洋近代劇に見られるような、他（相手役）との葛藤というものの上に成り立つ演劇とはかなり異る。「伊勢物語」に取材し案出された「井筒」では、ひとりの純情な美しい女と、業平との恒久的な恋物語と謂う体裁を表面にもちながら、一方でこのシテは、「人待つ女」と呼ばれるように、永久に相手を待つ存在として設定されている。（余談ながら「劇とは何事かが起るものであり、能とは何人かが現われるものだ。」と評した、ポール・クローデルの言葉が思いだされる。）後半で、女は恋人の衣裳を身にまとい、相手と一体化し、そうした、意味の重層性が、きわめて官能的であでやかな世界を形づくる。しかも、Ｃさらにおもしろいのは、ここでは、男である能役者が女に扮し、その女が男の格好をしているということだ。それは、単に倒錯的な美を感じさせるばかりではない。西洋の劇とは異る独特な劇空間、――劇的な状況(シチュエーション)というものではなく、そこに非現実な時空を現出する。これは、日本語が人称を省略して成り立つことばであることと深い係わりがあるように思う。そしてその総ては、日本人の自然との係わりかたに由来しているように思われる。

　現代において、稀有な能役者であった観世寿夫(かんぜひさお)氏と話した機(おり)、氏は、「日本の場合はあらゆる文化の中で自然の捉えかた、自然との係わり合いの問題がたいへん大きい。能に顕(あらわ)れる自然観にしても、人間と対抗する自然というものではない。〈自然〉ということばは、中世では〈フト〉という意味に使われていた。〈自然(フト)何とかしたときに来てください〉と謂うように用いられる。したがって自然というものは人間と対立するものとしてあるのではなく、何かのときにフト出遇うもので、それが音と音との間(ま)というような把えかたに、考え方として影響しているだろう。」と述べられていた。

　そして、日本文化の根底にある［甲］と謂うものは諦(あきら)めの思念(おもい)ではなく、ただ一刻も同じではありえない変転する自然（時空）

にたいして、フト出会う人間の生（人生）を、積極的に肯定する思想なのだと語られたのが、強く印象に残っている。

また、能の面（おもて）の、他民族の仮面劇等に比してきわめて特殊な有様（ありよう）も、そうした自然観と係わりをもつようである。面はたんにその役に扮するためのものではなく、感情や情況を［Z］に表現できる顔の表情を封じることで、かえって純粋な能役者の内面表出を可能にする。観世寿夫氏は、「真の表現を求めるために、わざわざ面をかけると謂うことが言える。表面的な演技を削りとっていって、しかもそれをつき抜けて顕れる内面的なものを要求している。」と語っている。

樹が、地や風の震動を天へ向けて伝えるように、能の面は、より純粋な生の気配、死の淵にたちこめる夢を伝える。

（武満　徹『音楽の余白から』）

問１　空欄［X］／［Y］／［Z］に入る語として最も適当なものを次からそれぞれ一つずつ選べ。

①　一義的　②　間接的　③　形而下的　④　形而上的

⑤　多義的　⑥　直接的　⑦　内面的

問２　傍線Ｂの「自然の騒音や雑音を単なる表現上の素材として外在するものとしては観ずに、世界の全相をそこに映すものとして把えた」とはどのようなことか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　自然の騒音や雑音のありのままを美と考え、それらをそのまま再現することで音楽が成り立つと考えた。

②　自然の騒音や雑音の中から、日本の固有の音階や律動を見いだし、前面に出すことで日本的な感覚の全体を表現した。

③　自然の騒音や雑音の中に、世界を表す音楽として純化されるべき音の最初の姿を見いだした。

④　自然の騒音や雑音を、音階や律動を介して音楽の音と関連づけることで、音楽を世界全体に結びつけた。

⑤　自然の騒音や雑音を排除せず深化させてとらえれば、そこに人間と自然が集約的に現れると考えた。

問３　傍線Ｃに「さらにおもしろいのは、ここでは、男である能役者が女に扮し、その女が男の格好をしているということだ」とあるが、ここで筆者はどのような点をおもしろいと思っているのか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　演技者を一人に集約することは、夢幻能を構成するための技巧として、それまでにない奇想天外な方法であること。
②　男が男でなく、女が女でないというように、事実が二重に否定されることで、非現実感が増してくること。
③　純清な女が一念を貫くことで、相手の男とついに一体化するにいたる結末がよく表されていること。
④　性が二重に逆転されることで、倒錯的な美が一層強く醸し出され、官能的な世界が形づくられること。
⑤　男女が重なり合って同一となる点に、自他の区別と対立を超えた非西欧的な演劇世界が現れていること。

問４　空欄［甲］に入る語として最も適当なものを次から一つ選べ。

①　無常観　②　他界観　③　人生観　④宗教観　⑤　自然観

問５　傍線Ａに該当するような芸術表現として、本文中にとりあげられている音楽と能の例以外には、どのようなものが考えられるか。具体的な例を一つあげ、七十字以上百字以内で説明せよ。なお、句読点やカギ括弧などもそれぞれ一字と数える。

第二十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●武満徹＝たけみつ　とおる（一九三〇～一九九六年）作曲家、音楽理論家。
●世阿弥＝ぜあみ→室町時代の能役者、能作者、能の理論家。
『風姿花伝（花伝書）』にて「幽玄（ゆうげん→奥深い情緒）」「物真似」などの芸能の本質を語っている
●『伊勢物語』＝いせものがたり→平安時代の歌物語。作者は不明だが、主人公は在原業平（ありわらのなりひら）。
「恋愛のデパート」とも言われる

語句

すげない＝素気無い→そっけない・シンプル
雑駁＝ざっぱく→雑多でまとまりがない・大雑把
渾然＝こんぜん→本来別々なものがまざりあうこと・混然　　類義語　渾沌（こんとん）
無体＝むたい→無法で道理にあわないこと
能＝のう→室町時代に観阿弥と世阿弥の父子により大成された芸能。仮面をつけ囃子（はやし）にのって舞うのが一般的
葛藤＝かっとう→対立や複雑なからみあい、またそこから来る悩み
倒錯＝とうさく→正常とは逆、反道徳。アブノーマル
無常＝むじょう→永遠不変なものはなく、すべてのものが変化する　　cf「無情」はおもいやりがないこと
形而上＝けいじじょう→メタフィジックス・形を超えた目に見えない本質・形而上学は哲学とほぼ同義語
形而下＝けいじか→フィジックス・形あるもの・物理学の領域
官能＝かんのう→性的感覚を刺激する

復習問題　第二十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）伝統的な文化やシュウゾクを研究
①族　②属　③俗　④続　⑤賊

（イ）日本のコユウの音楽文化を創造
①個　②固　③古　④児　⑤小

（ウ）人工的な表現をチンチョウする
①珍　②陳　③賃　④鎮　⑤朕

（エ）西洋音楽のシュウエンにある
①遠　②焉　③園　④縁　⑤宴

（オ）日本的な律動やオンカイを表現
①界　②階　③改　④快　⑤解

（カ）世界のゼンソウをそこに映す
①層　②装　③総　④想　⑤相

（キ）心のカットウを伝える
①藤　②頭　③問　④当　⑤唐

（ク）トウサク的な美意識の表現
①盗　②等　③倒　④投　⑤党

（ケ）舞台の上で役にフンする
①分　②粉　③墳　④扮　⑤奮

（コ）大地や風のシンドウを感じる
①新　②振　③震　④深　⑤芯

第二十一講　歴史論その2

太古から現在に至るあらゆる出来事をくまなく記録し、能う(あた)限り正確に記述することは、歴史学者の夢であろう。その夢をA・ダントは「理想的年代記作者」と呼んでいる。すなわち、すべての歴史的出来事を、それが起こった瞬間にありのままに描写する能力を備えた超人的な歴史学者のことである。しかし、たとえそのようなことが可能だとしても、彼が作成する「年代記」は脈絡を欠いた膨大な歴史年表のようなものであり、それは歴史叙述の基礎資料とはなりえても、「歴史叙述」とはなりえない。なぜなら、そこには出来事と出来事とをつなぐ脈絡、すなわち「物語」が欠落しているからである。このような歴史学者のことを、小林秀雄は「一種の動物に止まる」と喝破(かっぱ)した。今さら引用するのも気が引けるほどA人口に膾炙(かいしゃ)した文章だが、ここはやはり『無常といふ事』の一節に登場してもらわねばならない。

　思ひ出が、僕等を一種の動物である事から救ふのだ。記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしているので、心を虚しくして思ひ出す事が出来ないからではあるまいか。（中略）上手に思ひ出す事は非常に難かしい。だが、それが、過去から未来に向かつて飴の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想（僕にはそれは現代に於ける最大の妄想と思はれるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方の様に思へる。

ここに見られる「記憶」と「思い出」との対比は、「理想的年代記」と「歴史叙述」との区別を際立たせてくれる。記憶をあらゆる歴史的出来事が細大漏らさず貯蔵された巨大な水甕(みずがめ)だとすれば、思い出とは、その水甕のわずかな割れ目から滲み出した一筋の水滴にでもなぞらえることができる。その水滴はB朝(あさ)まだきの光に照り輝くこともあれば、夜の冷気に氷結することもあるであろう。小林秀雄は一滴の水が乾いた舌にしたたり落ちるその瞬間を捉えて、それを「歴史」と呼んだのである。それゆえ、思い出は過去の出来事のありのままの再現ではない。それは①経験の遠近法によるろ過と選別とを通じて一種の「解釈学的変形」

を被った出来事である。強烈な印象を刻みつけた出来事はクローズアップで大写しにされ、さほど印象に残らない些末な出来事は遠景に退いてフェイドアウトすることであろう。そこにはおのずからなる想起の力学が働いているのである。

しかし、小林の思い入れに反して、「思い出」はそのままでは「歴史」に転成することはできない。思い出されただけで、それが再び記憶の闇の中に消え入るならば、思い出は甘美な個人的感懐ではあっても、間主観的(注)な歴史ではない。②思い出が歴史に転生を遂げるためには、何よりも「物語行為」による媒介が不可欠なのである。思い出は断片的であり、間欠的であり、そこには統一的な筋もなければ有機的連関を組織する脈絡も欠けている。それらの断片を織り合わせ、因果の糸を張りめぐらし、起承転結の結構をしつらえることによって一枚の布にCあえかな文様を浮かび上がらせることこそ、物語行為の役目にほかならない。物語られることによってはじめて、断片的な思い出は「構造化」され、また個人的な思い出は「共同化」される。「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立条件なのである。それゆえ、歴史的事実は、ありのままの「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された「解釈学的事実」と呼ばれねばならない。

（野家啓一『物語の哲学』による）

（注）間主観的――個人の主観を超えて、多数の人間の主観に共通して存在するさまを指す語。共同主観的とも言う。

問１　傍線部Ａ～Ｃの語句の意味を簡潔に説明せよ。

問２　傍線部①とあるが、それはどういうことか、わかりやすく説明せよ。（七十字程度）

問３　傍線部②とあるが、「思い出」が「歴史」に転生するためには、「物語行為」はどのような働きをするのか、わかりやすく説明せよ。（五十字程度）

第二十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●小林秀雄（こばやし　ひでお　一九〇二〜一九八三年）文芸批評家
代表作品『様々なる意匠（いしょう）』『無常（むじょう）といふ事』『モオツアルト』『本居宣長』

語句

保証＝ほしょう→正しさや成功を裏付ける／保障→安全を約束する／補償→損害をあとから埋め合わせる
間主観性＝かんしゅかんせい→多くの人の納得を得る＝相互妥当性
喝破＝かっぱ→大声で相手を言い負かす・誤りを退け、真実を解き明かすこと
感懐＝かんかい→心に抱く想い
　cf ノスタルジー→故郷を懐かしむこと、郷愁
　cf レトロ（フランス語）→懐古的・懐古趣味・昔の様式を好むこと

復習問題　第二十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）出来事をくまなくキロクする　①禄　②碌　③録　④縁　⑤緑

（イ）理想的なネンダイキ作者　①紀　②記　③期　④樹　⑤着

（ウ）歴史を正確にジョジュツする　①叙　②序　③徐　④如　⑤所

（エ）出来事がサイダイ漏らさず記される　①最　②再　③細　④採　⑤彩

（オ）夜の冷気にヒョウケツする　①潔　②傑　③桔　④決　⑤結

（カ）サマツな出来事は遠景に退く　①差　②査　③佐　④些　⑤詐

（キ）歴史は個人的なカンカイではない　①快　②懐　③解　④回　⑤戒

（ク）重要な事実をユウベンに語る　①雄　②勇　③裕　④優　⑤誘

（ケ）断片的でカンケツ的な思い出　①潔　②穴　③血　④結　⑤欠

（コ）正しさが考古学資料によってホショウされる　①証　②償　③障　④哨　⑤賞

第二十二講　小説その５　大能力と小能力

次の文章は、司馬遼太郎の歴史小説『項羽と劉邦』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、この文章の前には、劉邦の功将韓信が謀叛の罪に問われ刑殺された事件が述べられている。

韓信が刑殺されるとき、劉邦は（注）鉅鹿の太守の謀叛を討伐に行って不在だったが、帰ってきてこの天才の死を知り、おどろきあわれみ、

――死にのぞんで韓信はなにか言わなかったか。

と、問うた。劉邦には、うしろめたさがあった。韓信ほどの男が、あの乱世のなかでまがりなりにも劉邦に忠信をつくしてきたことは、この時代の人間現象としては奇跡にちかく、そのことはたれよりも劉邦自身がつよく感じていた。

が、刑吏が韓信の死の直前のことばを告げたとき、劉邦はとびあがって怒った。というよりも韓信に対してはじめて公然と怒りうる自由を得た。

――あいつは、早くから（注）叛心を抱いていたのか。

劉邦は、うしろめたさから解放された。

「蒯通という名がでたな」

かれはすぐさまその追捕を命じた。やがて小ぶとりの蒯通が縛られて都に曳かれてくると、劉邦自身が尋問した。

「おのれが、韓信に謀叛をすすめたのか」

と問うたとき、蒯通は劉邦の顔をなめるように観察してから、そうです、とうなずき、A さらに声を大きくして、

「私が教えたのです」

と、くりかえした。蒯通は覚悟していた。弁士が戦士よりもはるかに危険な世渡りであることをかれは知っていたし、すでにその当然の運命が眼前にある以上、せめて自分の名をひとびとの記憶にのこしておきたかった。

「しかしながら、かの(注)豎子(じゅし)」
韓信を小僧よばわりし、地につばを吐いた。
「わしの策を用いなかった」
「なぜだ」
劉邦は、問う。
「韓信は、一個の小僧」
「小僧はわかった」
「その小僧の内部(なか)に不世出の軍才が宿ってしまった。雀(すずめ)の体に天山を征(ゆ)く鷲(わし)のつばさがついたようなものです」
劉邦はかつて韓信が最初の謀叛の容疑でかれの前にひきだされてきたときのことを思いだした。
あのとき劉邦は韓信をいたわってさまざまの問答をした。話題がたまたま軍才のはなしになった。かつて死んだ将たちや、生きて栄爵を得ている将たちの能不(のうふ)（有能、無能）を双方が採点して、やがて劉邦が、

　このわしはどうだろう。

と、韓信にきいた。韓信は一笑して、

　陛下はせいぜい十万人程度の将でしょう。それ以上の兵力だと、とてもむりです。

といった。劉邦はそうかと思い、しかしうれしくなく、奇妙な気持ちをごまかすように両手で顔を何度もこすった。やがて手をおろして韓信に、ではお前はどうだ、ときいた。韓信は平然と、

　多多(たた)益(ますます)善(よ)キノミ（兵力が多ければ多いほどよい）。

といった。劉邦はもっともだと思いつつも、それほどの韓信が、劉邦の前に擒(とりこ)としてひきだされているのが滑稽(こっけい)で、ふしぎでもあった。百万、千万の将であるお前がなぜわしの前に曳きだされているのか、ときくと、韓信はいった。

陛下は兵に将たる能力はおありではありません。しかし将に将たる能力がおありだから私がかような姿で陛下の前にひきだされているのです。陛下の場合、天授であって、人力ではございません。

このことばは、韓信がくやしまぎれに（B）劉邦の才能――というよりも人間そのもの――の奇妙さをことさらに表現したもので、本心から出たものであるかどうかはわからない。本心はただ陛下は御運がよかっただけです、とでも言いたかったのではないか。

劉邦は往時をおもい、眼前の蒯通を見ている。蒯通は韓信をはげしくののしって、

「あの小僧は、陛下に対して忠信すぎたのだ。わしの策を用いなかった理由はただそれだけだ。かれは自分のつばさの飛翔力（ひしょうりょく）が、もはや雀の忠信を必要としていないことを知らなかったのだ。私は（C）それを説いた。なぜ鷲であることをおもわないのか、と。なぜ陛下へのくだらぬ忠信をもちつづけるのか、と」

（あの当時、韓信はわしを裏切るに忍びなかったのか）

劉邦の心に韓信への愛のようなものがよみがえってきた。

「もし漢（かん）の帝国ができたところで、椋鳥（むくどり）や鵯（ひよどり）のむれのなかに鷲がまじれるか。鷲はかならず中傷されて殺されるだろう」

「おまえ、そう言ったのか」

劉邦も椋鳥や鵯のなかまになるではないか。

「いや、わしが思っているだけのことだ。しかしあの小僧の胴は雀であったためにわしの策をついに用いず、わしも後難をおそれ、(注)佯狂（ようきょう）して逃げてしまった。もしあのときあの策を用いていれば……陛下」

と、蒯通が弁士らしく威儀をただし、言葉もあらため、あなたもまたここにいま在（おわ）しませぬぞ、といったときは劉邦もさすがに腹が立ち、

「要するにお前は人のいい韓信に悪智恵（わるぢえ）をつけ、わしにそむかせようとしたのだ。おまえの反逆、まぎれもない」

と、いった。蒯通は、ちがう、といった。

「烹殺（にころ）せ」

と、劉邦は大声で刑吏に命じた。刑吏たちはすばやく裏庭へ走った。大きな青銅の釜（かま）を前庭へもち出すためであった。

蒯通は狂ったように、

「この舌の動くところを聴け」

と、叫び、烹よ、どのようにも烹よ、ただ陛下がこのわしを理に適わぬことで烹ようとしていることだけはこの世で弁じておかねばならぬ、といった。

「陛下。秦末、諸豪がむらがりおこってたれもが天下を望んだ。陛下もまたそのひとりでござった。いま陛下はさいわいに天下を獲られたが、このときにあたり、かつて天下を望んだ諸豪のすべてを反逆の罪によってこの釜にほうりこもうとなさるか」

「せぬ」

劉邦はこたえた。この無邪気とも正直ともつかぬ人の好さがこの男の身上であった。

「この蒯通は兵もなく武もなかったが、武を持つ韓信に天下をとらせようと思い、八方画策した」

「おまえもまた群雄のひとりだったというのか」

劉邦は、小柄な蒯通のみじかい手足をみて、愛嬌を感じた。

「おまえは何人の兵をもっていたか」

「舌がある」

舌はときに剣よりもつよい、と蒯通はいった。劉邦ははじめて声をたてて笑った。蒯通の警句に感心したわけではなく、手足、くびに枷をはめられて身動きもできないこの小男が、ただ舌だけを動かし、ときに顔から突きだして見せ、ひっこめては喋り、まことにせわしない様子がおかしかったのである。

「まだ喋ることがあるか」

「烹られるまで喋るだろう。陛下は盗跖をご存じか」

「古の大盗だ」

「盗跖にも飼い犬がいた。それが堯（古の聖王）にむかって吠えた。その犬をもって不仁であるとし、反逆であるとされるか。犬はすべて飼いぬし以外の者には吠えるのだ」

「おまえは、盗跖の犬か」

「小僧の犬だ」

蒯通がいったとき、劉邦は一笑して刑吏に蒯通の枷をはずさせ、郷里まで帰る旅費もくれてやるように命じた。

蒯通は、庁舎を出た。門前に（注）喃（なん）が待っていた。

D「死んだほうがましだった」

地に洟（はなみず）を投げすて、天下を動かすために弁論を学んだのに、たかがおのれの命をすくうために役立っただけだ、とつぶやいた。

（注）〇鉅鹿の太守――現在の中国河北省南部にあたる地域を治めた長官。
〇叛心――謀叛を起こそうという考え。
〇豎子――青二才の意。人を軽蔑していうことば。
〇佯狂――いつわって狂気を装うこと。
〇喃――蒯通が使っていた召し使いの少女。

問１　傍線部Ａ「さらに声を大きくして、……と、くりかえした。」には、蒯通のどのような意図があるか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

① 事件の張本人は自分だということを示し、韓信の名誉を守ろうとしている。
② すでに死が明らかな状況ではあるが、ひとまず相手をけん制しておこうとしている。
③ 自分の生死を左右する力をもつ劉邦に対して精いっぱいの釈明をしようとしている。
④ 韓信が本当に信じ、頼りにしていたのは自分であることを訴えようとしている。
⑤ 韓信に天下をとらせようという計略は自分の発想であることを印象づけようとしている。

問２　傍線部Ｂ「劉邦の才能――というよりも人間そのもの――の奇妙さ」とあるが、ここでいう「奇妙さ」とはどのようなことを指して言うのか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　劉邦は、兵隊を指揮する能力はあまり高くないが、その兵隊たちを動かす韓信などの優秀な将軍を指揮する能力や魅力が自然と備わっていたのは奇妙であった。
②　劉邦は、戦士としては優れてはいなかったが、将軍としては将軍にふさわしい能力をもっており、人間の及ばない、もって生まれた奇妙さがあった。
③　劉邦は、兵隊を指揮する能力はなかったが、将軍としての能力は彼より高かった韓信を知らぬまに虜（とりこ）としてしまうほど、不思議な才覚があった。
④　劉邦は、一兵卒から見て将軍としての魅力はなかったが、将軍としては将軍の中の将軍と言えるほどの能力を天から授かっていたというのは、不思議なことである。
⑤　劉邦は、兵隊を指揮する能力は高くなかったのに、将軍たちに君臨できたのは、人間という存在に天が悪戯（いたずら）したとしか思えないほど奇妙なことである。

問３　傍線部Ｃ「それ」の内容を具体的に説明したものとして最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　韓信がささいな忠信の気持ちを持ち続けることは、天下を取った劉邦にとって、もはや煩わしいだけだということ。
②　韓信が真に忠信の人であるためには、蒯通の策をうけいれ、より高い視点からものを見ようとすべきだということ。
③　真の忠信を尽くしたければ、韓信は劉邦につまらぬ気づかいをせず、自分の信念を迷わず実行すべきだということ。
④　韓信ほどの実力があれば、劉邦の臣下であることに甘んじることなく、自らが天下をねらえばよいということ。
⑤　韓信ほどの実力者であれば、天授に頼る劉邦の軍略など恐れる必要はないということ。

問４　傍線部Ｄ「『死んだほうがましだった』……つぶやいた。」の部分には、蒯通のどのような思いが表れているか。その内容として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　天下をねらった韓信が挫折（ざせつ）して殺された以上、おめおめ生きのびた自分が恥ずかしく、自分もともに潔く殺されてしまいたかった。

②　人のよい劉邦をあざむいて反逆しようとしたことが今では後悔され、また保身のためさらに詭弁（きべん）を用いた自分があさましい。

③　弁論で天下を動かすつもりの自分だったのに、その弁舌が結果として劉邦を翻意させる程度のものでしかなかったことが情けない。

④　弁舌で天下を動かすつもりで弁士として生きてきたのに、弁論は結局権力者の武力に勝てない無力なものであったことが悔しい。

⑤　幸いにして命だけは助かったが、もはや自分の弁舌を売り込む相手もなく、郷里にひきこもって生きることに何の希望ももてない。

第二十二講　知識モノ解説

文学史

●司馬遼太郎（しば　りょうたろう　一九二三〜一九九六年）歴史小説家
代表作品『坂の上の雲』『竜馬がゆく』『街道をゆく』

語句

不世出＝ふせいしゅつ→めったにないほどすぐれた
後難＝こうなん→あとになって降りかかってくる災難
八方＝はっぽう→あらゆる方向
cf 八方塞がり＝はっぽうふさがり→どの方向にも支障があり、手詰まり
八方美人＝はっぽうびじん→どこから見ても美人／みんなに如才（じょさい）なくいい顔をする
画策＝かくさく→実現をめざしてあれこれ計画をすること
詭弁＝きべん→こじつけの議論・相手をあざむいたりごまかす議論
翻意＝ほんい→考えを変える

復習問題　第二十二講

問１　次の語句の意味として最も適当なものを、次の各群のうちからそれぞれ一ずつ選べ。

（ア）不世出の

①　めったに現れることのないほどの、優れた
②　少しの人にしか知られていない、一風変わった
③　めったに世の人の目に触れない、不思議な
④　口にだして言うこともできないほどの、不気味な
⑤　まだ世間に出ていないが、将来性のある

（イ）後難をおそれ

①　後々まで長く自分への非難が続くことを気にして
②　あとから非難が起こらないように気をつかって
③　後になるほど事態の解決が難しくなるのを心配して
④　後になってふりかかってきそうな災いを心配して
⑤　後になるほど災いが起こりやすいのを気にして

（ウ）八方画策した

①　あらゆる方面に出向いて、自分の立てた計画を話した
②　あらゆる方面にはたらきかけて、計画の実現をはかった
③　あらゆる方面から情報を集め、さまざまな計画を立案した
④　いろいろな計画をねりあげて、いちばんよいのを実行した
⑤　いろいろな計画を人々から提出させ、どれがよいかを討議した

第二十三講　日本語論・翻訳語論

私たちの今日の日本語には、大きく分けると、三つの異質な源をもったことばが存在している。それらは混在しているのだが、それぞれの体系を意外にはっきりと守っているので、三つのことばの層がある、とでも言うのが適当だろう。第一は、伝統的な大和ことばの層。第二は、中国渡来のことばの層。そしてもう一つは、ヨーロッパ語からの翻訳語、外来語の層である。たとえば、似たような意味のことばをとり出して言うと、「よのなか」ということばは第一の層に属し、「世間」は第二の層、「社会」は第三の層に属している。

三つの層は、はっきりした区別をもちながら日本語の中にまじり合っているが、特にこの第三の層は、ふつう考えられている以上に、際立って異質な日本語なのだ、と私は思う。A私のよくやる方法なのだが、家庭内でお年寄りが抵抗なしに受けとめられることばかどうか、と考えてみる。「よのなか」や「世間」はよいが、「社会」は、まったく抵抗なしに受けとめられる、とは言えないだろう。

およそ、ことばの意味は、孤立した一つのことばとして考えるのではなく、そのことばが使われる文脈の中で生きている意味がとらえられなければならない。そのように考えてみると、「社会」ということばは、多数の日本人の日常語の中では、なじみのうすい、意味の乏しいことばなのだ、と言わざるを得ない。

このことは、明治維新以降、短期間のうちに、異質な文明のことばを大量に受け入れたとき、それまでの日常語とは切り離されたところに翻訳語、外来語の層を造り出したということなのである。そして、学術思想用語の多くをこの翻訳語に負っているため、いわば考えるときのことばと、生活のことばが分離してしまったのである。

しかし見方を変えると、まさにこのことが異質な文明の大量のことばを、しかも短期間に受け入れ消化することを可能にしたのである。

考えてみると、私たちの「翻訳語」とは、ずいぶん［X］なことばである。その翻訳語自体の意味は、よく考えてみると乏しいことが多い。しかし、それ自体に意味が乏しいからこそ、どんな異質な原語にも対応できる。その対置された原語のもつ意味

が、意味とされるのである。たとえばsocietyを「社会」と置きかえる。「社会」ということばは、もともとsocietyの翻訳用に造られたことばである。「社」や「会」は漢字であり、漢字の熟語としても「社会」ということばはないわけではない。しかし、今日の日本語における「社会」は、漢字の意味の表現による第二の層のことばではない。「社会」という文字を見て、「社」や「会」の文字の意味から「社会」の意味を考えても無駄である。「社会」の意味は、もっぱらsocietyにかかっている。「社会」は、societyとまったく意味が一致することばである、とふつうには考えられている。

しかし、Bそれは、日本人の一大発明であった。明治の初め、圧倒的に優越したヨーロッパ文明に直面したとき、私たちの先人たちは、先進文明のことばをヨーロッパ語の形そのままで呑みこんでしまわずに、何とか日本語の形に変えて受けとめようとした。ことばの変革の歴史としては、非常に短い間に試みられ、そして明治十年代には、今日のような翻訳の形、つまりここで言う第三の層のことば造りは、ほぼできあがっていった。このことば造りは、当時の日本語が、もともと異国語の素姓の第二の層のことばを、母国語である第一の層のことばに混在させていた、という歴史的事情の支えをかりていた。一口に言えば、和漢混交文という形の利用ないし応用である。私たちの翻訳語は、ここで言う第二の層のことばを利用し、しかも変質させ、もう一つの別のことばの層を造りだしていったのである。

問１　傍線Aの部分の「方法」の対象は、なぜ「家庭内のお年寄り」であることが必要なのか。その理由として最も適当なものを次から選び、答えよ。

①　家庭内のお年寄りはよく考えてから話をするため、考えるときのことば、つまり思考のことばを判断するのに適当であるから。

②　意味の乏しいことばは若者には理解されにくいため、お年寄りの家庭内の経験によって判断してもらうことが必要であるから。

③　ことばの意味は孤立した一つのことばとして考えられるのではなく、そのことばが使われる文脈の中でとらえられなければならないことを家庭内のお年寄りはよく知っているから。

④　家庭内のお年寄りによって理解されるのが日常生活語であるのに対し、理解されにくいのが学術・思想のことばであるから。
⑤　際立って異質な日本語であるかどうかは、昔ことばを熟知しているお年寄りの知恵によって、はじめて明らかになることだから。

問２　空欄 X にはどんな語が入るか。次の片仮名の語の中から最も適当なものを選び、正確な漢字で書け。
ケッコウ　　キミョウ　　ナンカイ　　コウド　　ケイハク

問３　傍線部Bの「一大発明」の内容として最も適当なものを、次から選び、答えよ。
①　「社」と「会」という文字を使って「社会」という新しいことばを造りだしたように、考えるための意味の乏しいことばを大量に造りだしたこと。
②　外国語を音をかえずにそのまま片仮名表記の語にすることによって、大量の異文化の言語を容易に自分のことばとして取り入れたこと。
③　既成のことばを利用しつつ、意味の異なる新しいことばを造りだすことによって、非常に短期間に異文化の大量のことばを受け入れたこと。
④　漢字から平仮名・片仮名を造りだしたように、翻訳語・外来語においても、異質な文明のことばを巧妙に変質させることによって、新しい日本語を発達させたこと。
⑤　大和ことばとしての第一の層、中国渡来の第二の層に加えて、外来語としての第三の層を二千年の歴史の中で区別し使い分ける方法を発見したこと。

問４　福沢諭吉（一八三四〜一九〇一）は、自分の翻訳法について次のように述べている。問題文で述べられている第一の層から第三の層にいたる翻訳語の歴史的事実と比較すると、福沢の翻訳に対する考え方は重要な点で異なっている。その福沢の判

断を端的に表す文はどこか。最も適当な一文を福沢の文中より抜き出し、その最初と最後の三文字を書け。

友人が書中の一原字を指点し、「時に此字を何と訳して穏（おだやか）ならん。あてはめると云ふ字であるが、さて訳語には困る。君は是れまで毎度訳したることもあらんが、こんな字に出逢うたときは何とするや。」との相談に、余は大に笑ひ、「君は今訳語に困ると口に言ひながら其口は既に適当なる語を吐て原字を訳出したるに非ずや。あてはめるとは誠に穏なる日本語にして申分なき訳字なり。僕なれば直に此日本語を以て原字を訳する積りなり。全体君等が西洋の原書を翻訳するに四角張った文字ばかり用ふるは何の為めなるや。」

問５　問題文に取り上げられている時代は、日本語にとって大きな変革の時代であった。この時代背景の説明として最も適当な文を次から選べ。

①　政治とともに文化の大きな転換期であった明治維新を境に、日本語は大きく変化した。翻訳口語が氾濫し、話しことばと書きことばが分裂の方向に進み、さらに江戸語から東京語への推移の中で、方言の地位が次第に確立していった。

②　外国との交流によって翻訳語・外来語の移入を盛んにし、演説の流行によって話しことばと書きことばが接近した。人々はとくに宗教・学問・技術などの専門語として翻訳語・外来語を用いるようになる。それはやがて言文一致運動のもととなった。

③　異質な文明の流入によって学問・思想など新しい分野のことばには専門語として翻訳語・外来語が用いられる一方で、庶民の間では伝統的な和語が多用された。このことは思考のことばと生活のことばが分離したままインテリと庶民とは異なることばのまま今日に至ったことと無縁ではない。

④　ことばの変革の歴史としては、伝統的な大和ことばに中国語からの借用である漢語を混在させ、格段に造語力のある和漢混交文を造りだしたことが、日本語の新鮮なエネルギーとなった。それによって近代日本語は、新しい側面を迎えた。

⑤　西洋文化の流入に当たっては漢語が大きな比重を占めることになった。それが従来の語に新しい意味を加えたり、語感をかえたりした場合のあったことも見逃せないが、これ以後、次第に定着した翻訳語はやがて一般の漢語と紛れ、現在ではほとんど区別がつかなくなった。

第二十三講　知識モノ解説

文学史

●柳父　章（やなぶ　あきら　一九二八年〜）今回の筆者・翻訳語研究者『翻訳文化を考える』

語句

体系＝たいけい→ある秩序や基準によるまとまり・システム

逆説＝ぎゃくせつ→表面的、一般的理解とは反対のところに真理や真実がある・パラドックス

復習問題　第二十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）心理的なテイコウなしに受け止める　①挺　②抵　③低　④体　⑤底

（イ）アットウ的に優越した力　①踏　②到　③倒　④等　⑤討

（ウ）西欧語のゲンゴに対応したことば　①源　②原　③元　④現　⑤厳

（エ）スジョウの知れない人物　①姓　②情　③場　④状　⑤常

（オ）和漢コンコウ文で書かれた表現　①公　②考　③稿　④交　⑤講

（カ）ことばのヘンカクの歴史をたどる　①覚　②画　③核　④革　⑤角

（キ）明治イシン以降の時代　①緯　②威　③偉　④移　⑤維

（ク）日本語の三つのタイケイを区別する　①体　②帯　③隊　④大　⑤耐

（ケ）これは中国トライのことばである　①都　②途　③徒　④渡　⑤登

（コ）考えてもムダなものもある　①堕　②唾　③駄　④妥　⑤蛇

第二十四講　情報化社会論その2

戦後六十年の間、日本人は常にマンガやアニメ、キャラクターとともに生きてきた。そして、それらとの間に強い精神的絆（きずな）を結んでもきた。そういった長い時間の中で、いつのまにか、ぼくら日本人は「生身の現実」「生身の人間」に負けないくらい「マンガやアニメで描かれた現実」あるいは、そこに登場する「キャラクター」にリアリティや親近感を感じるようになってきたのである。

人間社会で傷つき、ストレスを抱える多くの子どもたちが、「現実の父親や親友」よりも「仮想現実のキャラクター」のほうにより強い安心感を覚えるという調査データなどは、まさにその好例だと言っていい。

評論家の大塚英志は、作家の新井素子がＳＦ雑誌の新人賞を受賞したときのインタビューで「ルパンみたいな小説を書きたかった」と答えたことに注目し、『キャラクター小説の作り方』の中で、次のように書いている。

> 彼女は別にルパンをノベライズしたわけではありませんが、『ルパン』のアニメが与えてくれる印象を文章で再現しよう、と、その時、どうやら思い立ったようです。それはもう二十年ぐらい前の出来事です。けれどもこの新井素子さんの思いつきは実は日本文学史上、画期的なことだったのです。誰もが現実のような小説を書くことが当たり前だと思っていたのに彼女はアニメのような小説を書こうとしたのです。

新井素子は、おそらく現実の世界よりも『ルパン三世』が持つ仮想現実世界のほうに強いリアリティを感じたのではないだろうか。［Ａ］、それを作品化しようと考えたのだとぼくには思える。受賞から三十年以上が経ち、彼女が作品化しようとしたこの感覚、「生身の現実」ではなく、「アニメやマンガの世界の現実」のほうにリアルを感じるという感覚は、今では多くの日本人たちに共通に「身体化」されつつあるのではないだろうか。ぼくは、今広がりつつある、こういった現実認識の変容を「キャラ化」と呼びたいと思う。

かつて大人たちは、子どもたちがゲームやテレビアニメに熱中しているのを見ると、「現実とヴァーチャル世界の区別のつかない人間になってしまう」と心配した。そして、時に子どもたちが信じがたい、残忍な犯罪を起こすと、「ゲームやアニメの世界で簡単に人が死んでいくのを見てきたから、現実世界でもゲーム感覚で簡単に人を殺すようになった」とマスコミは書きたてた。しかし、当時そういった、いかにも［B］で、ステレオタイプな論調を耳にするたびに、「いくらゲームやアニメ漬けの生活をしていたとしても、実際に現実とヴァーチャルの区別がつかなくなり、シューティングゲームで敵を殺すように、簡単に生身の人間を殺してしまうなんてことは、まずあり得ない」と、多くの人は思っていたはずだ。

そういった論調は実際、言っている側も、子どもたちの射幸心を煽（あお）ろうとするアニメやゲーム業界に対する批判といった色合いが強く、本当のところ、どこまで信じていたのかも怪しい気がする。

それほどに、かつて「現実世界」というものは確固たるものと信じられていた。しかし、どうやらそうではないらしいことが、しだいに明らかになりつつある。

日本人は、戦後一貫して、アニメ、ゲーム、キャラクターに囲まれる生活をしてきた。そして、キャラクターとの間にもはや抜き差しならないほど強い精神的な絆を結んでいる。その中で、(ア)「キャラ化」の感覚は常に、ぼくらと寄り添い、身体化し続けているのだ。キャラクターだけでなく、高度情報化の包囲網もぼくらから「現実世界」との接触を奪いつつある。

一九九〇年代以降のインターネット、携帯電話の急速な普及は、高度情報化社会を一気に生活レベルにまで浸透させた。今では、多くのビジネスマンは日々パソコンの前で生活し、他の多くの人たちも携帯電話から目が離せない生活を送っている。実際、電車に乗ると、半数以上の人が携帯電話の画面を覗き込み、メールかゲームに興じている。これは、もはや当たり前になってしまった日常風景なのだが、少し引いて見てみると、ある種異様な光景でもある。彼らは、本当に「現実世界」を生きているのだろうか。かりそめの身体はそこにあったとしても、意識そのものはすでに仮想現実社会で暮らしているのではないのか。そう感じてしまうのは、ぼくだけではないような気がする。

また、こういった情報化社会の中で、ぼくらは現実世界のほとんどに「情報」あるいは「データ」として接触するようになった。現実世界は何者かによって恣意的に編集され、集約され、それをぼくらも恣意的に選択する。言うまでもなく、ぼくらの現実認識は情報によってしかなされなくなってしまったのだ。ぼくらが「現実」だと思いこんでいるものの多くも、実際のところ

本当にそうかどうかは怪しくなっているのである。

日常的なコミュニケーションの多くも、今では対面ではなく、メールや電話で行うことが当たり前になっている。実際には一度も会うことなく、メールだけでことが済んでしまう相手だってめずらしくなくなってきている。いや C 、メール中心の、仮想現実的なコミュニケーションに慣れてしまうと、実際に対面して行うコミュニケーションが億劫（おっくう）になったり、不快になったりするといった経験をした人も少なくないはずだ。

メールが中心となるコミュニケーションの相手は、もちろん現実の存在ではなく、情報としての対象である。つまり、おもしろいことに、ぼくらは現実の存在（対面する相手）よりも情報としての対象（メールでの相手）のほうに親近感を持ったり、愛着を覚えたりしているということなのだ。

九・一一の事件が起きたとき、テレビのキャスターは「これは現実です」と叫んだが、テレビモニターを通じてしかあの事件に接することのできなかったぼくらにとって、九・一一はもはや「生身の現実」ではなく、情報の断片としての「仮想現実」でしかなかったのだ。

ぼくらは日々の生活の中で、情報化された現実世界と向き合っている。テレビやパソコンのモニターを通じて事件や事故が起き、携帯やパソコンを通じて情報としての友達とコミュニケーションを取る。これが、至極当たり前の現代人の生活なのだ。

多くの日本人たちに、こういった現実との乖離（かいり）、現実に対する D 、仮想現実を現実と感じる感覚が広がっていたとしても、それはむしろ当然と言わざるを得ないのかも知れない。情報化社会の進展とは多かれ少なかれ、そういった感覚を準備するものなのだ。そして、ぼくらが日々仮想現実空間で生きているのだとすれば、ぼくらの存在は、否応なく「キャラ」でしかあり得ないはずなのである。

なぜなら、インターネット社会とはそもそも「キャラ化社会」だからだ。

アバターはもちろんだが、アバターを使わなくても、ブログやチャット、掲示板やメールなどインターネット上のコミュニケーションに関わるとき、そこにあるのは「現実の私」とは別の人格、 E 「仮想現実空間上の私＝キャラとしての私」なのである。ネットや携帯電話でブログやメールを書くとき、そこにいる「私」は「現実の私」とは否応なく別のものにならざるを得ず、まさにパソコンや携帯電話上にだけ存在する「キャラとしての私」なのである。ミクシィなどのＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーク・サービス）（社会的ネッ

トワークをインターネット上で展開していくサービス）や通常のメール、情報収集、通販、オークションなど、ぼくらは日常生活の多くの時間をネット＝仮想空間上で過ごしている。

たとえば、一日中ミクシィでマイミクたちとのやりとりを繰り返していれば、そこにいる「私」はおのずと「キャラとしての私」としてのみ存在することになる。パソコンの前にいる「私＝アイデンティティ」は、やがてパソコンの中にいる「私＝キャラ」へと飲み込まれていくのである。その生活が長く続けば、二つの「私」のヒエラルキーは逆転し、やがて「現実に存在する私」よりも「キャラとしての私」のほうに親近感を覚え、それにアイデンティティさえ感じるようになったとしても不思議ではない。ＳＮＳやブログ上での自らのアバターへの愛情の深さや感情移入は、そういったことの表れだと言ってもいいのである。

かつて牧歌的に語られた現実と仮想現実の倒錯、そして「私のキャラ化」が、気がつくと、今では既に日常化してしまっていたのである。そして、それは、常軌を逸した犯罪やそれを準備する病理といった、極めて特殊な形で突出するのではなく、むしろ、(イ)<u>仮想現実への親和性</u>という形で、ごくごく日常的な生活の様々な局面、身体そのものの感覚やプライベートなコミュニケーション、さらには政治や経済、教育といった社会のシステムそのもののあり様の中に、少なからぬ影響を与えているのである。それが、「キャラ化するニッポン」の実態なのだ。

（相原博之『キャラ化するニッポン』より）

注　九・一一の事件＝二〇〇一年九月十一日に、ニューヨークの高層ビルに飛行機が突入した事件。
アバター＝インターネットコミュニティで用いられる、自分の分身となるキャラクター、またはそのサービスの名称。
ヒエラルキー＝ピラミッド型の階層組織。

問１　空欄［Ａ］、［Ｃ］、［Ｅ］に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選べ。

①　いわば　②　まして　③　もっとも　④　とするなら　⑤　それなのに
⑥　ときに　⑦　むしろ　⑧　なぜなら　⑨　だからこそ

問２　空欄[B]、[D]に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選べ。

B　①　教訓的　②　感覚的　③　現実的　④　短絡的　⑤　意識的

D　①　危機感　②　嫌悪感　③　不快感　④　失望感　⑤　違和感

問３　傍線㋐の「『キャラ化』の感覚」の説明として、最も適当と思われるものを、次のなかから選べ。

①　現実社会に生きる自分と、仮想現実社会の中のアニメ化した自分との二重人格性を使い分けて生きること。
②　現実社会に生きる人間よりも、仮想現実社会の中のキャラクターの方に親しみやリアリティを感じること。
③　キャラクターを愛する自分とキャラクターとが一心同体となり現実感覚から乖離していく状態を悟ること。
④　アニメのヒーローと強い絆で結ばれる過程で、そのキャラクターからの身体的精神的支配を自覚すること。
⑤　アニメのヒーローが登場人物を守るように、自分も現実の父親や親友達から守られたい気持ちを持つこと。

問４　傍線㋑の「仮想現実への親和性」の具体例として、最も適当と思われるものを、次のなかから選べ。

①　子どもたちが、現実の父親や親友よりもマンガやアニメのなかのキャラクターの方に安心感を覚えること。
②　子どもたちが、現実とヴァーチャル世界との区別がつかなくなってゲーム感覚で重大な犯罪を起こすこと。
③　作家の新井素子が、「アニメやマンガ世界の仮想現実」を「生身の現実」に置き換えて小説化したこと。
④　多くの人々が、対面でのコミュニケーションに不快感をもち、電話やメールを多用するようになったこと。
⑤　多くの人々が、テレビで見た九・一一事件のニュース映像に恐怖を感じて絶望感を抱くようになったこと。

問５　本文の内容に合致するものを、次のなかから二つ選べ。

①　戦後に生まれた日本人は、現実を情報としてしか捉えられずしかも意図的に選別されたデータに依存する傾向にある。
②　戦後に生まれた日本人は、マンガや、アニメやキャラクターたちと精神的な絆を結ぶことで心に負った傷を癒してきた。
③　戦後に生まれた日本人は、コミュニケーションの手段を対面からメールに替え閉ざされた社会を生きるようになった。

④　インターネットの仮想現実社会の中に生き、そうした「私」にアイデンティティさえ感じる人々が増える傾向にある。

⑤　多くの日本人は、マスコミがステレオタイプな論調で多くの事件を報じた結果、仮想現実世界に逃避するようになった。

⑥　多くの日本人は、現実世界が確固たるものとして信じられた時代に、多くの事件はヴァーチャル世界で起きると考えた。

⑦　多くの日本人は、高度情報化の包囲網が生活レベルにまで及んだ結果、現実社会での対人関係の構築が容易になった。

第二十四講　知識モノ解説

語句

ステレオタイプ（ステロタイプ）→紋切型・判で押したような定型

射幸心＝しゃこうしん→賭け事のような偶然的成功を当てにする感情

恣意＝しい→ほしいままに・好きなように　類義語　随意＝ずいい　任意＝にんい

常軌を逸した＝じょうきをいっした→常道、常識から外れた

ヒエラルキー（ヒエラルヒー／ハイアラーキー）→上下関係・ピラミッド型階層差

復習問題　第二十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）ザンニンな犯罪を起こす　①任　②認　③仁　④忍　⑤人
（イ）シャコウ心を煽るゲーム　①公　②幸　③交　④高　⑤講
（ウ）ゲームギョウカイへの批判　①会　②階　③快　④界　⑤戒
（エ）高度情報化のホウイ網の中　①方　②砲　③胞　④放　⑤包
（オ）戦後のイッカンした流れ　①完　②貫　③環　④間　⑤巻
（カ）一般の生活にシントウした　①進　②侵　③浸　④深　⑤芯
（キ）何者かにシイ的に加工された　①誌　②思　③史　④志　⑤恣
（ク）出版社のヘンシュウ者　①修　②集　③収　④拾　⑤衆
（ケ）イヤオウなく直面する　①応　②追　③欧　④負　⑤王
（コ）ジョウキを逸した犯行　①基　②規　③気　④機　⑤軌

〈 Memo 〉

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 対比混乱の誤り……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け**失敗の選択肢といってもいい。

2 同一性分断の誤り……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 正しい対比喪失の誤り……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 不当な全称判断……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 不当な限定判断……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**(わいしょう)があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 不当な価値判断（不当な当為判断(とうい)）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「ＡはＢである」としているのに「ＡはＢではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては１～８・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第十三講　弁証法

《本文の対比構造》

主役

創造的な弁証法

＝不調和の調和・不協和音・多義的・非合理の再認識・超論理・撞着語法・警句的真理・立体的・日本文化の固有な論理

主な対比

敵役

十九世紀のヨーロッパ

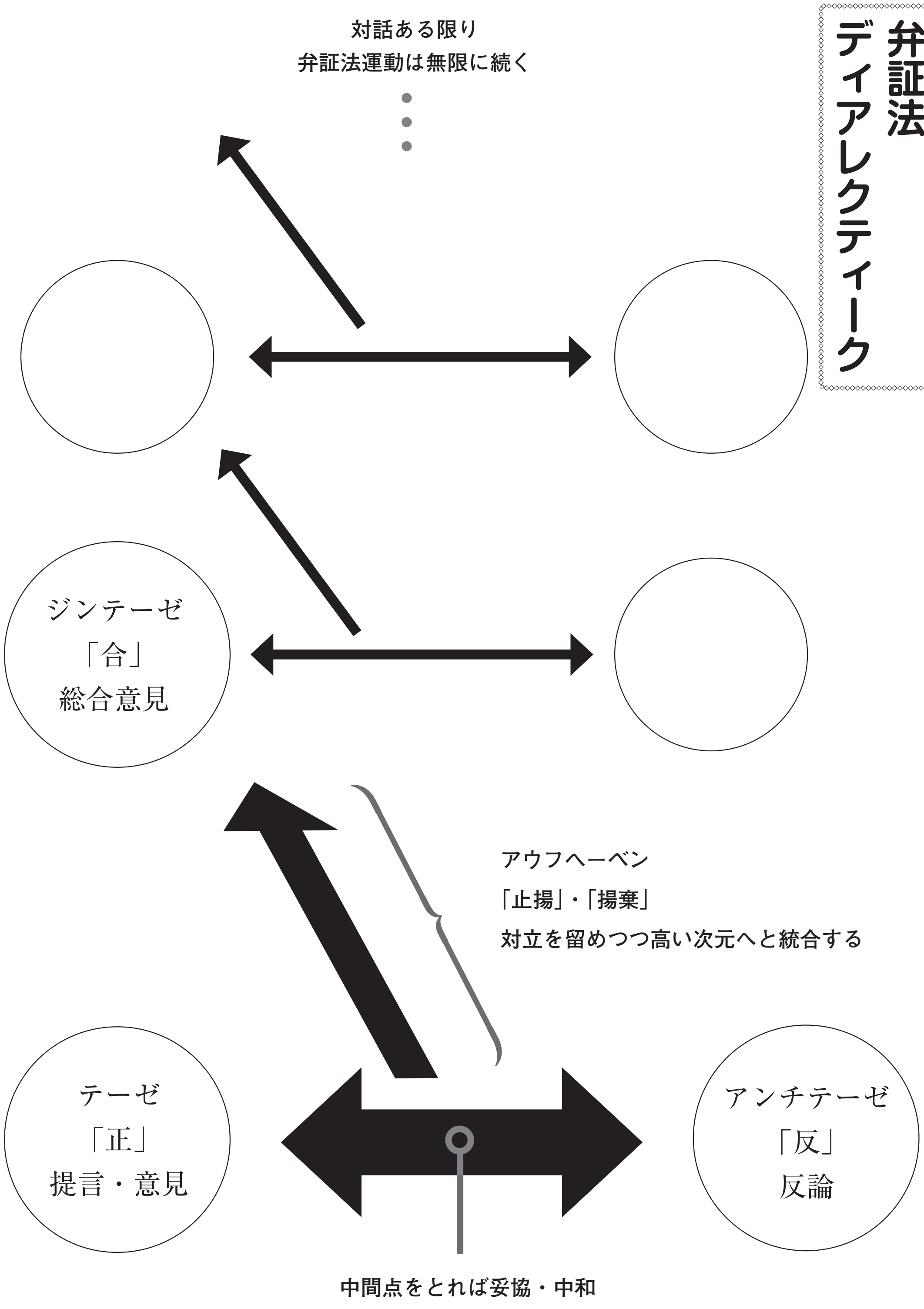
＝論理・科学的思考・ロジック・新しいおもちゃ・一語一義的考え・形式論理・正攻法の論理

小さな対比

脇役

無為の中和・平面的・悪い矛盾・相殺の論理

弁証法（ディアレクティーク）



《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

まず、ＡＢともに筆者側、つまり弁証法の説明になります。したがって悪い矛盾を指す「中和」を含む①②③⑤はすべて対比混乱の誤りです。その上で［Ａ］は「不調和の調和」を弁証法ということばを使って説明するという文脈にありますから「調和」と決まります。また「止揚された［Ｂ］」は次の段落の「この統合された矛盾」で言い換えられていますから、「矛盾」と決まります。したがって④が正解。

問２《空欄補充・選択肢》

矛盾＝撞着を含みながらことわざとして意味があるものは②と④です。①は熱々の料理を食べたやけどの経験から反省して冷たい料理もフーフー冷まして食べるということで、順接です。過剰反応とはいえ、矛盾ではなく正攻法の論理です。③も心配や慎重さのあまりということで矛盾ではありません。⑤も正攻法の論理ですよね。「小は大をかねる」なら矛盾で、ビックリですけど。⑥は「泣きっ面に蜂」「二度あることは三度ある」と同じ、足し算の理屈ですから少しも矛盾を含みません。

問３《空欄補充・選択肢》

ＥＧは悪い矛盾で、第四段落にもあるように「同一平面」にとどまる「無為の中和」です。③の「平面的」が入ります。ＦＨはその正確な対比ですから④の「立体的」が入ります。Ｉは直前の「掛け合わせて」の言い換えですから①「相乗的」と決まります。Ｊはこの段落のまとめであり、また本文全体のまとめにも当たります。最終段落にもあるように「負と負の相乗によってポジティヴ」「たくましい創造」がヒントで②「創造的」と決まります。

問４《誤記の指摘》

本文中の意図的な誤記に気づくには、対比で読むという方法がなにより有効です。第七段落は、撞着語法という矛盾を含んだ独自のおもしろさを語っている箇所ですが、「正攻法の論理の手のとどく警句的真理」では、対比混乱の誤りですね。ここ

を修正するわけです。

問５《主題理解・選択肢》

あえて敵役を挙げなさいという問いです。設問条件自体が、文章を対比にもとづき、主役メッセージと敵役メッセージを分類して読みなさいよと言っているわけです。②③④⑥はすべて筆者側・主役メッセージです。①⑤が敵役のヨーロッパ合理主義の側です。

模範解答

問１＝④　問２＝②④（順不同）　問３　ＥＧ＝③　ＦＨ＝④　Ｉ＝①　Ｊ＝②

問４＝手のとどく→手のとどかない　問５＝①⑤（順不同）

第十四講　文学論・演劇論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝演劇とは、見えるものを通して見えないものを想像させるもの／見えるものの背後にある見えないものを見る力・感知する力

主な対比

敵役

他の演劇関係者＝演劇とは、見えないものを見えるようにするもの

現代社会＝視覚重視の情報社会

《解説》

問１《余計な文を指摘》

早稲田大や中央大でよく出題される形式です。オリジナルの文章に対し入試用の加工を加えているわけで原文筆者に失礼なことおびただしい！　ですが、対比に注目して読むことで、発見できます。つまりこの設問も文章を対比で読みなさいよ、といっているのです。さて、最終段落冒頭にて「見えないものを見させる（筆者側）⟷見えるものだけ優先（敵役側）」の、正しい対比が展開されます。ところが、突然「社会の未成熟」という言葉が登場します。本文は「社会の未成熟⟷社会の成熟」という対比ではないはず。つまり正しい対比喪失の誤りを犯しているこの文を指摘します。

問２《空欄補充・選択肢》

［A］は、「大切さ」ということばにつながることからわかるように、筆者側主役キーワードを求めています。①は対比混乱の誤りで視覚重視の方です。②③の「見たくない⟷見たい」は正しい対比喪失の誤りです。そんなこと比べてない！

問３《接続語空欄補充・選択肢》

［a］は、［順接］です。前文が、見えないものこそ本質という内容で、その後、目に見える「具体物〜意味をなさない」につながるからです。②「だから」ときまります。［b］は「変身する」をより適切な表現「しぐさをしだす」に［言い換え］ています。逆接あるいは比較を導く①「というより」が正解。［c］の前段落では「演劇という表現ジャンル」という大きな話をして、［c］から「カフカの『変身』」という［具体例］になります。したがって④「たとえば」と決まります。

問４《傍線部説明・選択肢》

傍線部は、見るは見るでも、視覚以上の〈見る〉のことで、広義の見る、感知する力のことです。これと違ったものとは、文字通りの視覚、狭義の見るにあたる③です。

問５《主題理解・選択肢》

問違い探しの問題です。①は「人間の五感の分裂状態は文章で書くことが不可能」が、第二段落「人間を～五感の分裂状態を描く」シェイクスピアの話と矛盾します。つまり記述に反する誤りで、解答に採用します。②③⑤はもちろん、本文の正しい対比に合致します。④は、まず「ものをはっきりと見つめることが難しくなった時代」が×です。現代は見えるもの重視だったはず。記述に反する誤りです。さらに「現実を見据える目⟷想像の世界を見つめる目」が正しい対比喪失の誤りです。本文は「見たまま重視⟷見えない背後まで想像」という対比です。ファンタジーを推奨しているわけではありませんね。というわけで④を採用します。

模範解答

問１＝特にマ～ある。　問２＝④　問３　a＝②　b＝①　c＝④　問４＝③　問５＝①④（順不同）

第十五講　小説その４　現代と回想

《本文の対比構造》

主役

「私」・現代（現在位置）
＝掘割＝「忘却の河」
＝「私」の無量の想い、過去を流したいが流れない河

主な対比

比較相手

回想シーン＝日本海
＝身籠ったことを恥じて死んだ「彼女」とその母親／死者への鎮魂

小さな対比

脇役

誠意・自責の念を抱き続ける

《解説》

問１《語句説明・選択肢》

「彼女」を訪ねて行ったら、「死にました」とその母親に言われ、事情がよく分からないという場面です。二人の対話もかみあわず、そのため「押し問答」になります。つまりうまくいかない意思疎通、バット・コミュニケーションなのです。⑤が正解。①は「一方的」でそもそもコミュニケーションではありません。②では「おしくらまんじゅう」ですよ。「寒いですな。体でも押し合いませんか」って和気藹々（わきあいあい）か！③は普通のコミュニケーションです。④は「休む間も無く」が×です。「押し」にそのような意味はありません。

問２《全文理解・選択肢》

今回のストーリー展開のベース、すなわち、そこからスタートしてそこへと帰っていくホームベースは「掘割」です。これが「現在位置」でもあります。一方、そこではない「日本海」の海辺の町でのエピソードが「回想シーン」となります。したがって［3］［4］［5］です。［2］のギリシャ神話のエピソードは一瞬のことで、本格的な回想シーンとは言えません。

問３《内容説明・選択肢》

「回想シーン」に出てくる、「彼女」の母親の説明です。「恥じる」がキーワードですが、「彼女」が身籠ったことを「恥じた」のに加え、この母親も「恥じていた」というように二人ともひとつのグループとしてセットです。それを分断し、一面的・部分的に説明している①②③⑤は、ことごとく同じ間違いです。同一性分断の誤りといっても、部分的指摘の誤りと呼んでもOKです。また「私が何者であるのかも知ろうともせず」と本文にありますから、この点でも「娘の知り合い」とした①③は記述に反する誤りです。（なぜ、「恥じたのか」の説明は本文には直接明記がなく、設問にもなっていませんが、以下のように推測されます。正式の婚姻関係にないのに、つまり不倫関係なのに妊娠したこと、また一時代前の話ということもあり、世間の目、村落共同体の目というものがあったのではないでしょうか）

問４《傍線部説明・選択肢》

通常、賽の河原で石を積むのは、死者の魂を弔うためですが、「私」はそうではなく、「自分自身の救いのつもり」です。イヤな主人公だなと思ったかもしれませんが、主人公に共感できたから得点がいい、共感できなかったから得点がわるいというようなことにならないための練習と考えてくださいね。ただし、「逃れるようにそこをあとにした」とあるように、自己救済は成功したわけではありません。最終段落でも、賽の河原の石を、掘割に投げ入れることで、同じ自己救済を図ろうとしていることからも分かります。したがって②が正解です。すると①の「成果」、⑤の「救済された」が×です。これでは意気揚々と帰還ということになり、話もここで終わってしまいます。**記述に反する誤り**です。③は「死者」のための祈りになり、**対比混乱の誤り**です。④は「霊の叫びを聞いた」が×です。本文では「叫んでいるような気がした」との心理描写です。これぞ**物理的スリカエ**の典型です。あるいは**比喩を文字通りに解釈した誤り**と呼んでもよいです。ともあれホントに聞こえたら、心霊スポットだよ。そりゃ怖い！

問５《傍線部説明・選択肢》

賽の河原の場面と同様に、自己救済の願いをこめて石を掘割に投げ入れます。しかし、それはスッキリとは流れていかない、澱（よど）んだままの「忘却の河」なのです。したがって、⑤が正解です。①は「鎮魂」が×です。これでは、死んだ魂のためということになり、自己救済に反します。**対比混乱の誤り**です。②は「罪のみ」が**不当な限定判断**です。「無量の想い」のはずです。③は「自責の念を〜抱き続けよう」が×です。石を掘割に投げてしまう行為と矛盾します。これも**対比混乱の誤り**です。④は「幸福な人生の新たな始まり」が×です。都合よすぎですよね。そんな簡単に過去の拘泥（こうでい）からまぬかれません。**記述に反する誤り**です。そのことを本人も分かっているのです。だから「忘却の河」はこの掘割なのです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝③　問３＝④　問４＝②　問５＝⑤

第十六講　コミュニケーション論

《本文の対比構造》

主役

人間の食＝コミュニケーションとしての食＝他者との親密な関係を結ぶため／後天的経験的に学ぶ

主な対比

比較相手その1

霊長類＝サル＝食物は争いのもと・優劣の関係を反映

小さな対比

比較相手その2

類人猿＝ゴリラ・チンパンジー＝食物の個人所有・食物を分配するときは権威者の影響力を示す

《解説》

問１《傍線部説明・記述》

「そんな物騒な代物」とは前段落の「霊長類（サル）」の生態を踏まえての表現です。設問の「何が」にあたるのは、もちろん「食物」ですね。では、「どのような意味で」かを、**具体例はカット・対比の表現・繰り返されている表現は大事**という三原則にもとづいて解答を作ります。得点になるポイントを挙げます。順番は問いません。自分の答案に次に挙げる語句が入っていれば加点してください。第一ポイント「食物」「食」、第二ポイント「親密さではなく」あるいは「他者と分かち合うより」、第三ポイント「争いのもと（源泉）」、第四ポイント「優劣の関係」、以上です。

問２《傍線部説明・記述》

先の霊長類にくらべ、より人間に近い「類人猿（ゴリラ・チンパンジー）」と「人間」との対比です。記述の三原則というフィルターを通すと、キーワードが浮かび上がるはずです。それが得点になる箇所です。類人猿側の第一ポイントは「食物の個人所有」、第二ポイント「権威」、第三ポイント「差異」、第四ポイント「緊張」です。順番は問いません。人間側の第一ポイントは「個人所有を排する」、第二ポイントは「対等」、第三ポイントは「信頼」、第四ポイントは「宥和」「和」です。こちらも順番は問いません。合計八つのポイントを挙げましたが、五つ以上なら上出来です。

問３《傍線部説明・記述》

「社会的な食事」とは、タイトルにもあるコミュニケーションとしての食事のこと、他者と宥和的に分け合う、分かち合う食事のことです。「生得的」ではないとは、生まれ持っての本能ではないということです。まだ霊長類レベルの特徴を残しているためで、つまり経験的に学習していくしかないということ。得点になる第一ポイントは「霊長類の採食行動を反映」「霊長類の名残を残している」、第二ポイント「食物によるコミュニケーション」「食べ物を分け合う」、第三ポイント「方法」「やり方」、第四ポイント「経験」あるいは「時間をかけて」、第五ポイント「学ぶ」「学習する」、です。

模範解答

問１　食物が親密さより争いや優劣関係の源泉という意味。（二十四字）

問２　類人猿が、食物の個人所有を通して権威や仲間内の差異といった緊張下で共存をするのに対し、人間は、食物の個人所有を排し、対等な互いの信頼といった宥和的な共存をする。（八十字）

問３　霊長類の採食行動を反映し、食物によるコミュニケーションの適切な方法は、経験から学ぶ必要があること。（四十九字）

第十七講　身体論・芸術論

《本文の対比構造》

主役

サハラ以南の黒人アフリカのダンス＝踊ることが日常生活に浸透・観賞用の踊りではない・踊ることと生きることが一体

主な対比

比較相手

ヨーロッパのバレエ＝劇場空間で観賞のために踊られるもの・文字文化に近い

小さな対比

脇役

政府主導の民族歌舞団＝劇場公演を目的

《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

今回の比較相手であるヨーロッパのバレエの特徴を問うています。観賞用であることこそアフリカのダンスとの相違点ですから②が正解。①は「地域文化」が×。バレエは「異なる世界の要素を意図してとり入れてきた」とありますから、地域特性の差を比べているわけではありません。したがって、記述に反するといっても、正しい対比喪失の誤りといってもよいでしょう。③の「身体表現」では、バレエもアフリカのダンスも、政府主導の民族歌舞団もすべてあてはまり、バレエの特徴とはいえません。④の「民族」との表現は、政府主導の民族歌舞団についてのみ使われており、対比混乱の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

この傍線部も後述の「ほとんど遺伝子にセット」も、これらは比喩表現です。本当にＤＮＡレベルで「ダンス遺伝子」を持っているという話ではありませんから注意。見る専門の観衆がいないということで④が正解です。②はその比喩を文字通りに解釈した誤りです。①の「生活の糧」、③の「劇場空間」では「観賞用」になってしまいます。対比混乱の誤りです。とくに③は、まるでオープンルームでショーをしながら住んでいるかのようです。

問３《語句知識の空欄補充・選択肢》

「猫も杓子も」は「誰でもみんな」を意味する慣用句です。①の「犬も食わない」はひどく毛嫌いするという意味。②の「猫を被る」が正解で、大人しく見せかけるという意味。③の「鶴の一声」は、有力者の意見で決定するという意味。④の「牛の歩み」は、非常にゆっくりなこと。

問４《語句知識の空欄補充・選択肢》

「身体に内蔵された衝動」が表に出ることですから「発現」です。

問５《主題理解・選択肢》

バレエは「文字の延長」と書かれていますから①は正しいです。②は、バレエが「劇場芸術」であることはその通りで、「見るものと演じるもの」がいることも事実です。しかし、そのような「二項対立的な世界に人々をふり分けて」が×です。バレエ自体の特徴であって、「人々を（アフリカの人々も含めて）」巻き込むものではありません。記述に反する誤りです。③は「欧米社会では理解されがたい」が×です。本文は、文字をもたない文化と文字をもつ文化との比較をしているだけです。一方が他方から理解されないなどという考察は本文の記述に反するものです。④は正しい対比ですね。正解です。⑤は優劣を入れてしまった典型的な不当な価値判断です。⑥は「踊りが相互のコミュニケーション言語となっている」が×です。文字がないのは事実ですが、しゃべり言葉はあるはずです。これではまるで、「おはよう」の挨拶をダンスで表現し、「ご飯できたよー」もダンス、「いただきます」もダンス、みんな黙々と踊り続けながら意思疎通するかのようです。ヘトヘトだよ！

模範解答

問１＝②　問２＝④　問３＝②　問４＝④⑤　問５＝①④(順不同)

第十八講　文学論　カルチュラル・スタディーズ

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝カルチュラル・スタディーズ＝文化研究をエリート文化のみに限定せず、民衆文化も視野に入れる・文化の多様性複合性を重視＝**ジェイムズ・クリフォード／ミハイル・バフチン／レイモンド・ウィリアムズ**

主な対比

敵役

伝統的文学論・文化論／ハロルド・ブルーム＝エリートの教養重視

小さな対比

脇役

民衆文化、大衆文化限定

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

筆者とブルームは対比関係で、筆者は、「エリート階級の教養」と「権威と名声」に固執しつづけるブルームに批判的です。したがって、②が正解。①は「民衆文化こそ」が対比混乱の誤りです。エリート限定も民衆限定もともにダメです。③は「状況（文学の改変状況）にはならない」が×です。本文によれば「状況があるのは事実」です。記述に反する誤りです。④では、筆者がブルームと同じ仲間になってしまいます。対比混乱の誤りですね。

問２《内容理解・選択肢》

バフチンもクリフォードも筆者の仲間で、カルチュラル・スタディーズグループです。①はエリート側・上位文化・支配文化側を答えてしまった対比混乱の誤りです。②は「二分化」が×です。混じり合いの「闘技場」、対立の「複合」がキーワードですからね。したがって③が正解で、④は「協調」が記述に反する誤りです。和気藹々（わきあいあい）ではなく、むしろ多様なものが火花を散らす、スパークするような異者との対話関係から文化活力が生み出されるのです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「特定の生活のあり方」とは、たとえば日本の生活文化という「特定の」ものであっても、さまざまな意味や価値観（さまざまな地方文化の混ざり合いや階級や男女文化などもろもろ多数）を含みこんでいるということです。そうしたもろもろ多数のうちのひとつに「制約（縛られ限定されるということ）」されるとしている①や③は、記述に反します。あるいは部分的指摘の誤りと呼んでもいいでしょう。④の「芸術や学問」ではエリート側になってしまいますね。対比混乱の誤りです。

問４《主題理解・選択肢》

①はエリート重視、②は民衆文化重視で、それぞれ対比混乱の誤りです。今回は部分的指摘の誤りと呼んでもＯＫです。③は国別比較の話になってしまっています。つまり正しい対比喪失です。④が正解。

模範解答

問１＝②

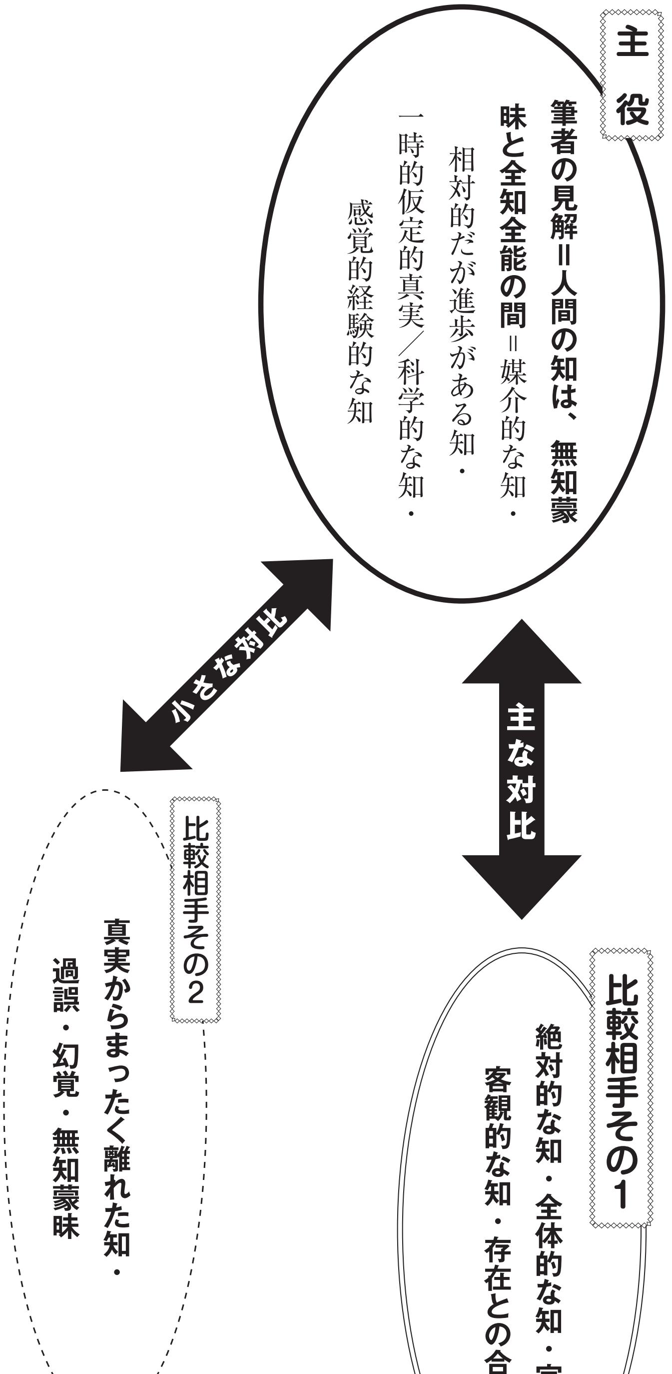
問２＝③

問３＝②

問４＝④

第十九講　学問論その2

《本文の対比構造》



《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

Ａ・Ｂは、《本文の対比構造》の「比較相手その１」との対比です。まず、Ａは、直前の具体例（友人についても間違うことがあるなど）をまとめる表現です。さらに次の段落で「絶対的かつ全体的に知ることはできない」と言い換えられています。したがって④と決まります。Ｂは直前の「知は媒介によって成立する」の言い換えになります。さらに次の段落の「事物をありのままに知ることはできない」との表現に続きます。したがって③となります。Ｃは、「比較相手その２」との対比です。絶対的な知がないからといって、なんでもありというわけではないということです。また次の段落以降で、科学的な検証が必要との内容につながります。したがって①と決まります。Ｄは「相対的（唯一絶対の対義語で、それぞれということ）」であると同時に、そのそれぞれには価値の段差があるということです。つまりより真実に近いかどうかで差があるという意味です。したがって、⑤が正解。

問２《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

知あるいは科学理論には、科学史上の進歩があるということです。前段落の例だと「プトレマイオス→コペルニクスとニュートン→アインシュタイン」の流れです。より真実らしさ、より包括的な説明力という流れで、元に戻ったりしないということです。したがって③の「不可逆」と決まります。

問３《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

前段落に「科学的なものだけが知であるわけではない」とあります。その後「自分の嗜好（好み・この銘柄のコーヒーがおいしいと感じるなどの経験）」といった例が挙げられています。さらに空欄の直後からは、裁判の証言で真実へと接近していく具体例が始まります。したがって⑤が正解です。

問４《主題理解・選択肢》

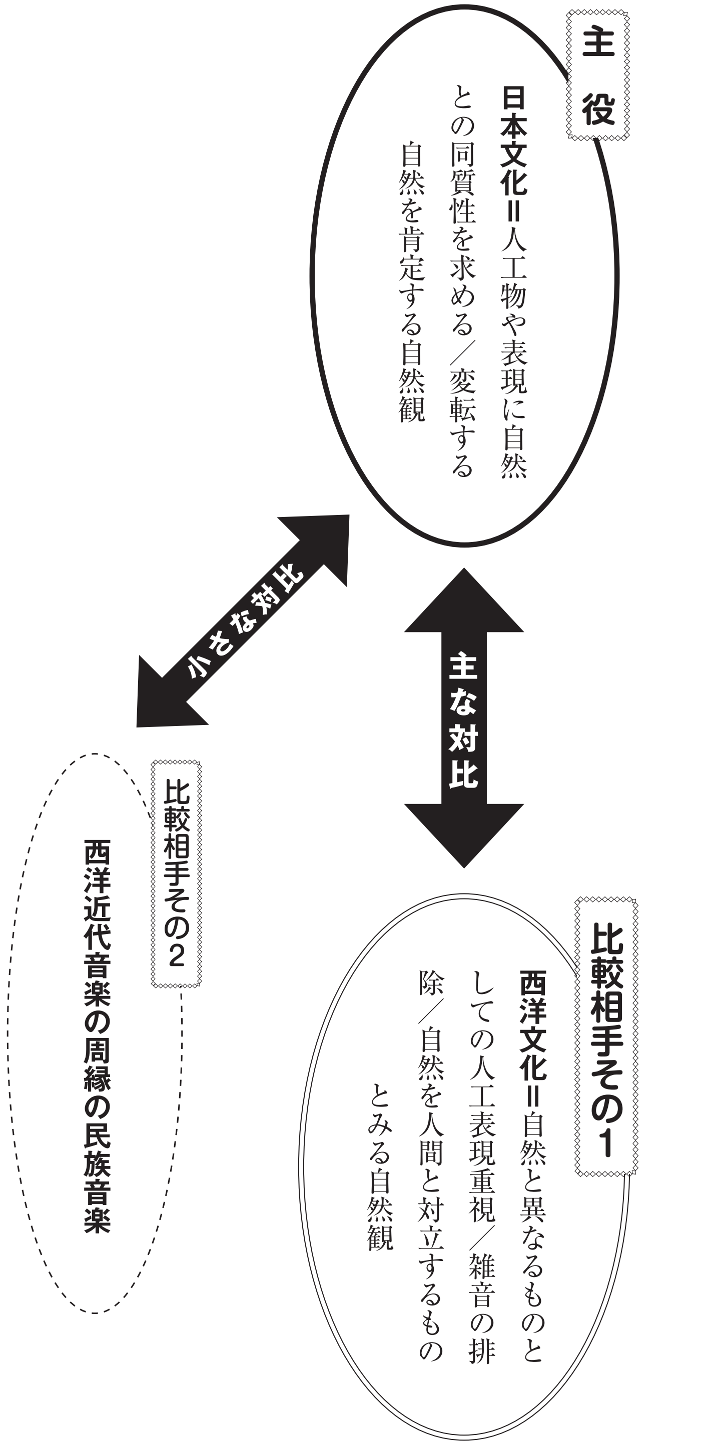
①は、「比較相手その２」に当たるものです。これでは対比混乱の誤りですね。③は、科学より非科学的知を高く評価している点で×です。筆者は、科学的ではない知を認めていますが、はっきり「科学は知の理想的な形態」と記述しております。したがって記述に反する誤りです。④の「本能の壊れた動物である人間」との記述は本文にはありませんね。この表現は、早稲田大出身の精神分析学者である岸田秀氏のことばとしても有名ですが、ともあれ本文とは無関係です。さらに「恣意的な知」では、勝手気ままということになり、これも「比較相手その２」を答えてしまった対比混乱の誤りです。⑤は「絶対的」が対比混乱の誤りです。さらに「どのような知も尊重」は、記述に反するといってもよいですし、不当な全称判断といってもよいです。②が正解です。

模範解答

問１　Ａ＝④　Ｂ＝③　Ｃ＝①　Ｄ＝⑤　問２＝③　問３＝⑤　問４＝②

第二十講　日本文化論・音楽論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

Ｘは、直後の「すげなく（シンプルに）簡明にただひとつの音」との対比になります。したがって⑤の「多義的」になります。たとえば「間」は、空間の意味でも時間の意味でも、人間関係についても使われる、意味の多いことばです。Ｙは、「観念（アイディア・頭の中の思考内容）」とセットになっていること、次の文で「本然の（本質・本来的なもの）貌（すがた）」と言い換えられていること、直前の「実際的な技術上の意味」と対比になること、以上から④の「形而上的（けいじじょう）」を選びます。カタチや物理現象（フィジックス）を超えた本質を意味する「メタ・フィジックス」の訳語です。評論・論説文を読むうえでは欠かせない知識です。よく覚えておいてください。Ｚは、「顔の表情」「表面的な演技」に関わるものですから⑥の「直接的」です。能面はそれらをあえて封じて、「内面」の表出をめざしているのです。

問２《傍線部説明・選択肢》

日本の美学の説明です。①は、「自然の素材を可能なかぎり元のまま」という本文の記述に合致しているように見えますが、さらに「深めて行く」のが日本の美学です。しがって「そのまま再現（リピート）」では、記述に反する誤りとなります。②は、まず「前面に出す」が×です。「前面⟷背景」というような対比はないからです。ゆえに正しい対比喪失の誤りです。また「日本の固有の音階や律動を見いだし」も×です。これでは、例えば雨音の中から「日本的なリズム」を発見するかのようですよ。そうではなく、自然の音を深く聞く、その聞き方に日本人ならではの特徴があると語られているのです。この点では記述に反する誤りです。③は、「純化」が「雑音的なものを排除」する西洋側のキーワードになり、対比混乱の誤りとなります。④は、「騒音～音階～関連づける」が、「騒音～混ぜ方の工合い」を特徴とする「西洋の周縁の民族音楽」の言い換えとなってしまいます。したがって、これも対比混乱の誤りです。したがって⑤が正解。

問３《傍線部説明・選択肢》

日本の美学を代表する能に見られる「集約」「意味の重層性」の説明部分です。詳しく言えば、戸籍上あるいは生物学的に

は「男性」である能役者が、舞台上で「女」を演じる。さらに待ち焦がれる相手（在原業平）の衣裳を身にまとう、という二つの重ね合わせがあるのです。また、相手との葛藤（対立）を特徴とする西洋近代劇との対比ともなります。したがって⑤が正解。①は、「技巧（技術）」はむしろ西洋的な特徴で対比混乱の誤りといえます。また「それまでにない」が正しい対比喪失の誤りです。「かつて⟷いま」という対比ではないからです。②は、「二重に否定」が×です。正しくは「二重に肯定」です。記述に反する誤りです。③は、二重の重ね合わせの内、「相手の男」の衣裳を重ねる点だけになっています。部分的指摘の誤りです。さらに「結末⟷オープニング」は、比べられていないゆえ、正しい対比喪失の誤りです。④は「二重に逆転」が、②の「二重に否定」と同様に記述に反する誤りです。また「倒錯的な美が一層強く」は対比混乱の誤りです。本文では「単に倒錯的～ばかりではない」と乗り越えていますから。

問４《キーワードに関する空欄補充・選択肢》

⑤の「自然観」を選んでしまいがちですが、西洋にも西洋流の「自然観」がある以上、日本文化の特徴を答えることになりません。変化・変転する自然を肯定するものです。したがって①の「無常観」となります。なにものも今ある状態を保ちえない、儚（はかな）いものという意味です。つい否定的に「諦め」と考えがちですが、本文ではポジティブに評価しています。

問５《主題理解・記述》

西洋側は、自然そのままではない人工加工重視、一方日本側は、自然との同質性・親近性重視、という方向で、さまざまな芸術表現を考えてみましょう。解答例を参考にしてください。

模範解答

問１　X＝⑤　Y＝④　Z＝⑥　問２＝⑤　問３＝⑤　問４＝①

問５

解答例１―庭園　西洋の庭園は、植物など自然素材を使っても、人工的な加工を施した幾何学的・直線的な形態をとるのに対し、日本の庭園は、自然の景観の借景をとりいれるなど、自然との同一性・連続性をもつ。（八十九字）

解答例２―花

西洋――フラワーアレンジメント―加工

日本――華道・茶道―一輪の花に四季・自然の象徴をみる

解答例３―文学・詩

西洋――人間の営み、とくに傑出した英雄の活躍を詠む叙事詩の伝統

日本――自然を詠み、それとともにある感受性を主とする抒情詩の伝統・和歌・俳句

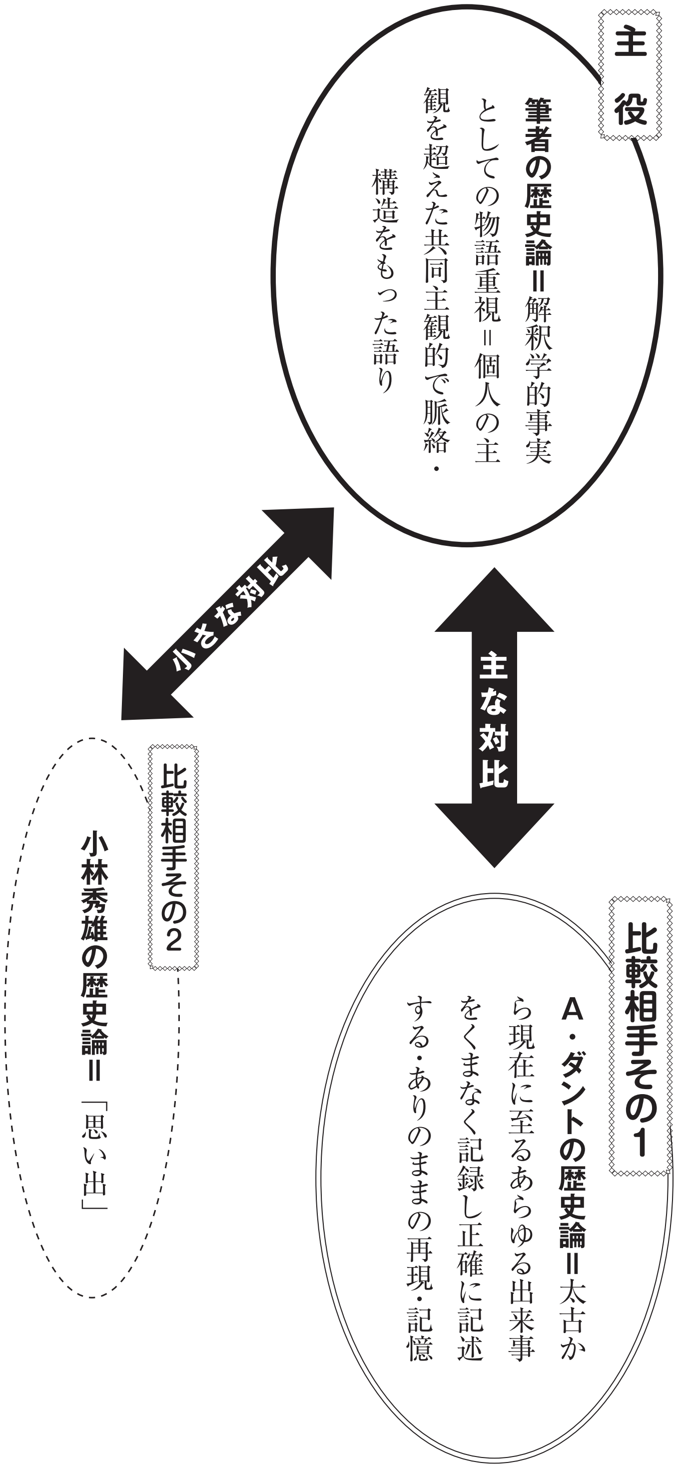
解答例４―建築

西洋――城壁によってかこまれた都市・強固な壁をもち、外部と隔絶した住宅

日本――庭や自然との連続性、借景をとりいれた住宅

第二十一講　歴史論その2

《本文の対比構造》



《解説》

問１《語句知識・記述》

Ａは、有名で広く知られているということです。厳密には、中国由来の故事成語で次のような意味からきています。膾（なます＝素材を細かく切って酢などにつける料理）や炙（あぶり＝肉などを焼いたもの）がみんなにとっておいしいと感じられるように、広く人々の口にのぼってもてはやされること。Ｂは、まだ夜が明けきらないころということです。早朝でもよいです。Ｃは、まず「あえかな」が「たよりない」「かすかな」という意味です。次に「文様」をそのまま「文様」と書かないようにしましょう。説明ですから、言い換えないと得点になりません。「模様」「形」「型」「姿」などと表現しましょう。つまり、タイムマシンで過去に行って実際を見たわけではなく、歴史史料から一種の物語を再構成し、こうであったろうと表現したものを「あえかな文様」と言っているのです。

問２《傍線部説明・記述》

小林秀雄の「思い出」の説明になります。しかも、傍線部直後に言い換えがあります。さらに「ありのままの再現」という「比較相手その１」との対比にもなっていますから、それも盛り込む。いつもの記述の三大原則＝**具体例はカット・対比の表現・繰り返されている表現は大事（ただし一本化）**にもとづいて答案を作りましょう。では、得点になるポイントは以下の通り。第一ポイント「ありのままの再現ではなく」「ありのままの客観的事実ではなく」「あらゆる出来事を記録し正確に記述するのではなく」などです。第二ポイントは「想起の力学が働く」という指摘です。第三ポイント「強烈な印象のものはクローズアップ（大写しに）する」。第四ポイント「印象に残らないもの（些末なもの）はフェイドアウトする（遠景に退く）」。以上、順番は問いませんが、四つのうち三つ取れるとよいですね。

問３《傍線部説明・記述》

今度は、小林秀雄（比較相手その２）と筆者の見解（主役メッセージ）との対比です。まず、「物語る」行為が「言語行為」であるとの言い換えがありますから、これが第一ポイントです。次に「思い出」の説明として「断片的」または「間欠的」が

第二ポイントで、「個人的」「個人的感懐」が第三ポイントです。第四ポイントは「断片を構造化する」ということで、「統一的な筋」「脈絡」「因果の糸」「起承転結の結構」といった表現でもＯＫです。第五ポイントは「個人的なものを共同化する」ということで、「間主観的なものにする」「共同主観的なものにする」でもＯＫです。以上五つのうち三つ取れるとよいです。

模範解答

問１＝Ａ　広く知られていること　　Ｂ＝夜が明けきる前　　Ｃ＝かすかな形

問２　出来事のありのままの再現ではなく、想起の力学が働き、印象の強い出来事はクローズアップされ、印象の弱い出来事はフェイドアウトされること。（六十七字）

問３　言語行為により、断片的な思い出を統一的な筋や脈絡をつけて構造化し、個人的な思い出を共同化する働き。（四十九字）

第二十二講　小説その５　大能力と小能力

《本文の対比構造》

主役

それぞれの大能力＝

劉邦（りゅうほう）……天下人・将軍を率いる力

韓信（かんしん）……軍人・将軍としての能力

蒯通（かいとう）……弁論人・天下を動かす策

⇕ **主な対比**

敵役

それぞれの小能力＝

劉邦……兵を率いる将軍としての力

韓信……自分自身が天下をとる能力

（結局は、劉邦への忠信に終わる）

蒯通……自らの命を救うに過ぎない能力

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

蒯通が、自らの大能力を誇るシーンです。本文の傍線Ｄとは際立ったコントラスト・対比・対照ですね。したがって⑤が正解です。①は「韓信の名誉」が×です。自らの策の優秀さに対して韓信を「小僧よばわり」して馬鹿にしています。記述に反する誤りです。②の「ひとまず」、③の「精いっぱいの釈明」、これでは大したことない小能力になってしまいます。これを対比混乱の誤りと呼ばずして他に何と呼ぼう！「小説も対比がわかることが読解力なんだよ」と問題制作者が語りかけてくるようです。④「韓信が〜頼りにしていたのは自分（蒯通）」が×です。韓信は結局のところ劉邦にこそ従順であったのです。韓信が蒯通の策を用いなかったことからも記述に反する誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

劉邦の大能力と小能力を一度に問うています。劉邦のような天下人にもそうした才能の二面性のあることとの「奇妙さ」をダイレクトに設問にしています。したがって①が正解です。②は「戦士として」がまず小能力の説明つまり記述に反しています。「将軍として」でなくてはなりません。また後半の大能力で「将軍として」とやってしまい、典型的な対比混乱の誤りを犯しています。③は「兵隊を指揮する能力はなかった」が×です。小能力であって無能ではありませんよね。たしかに「陛下は兵に将たる能力はおありではありません」とありますが、これは「せいぜい十万人程度の将」の言い換えであって文字通り「能力がない」と解釈しては誤りです。記述に反する誤りとも言えますし、「有能⟷無能」を比べているかのような正しい対比喪失の誤りと呼んでもよいです。また後半の「知らぬまに」も×です。魔術師か！　妖術師か！　催眠術師か！「知ってか知らずか」は対比ではない。これまた正しい対比喪失の誤りです。④は、小能力部分で、また「なかった」としてしまい③の前半と同じ誤りです。後半の大能力では「将軍として」で②と同じ誤りです。⑤は「天が悪戯したとしか思えない」が×です。「しか」が不当な限定とも言えますし、本文の「天授」は生まれもっての能力（人力ではない、つまり努力の成果ではない）ということです。イタズラをなすような文字通りの「天」がいるわけではありません。比喩を文字通りに解釈した誤りと言えます。

問３《指示語・選択肢》

この指示語は、韓信の大能力および、それを使って天下をねらえるという可能性を指しています。したがって④が正解。①②③の「忠信」はすべて小能力の方です。つまり対比混乱の誤り。また①の「劉邦にとって～煩わしい」も×で、むしろ「愛すべき」でしょう。記述に反する誤りです。また②の「高い視点」は「鷲」などの鳥の比喩を文字通り「バーズ・アイ」ととってしまった誤りです。しらじらしー！　⑤は「劉邦の軍略」が間違いです。劉邦について恐れるべきものは、軍才ではなく、将軍たちを束ねる力であったはず。この点が対比混乱の誤りです。

問４《傍線部説明・選択肢》

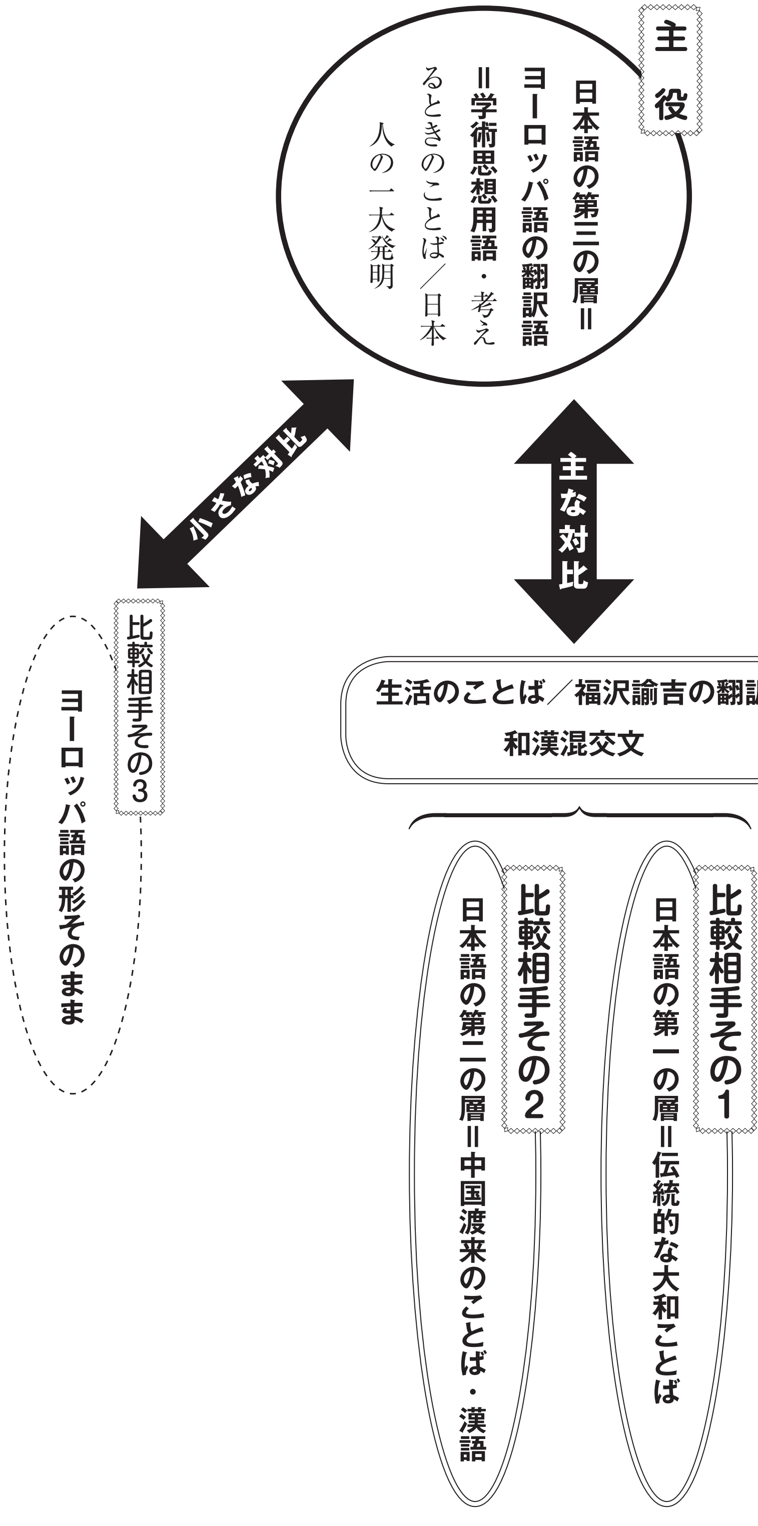
蒯通の大能力と小能力の対比、とくに結局は小能力におわってしまったというシーンです。③が正解です。①は「おめおめ⟷潔く」が正しい対比喪失の誤りです。「ずるずる長々⟷スパッとシンプル」なんてことは一切比べられていません。こうして何が正しい対比かがわかれば、間違いの選択肢がどのようなものかクリアカットに見えてくるでしょ。②は「詭弁（ごまかし）」が×です。能力が小さかったということで、ずるがしこく立ち回ったということではありません。記述に反する誤りです。また「人のよさ・正直さ⟷ずるさ」という点では正しい対比喪失の誤りといえます。④の「弁論は結局権力者の武力に勝てない」が典型的な不当な一般化です。蒯通個人の小能力の露呈であって、「広く一般に、そもそも弁論は～」ということではありません。⑤は「幸いにして命だけは」がすでに×です。「死んだほうがまし」の記述に反します。もし処刑されていたならば、それは天下を動かすほどの大能力を認められたということです。生かしておくと危険なほどの大人物だ、ということになるからです。さらに「相手もなく」も×ですね。正しくは自分の能力が大きくなかったのです。記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝①　問３＝④　問４＝③

第二十三講　日本語論・翻訳語論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

日常語と学術思想用語との対比です。「家庭内のお年寄り」は日常生活語の代表として登場しています。いわば日常語チェック用のリトマス試験紙です。青くなるとアルカリ……やめましょう。ともあれ④が正解です。①は「考えるときのことば」にしていいまいました。絵にかいたようなヘンな対比を導入しています。その内容を「家庭内のお年寄り」が知っているわけはありません。日常生活代表としての役割に反します。つまり、記述に反する誤りです。また筆者の論は言語論として学術的なものですから、対比混乱の誤りと呼んでもよいです。⑤は「昔ことば⟷今ことば・流行語？」であるかのようです。もちろん正しい対比喪失の誤りです。

問２《内容理解と語句知識の空欄補充・選択肢》

翻訳語は、日常生活の目線から見れば、「意味が乏しいことば」ですが、「見方を変えると」つまりヨーロッパ語の受容という点からみれば対応力のあることばだということです。つまりプラスとマイナスの同居したキミョウさを持つということです。逆説的とも言えます。

問３《傍線部説明・選択肢》

翻訳語のプラス面・ポジティブ面を「一大発明」と表現しています。①は「意味の乏しいことば」が×です。これでは生活目線ですね。対比混乱の誤りです。②は「そのまま」がマズイ。これは「比較相手その３」ですよ。これも対比混乱の誤りです。この問題の出題校である早稲田の政経も「文章を対比で読め！　設問を対比で解け！」といっているわけです。④は「漢字から平仮名・片仮名」が本文中の「第二の層のことば」の説明と食い違います。記述に反する誤りです。また後半「異質な文明のことばを巧妙に変質」が×です。これではあたかもアルファベットを変形させたかのようです。そうではなく漢語の応用です。記述に反する誤りです。⑤は、「二千年の歴史」が×です。「一大発明」は明治時代の話ですからね。また「区別し使

い分ける方法を発見した」もひどい×です。発見は翻訳方法のはず。いずれも記述に反する誤りです。したがって③が正解です。

問４《内容理解・抜き出し》

福沢諭吉の翻訳法は、本文とは対比的ということです。本文では漢語を利用しつつ変容させて、日常生活用語とは切り離されたところ学術思想用語としての翻訳語が成立したと語られています。福沢は、それを「四角張った文字」と揶揄（やゆ）（からかう・皮肉を言う）しています。むしろ「穏なる日本語」を「申分なき訳字なり」と断定しています。ここを採用します。

問５《内容理解・選択肢》

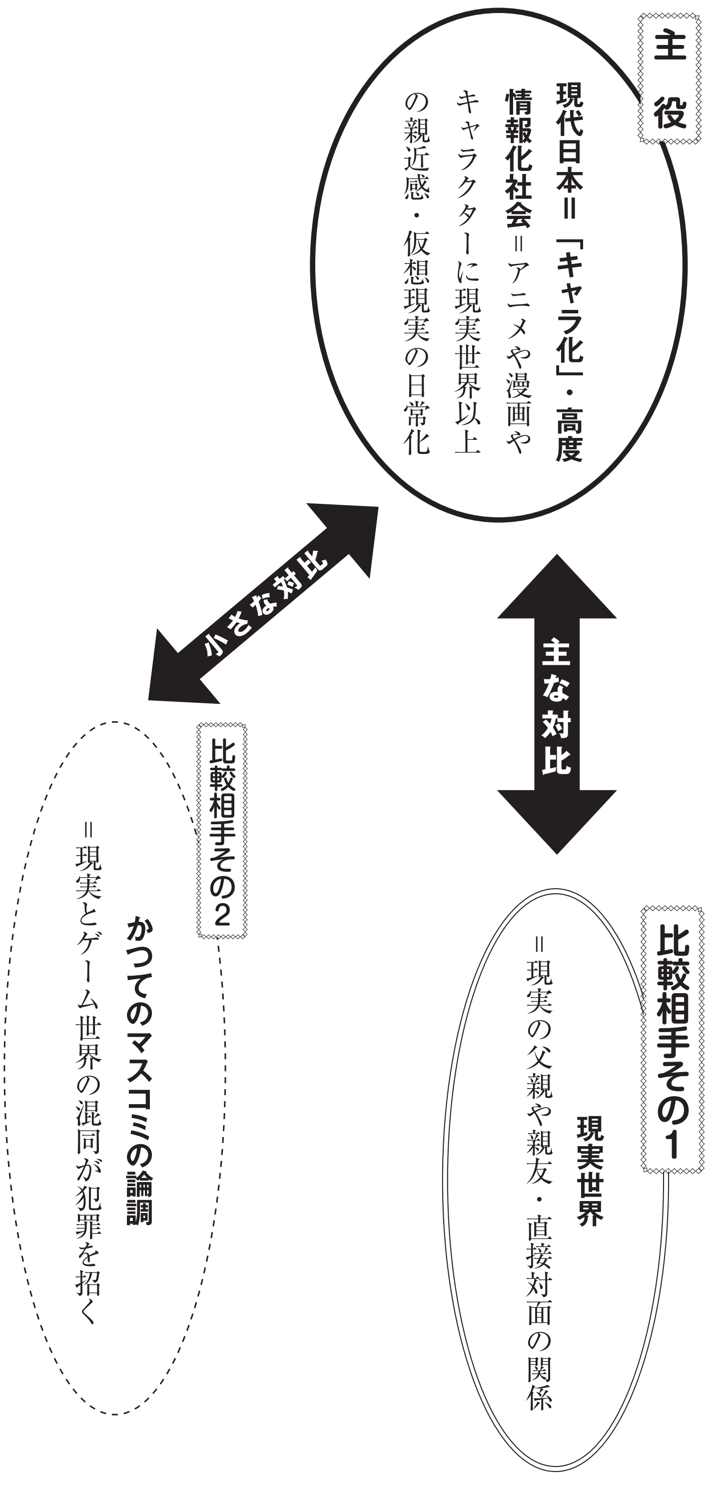
もちろん明治維新前後の日本史の知識とは無関係に、本文の理解にもとづいて解答できる設問です。①②は「話しことば↔書きことば」が正しい対比喪失の誤りです。日記や手紙などは書きことばですが、日常生活をつづりますしね。さらに「東京語↔方言」という対比も×です。④は「新鮮なエネルギー」として「和漢混交文」を挙げてしまいました。時代錯誤も甚だしい！　それは千年以上もまえです。ともあれ第三層の話をするべきなのに第二層の話になってしまいました。対比混乱の誤りです。⑤は「区別がつかなくなった」が「三つの層」「それぞれの体系を～はっきりと守っている」という記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝④　問２＝奇妙　問３＝③　問４＝あては～なり。　問５＝③

第二十四講　情報化社会論その2

《本文の対比構造》



《解説》

問１《接続語空欄補充・選択肢》

Ａは、順接であり、さらに詳しく言えば「因果関係」を導きます。「リアリティを感じた」したがって「作品化しようと考えた」ということです。Ｃは逆接です。より表現を適切なものに改めればということです。Ｅは、「別の人格」「キャラとしての私」が「言い換え」ですから①「いわば」と決まります。

問２《キーワードに関わる空欄補充・選択肢》

Ｂは「比較相手その２」にあたるマスコミの論調を批判的に評している部分です。「いかにも」「ステレオタイプ（紋切型・いつも同じ）」は褒め言葉ではなくネガティブ評価です。「よく考えもせず百万回連呼されているぞ」と。したがって④「短絡的」が正解。Ｄは「仮想現実⇔親和性・親近感・安心感」と「現実⇔？」という好対照をなすものです。したがって「嫌悪感」「不快感」より⑤「違和感」が完全解答です。すっかり日常化しているということですから「好き嫌い」「快不快」の次元以上だということです。

問３《傍線部説明・選択肢》

メインメッセージです。②が正解。①は「使い分け」が日常的になじみという本文の主旨に反します。記述に反する誤りです。かといって③の「一心同体」は行き過ぎです。寝ても覚めてもいつもコスプレか！さらに「悟る」も×です。ともに記述に反する誤りです。④の「支配」もおかしいですね。アニメキャラが憑依（ひょうい）して私たちをあやつるのか、怖いよ！⑤は、「現実の父親や親友達から」が×です。これでは虐待やイジメが疑われます。そうではなく、現実より親近感を感じるということです。

問４《傍線部理解・選択肢》

こちらも問３とほぼ同内容です。①が正解。対比がわかれば、長い文章も実はシンプルだと了解できると思います。②は「犯罪」が×。これでは「比較相手その２」を答えており、対比混乱の誤りをたちまち構成してしまいます。③は「生身の現実」

重視ですから、当然対比混乱の誤りですね。④は因果関係が本文とは逆です。「対面でのコミュニケーションに不快」と「電話やメールを多用」では、前者が後、後者が先です。記述に反する誤りです。⑤は「絶望感」が誤りです。九・一一も「情報」「仮想現実」のように受け止めてしまうということですから、「希望⟷絶望」というような対比ではありません。正しい対比喪失の誤りです。

問５《主題理解・選択肢》

①の「現実を情報としてしか捉えられず」は、一瞬「しか」は不当な限定ではないかと疑われますが、本文にもちゃんとその通り書いてありますから、ＯＫです。正解です。②「心に負った傷を癒して」が×です。温泉か！　センチメンタルジャーニーか！　キャラが現実世界より安心でなじみやすいといっているだけで、そこに何らかの薬理効果があるわけではありません。記述に反する誤りです。③は「閉ざされた社会」が×です。開かれた社会との対比ではないよね。これぞ正しい対比喪失の誤りの典型です。④は正解です。⑤は「結果」でつながれている前後の因果関係が記述に反する誤りです。さらに「マスコミの論調」という比較相手と筆者の「仮想現実」とを混ぜた対比混乱の誤りです。⑥もかつてのマスコミの論調を記していますが、「事件（犯罪）」は「ヴァーチャル世界で」ではなく、「現実世界で」起こると心配されたのです。記述に反する誤りです。⑦は「高度情報化」と「現実社会での対人関係」をごちゃまぜにした、対比混乱の誤りです。「しらじらしー！」と最後に叫びましょう。

模範解答

問１　Ａ＝⑨　Ｃ＝⑦　Ｅ＝①　問２　Ｂ＝④　Ｄ＝⑤　問３＝②　問４＝①　問５＝①④（順不同）

これで本講座の全問です。よくやりとげました。立派です。各文章は、それぞれのテーマ（日本文化論とか科学論とか）のモデル文章です。良質な読書資料として再度お読みください。

復習問題解答

復習問題解答　第十三講

（ア）①　（イ）③　（ウ）⑤　（エ）③　（オ）②
（カ）⑤　（キ）④　（ク）①　（ケ）③　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）現象　（イ）矛盾　（ウ）止揚　（エ）感心　（オ）相殺
（カ）一顧　（キ）相乗　（ク）違和　（ケ）消極　（コ）皮相

復習問題解答　第十四講

（ア）③　（イ）④　（ウ）③　（エ）①　（オ）④
（カ）④　（キ）①　（ク）④　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）幻聴　（イ）夢遊　（ウ）分裂　（エ）演出　（オ）監督
（カ）出版　（キ）加減　（ク）優先　（ケ）特異　（コ）孤独

復習問題解答　第十五講

（ア）④　（イ）①　（ウ）②　（エ）④　（オ）②

（カ）②　（キ）④　（ク）③

解答漢字一覧

（ア）風雪　（イ）形見　（ウ）応接　（エ）線香　（オ）波紋

復習問題解答　第十六講

（ア）②　（イ）③　（ウ）①　（エ）⑤　（オ）③
（カ）④　（キ）⑤　（ク）②　（ケ）④　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）同僚　（イ）伴侶　（ウ）修復　（エ）頻繁　（オ）邪魔
（カ）親和　（キ）狩猟　（ク）散布　（ケ）採食　（コ）丹精

復習問題解答　第十七講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）③　（キ）②　（ク）④　（ケ）④　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）基層　（イ）公演　（ウ）主導　（エ）提唱　（オ）編成
（カ）享受　（キ）内蔵　（ク）観念　（ケ）外在　（コ）純粋

復習問題解答　第十八講

（ア）③　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）②　（オ）⑤
（カ）②　（キ）③　（ク）①　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）漫画　（イ）固執　（ウ）権威　（エ）怨念　（オ）教養
（カ）引用　（キ）対照　（ク）措定　（ケ）複合　（コ）規定

復習問題解答　第十九講

（ア）④　（イ）③　（ウ）②　（エ）②　（オ）③
（カ）①　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）隅　（イ）枠組　（ウ）媒介　（エ）色彩　（オ）構想
（カ）合致　（キ）相対　（ク）検証　（ケ）停止　（コ）基底

復習問題解答　第二十講

（ア）③　（イ）②　（ウ）①　（エ）④　（オ）②
（カ）⑤　（キ）①　（ク）③　（ケ）④　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）習俗　（イ）固有　（ウ）珍重　（エ）周縁　（オ）音階
（カ）全相　（キ）葛藤　（ク）倒錯　（ケ）扮　（コ）震動

復習問題解答　第二十一講

（ア）③　（イ）②　（ウ）①　（エ）③　（オ）⑤
（カ）④　（キ）②　（ク）①　（ケ）⑤　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）記録　（イ）年代記　（ウ）叙述　（エ）細大　（オ）氷結
（カ）些末　（キ）感懐　（ク）雄弁　（ケ）間欠　（コ）保証

復習問題解答　第二十二講

（ア）①

（イ）④

（ウ）②

復習問題解答　第二十三講

（ア）②　（イ）③　（ウ）②　（エ）①　（オ）④
（カ）④　（キ）⑤　（ク）①　（ケ）④　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）抵抗　（イ）圧倒　（ウ）原語　（エ）素姓（素性）　（オ）混交（混淆）
（カ）変革　（キ）維新　（ク）体系　（ケ）渡来　（コ）無駄

復習問題解答　第二十四講

（ア）④　（イ）②　（ウ）④　（エ）⑤　（オ）②
（カ）③　（キ）⑤　（ク）②　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）残忍　（イ）射幸　（ウ）業界　（エ）包囲　（オ）一貫
（カ）浸透　（キ）恣意　（ク）編集　（ケ）否応　（コ）常軌